

のつもりなりしか地役人共恐レ強習禮之節散々不出來に付家來は柴崎秀三郎安井魯人は箸を持つことを不能夫故に蘭館よりさじを取よせ候而食事之時わたり遣し候處御丁寧なる御事めつらしき御料理など其外筒井之高季を殊之外に稱してかゝる奇人と相對すること喜しなと申たり彼國長壽之もの少かるへにみえ通弁官の後ろに居候而書留いたし候等は十三料理畢る長崎奉行其外一同着才也と云日本にては二十前後のものなるへしとみゆ料理畢る長崎奉行其外一同着坐いたし候上今般之開口いたす聊之事なれと云々有之候而通辨之ものはたらき也漸七ツ時過に相濟候歸り之節も音樂也船にては祝ひ候哉三本の檣七夕竹のことくにいろ／＼の旗を夥附たり○給士之もの何分地役人にもは不手際と之事に而組頭たのみ付家來秀三郎九十九かし遣し候將士之内若もの共秀三郎九十九次之間將士等か居たる所に立居たるに來りて手を振りナカサキ女ヨカ／＼といひたるよし也黒田勤番之士夜分に聞に松魚／＼とうる聲もアハ／＼といふさわき聞たるよしなと承るは風也されと日本人常に加り居る也油斷すへからす

○十五日 晴 寄合に付筒井方之參る○魯戎共殊之外六ヶ敷事共申出候而船之參候は是非に押付候而手荒之事を申成し日本之境其外を可相定哉も難計けしき也寄合席へ松平美濃守別事に來候而魯戎には日々帆を干候而いつにても出らるゝけしき近頃の所置甚可怪なと物語候併役々乗込候とも美濃守等之軍兵有之候に付安心之由物語たるに西洋之船甚早し走出候而は中々大炮間に合かね候間美濃守家來之内死を潔いたし家來十九人を我らか家來之内に可召連候其外火藥を仕込候燒船壹艘を供船之内へ加へ可申候に付夫之火を附一同切込可申と之事に付其節は役々之もの共をも無貧着火をかけ可給候乍去おもふ旨も候へは後刻可及御挨拶とて歸したり美濃守は五十四万石之大名なれと殊之外に氣之よく附御用立人也同人歸候而我申出候は美濃守申分尤也され共魯戎之船を燒打候而役々之敵を即坐に打吳候は忝候得共左候而は公儀へ大國之敵を新に拵候に當り不相當也これ畢竟一人は死ぬましとする故より也抑左衛門尉此御

用被仰付候は別命は一日限之ものとおもひいか様ともいたし國家之御爲に身をいたし可申と存候間十七日にもし魯戎手荒事いたし候は、荒尾土佐守は御目付之事に付始末御覽候御老中方へ御聞に達し可被下候筒井肥前守は格別之高年に付御歸り可被下候左衛門尉一人魯西亞船に残候御彼國に參り候は、其帝王に説候御爲を可仕と申切たりよりて中々に美濃守家來卒爾に火などをかけ候天下之事を傷ふこと有は如何に付右等之事は可及斷と存候よりて同家老を左衛門尉方と呼可及斷と申たり右之論に諸人色々談判中組頭中村爲彌罷出候御返簡にも重臣貳人と被記たるは肥前守左衛門尉也右之二人を魯戎に被差押彼國に罷越候様之義有之候は御國躰に拘り候間決不相成候爲彌壹人惣代として被差遣被下度とおもひ切申出たり左衛門尉申にはそは爲彌平日に似ざる不實意也支配向を遣し候は左衛門尉之士立可申哉いかに卒爾なることいふへからす此ことは不相成と大に争たるに肥前守申には同人は一旦御役

御免をも被仰付候は年老たる身をかく迄に被成候御事故老年旁身を捨ることは決りいとすわれ行へしと云故に肥前はならず左衛門尉行へしと云たるに儒者古賀謹一郎も諸人かくいふに一人可殘にあらず決して謹一郎行かむと申たりかくいひ争てはてなしよりて夫よりも先魯戎をこゝろみむとて書簡を遣したるに返事よし左衛門尉より通詞榮之助を内密尋たるに少も子細なし見損したらは申譯に榮之助第一に使節に飛かゝりて御先かけを仕らむと云さまおもひ込居りみゆかたゝこゝろ少々おち附候は明日美濃守家來呼出候積申遣したるに美濃守より四人に直書を越していろゝと論し明日直參左衛門尉と可申談旨申來る夫より歸宅夜九ツ時也此節九ツ半時前後より早きことなし

○十六日 晴 朝六半時松平美濃守來る直に旅中之事故居間へ案内いたし主人のしを出すいろゝと海防之論有て後昨日之家來を可貸と之事を謝し候御見込を申家來かし吳候義等は斷候若異變有之候は、美濃守に

公儀より御沙汰之通打潰候ともいつれとも御役前通いたし存寄無之旨申候處精忠之程感歎之由なと申述候や、暫物語候を歸りたり暮時頃美濃守直書を越今日望遠鏡にて魯船之動静を見詰居たるに船を二十町ほど陸之方によせ其上船中を掃除等夥し實に招待のこゝろなるへし余意はみえず美濃守は家來を夥召連候船之固とは不申魯船へ近き下屋敷に參候終日人しらす我らの船を警固いたし吳可申候間安心候を參候様申來る其書狀に深切之意顯たり厚忝旨申遣候五十四万石之大名かく骨折にて東照宮の御威光別段なるをしるへし○松平主殿頭松浦肥前守來る關東之御機嫌相伺候暫物語いたし候を歸候

○十七日 晴 四半時揃に船上下 御召之御紋服着用細川越中守船に魯船フレカットへ參る細川の船は二階作に或は緋ちりめむの幕有肥前守左衛門尉之弓郎之鐘并細川船手の弓鏡船印等にて目さましく相見候并長崎奉行所附之緋ちりめむ御紋附之まく打たる船も添太鼓并艦拍子にてにきやか也見物夥し江戸などにはなきこと也御實に無双之海峽といふへしこゝに黒田鍋嶋之番所并陣場大村等之陣場所々に多く幕を打

たるけしき船近寄候と魯船に奏樂いたす此時并歸之時はひととて大砲を打こと目を驚せり船近寄候と魯船に奏樂いたす西洋各國の禮なれと日本に於ては禁したりたへは湊へ入候得はいはひととて大砲を打其時余國之船も打也これを合砲と申す也海中にも相互に同じし合砲なればまきれものとして必穿鑿となる也船はしこへは五色のごさアンヘラのことを敷て其下まで下官之もの共出たり上官は船上へ出迎たり異船は三階になりて上は玄關前のごとく下は奥のごとし異人共參候を殊之外に喜びて使節みつから案内いたし武器貯たる所其外をみせ二階はしこ其外に於て筒井の手を通詞共上官共よりて引て下し所謂くつを取らぬはかりと申馳走也上へ之所に別段二階有て其所に使節は椅子筒井其外は床をつくり花毛氈に似たる立派なるものを敷其柔なるし蒲團の類にあらずはりかれのこときしと筒井申しぬ其所に茶を出し大筒并を厚くつみ其上へものを敷たるなるへしと筒井申しぬ其所に茶を出し大筒并小筒之足なみ等いたしませ候小筒之もの并大筒之もの共に木綿に包いと云へぬ下輩也其内に劍を持羅紗着せるもの加り差圖いたし將士といふもの令を下す也一同大に大義也と申たるに使節其ことを傳へたるに一同に請いたすけしきなと熟せしもの也畢る日本と魯西亞之船印を比翼紋のごとく染出したる幕のごとくなるもの

江戸の遊女が勤番ものを欺と申し手也此幕のこと

きもの紅白黄其外いろ／＼の色ありて規式の時なとは帆つなへこと／＼くにかく夫よ
 る故遠方よりはたなはたの竹のことし日本と魯西亞の船しるし附たるは花色也 夫よ
 り下之段をみせたりキヤマンのかけ燈籠をかけ上にもあかり取いつれも
 玉屑也 かけあむとむは内之方はしらによりたる邊はみなブレッツキにてはり夫へ七寸は
 かりなる鏡のことくなるものをかけ其前に江戸の十六文らうそく位の太サに
 シンをは燈しみ壺本立たるに火を附たりシン至細ければらうのへり至少くか、み其
 外へうつる故にあかり殊によるし燈籠に鏡はか、れと万代ものに油の費少しこれ西洋
 也 船へりに鏡の大筒を夥かけたるは晝にもあるかことくさて此所に銃炮
 のあること其外武器之類夥といふも大かた也たとへは鏡の筋かねを豎嶋
 のことくにわたし其間へ大筒之玉を栗石のことくに並へ其上を往來する
 類尤妙也其下へ參たるに使節之部屋也 書籍をつみたること殊之外大造也十五疊
 敷位も有へきが大なるキヤマンの窓有て
 其所に筒井以下之座をまうけたること腰をも 左右に鏡有て帝王并王子次男の肖
 像也 王子次男共に此節もみな戰將となり航海して所々之戦に出候由に軍陣の服也像を
 とるか、みは其人か、みに向ときはあり／＼とつりたるすかたか、みに其ま、と
 なまりて不消それを用ゆる也それは薬を以こゝにて饗應有酒はフランス國の蒲
 萄酒也 フットの露にて作る多くのみても酔少し直にさむる也米同かん酒終りによ
 きにほひの甘き粟もりに似たる酒也肴は數殊に多し米をホヲトロにて煮

たるに鶏の出しをかけたる鯛を魚の出しにて給る 以上先ッ先
 ツ吸物が 牛羊雞玉子の
 類又野菜の酢のもの 酒もすのもの油のつよきものを給胸も
 ち不宜故にす氣を以消すことなるへし 菓子はカステラ之
 類葛もち并うとむの粉に作りたるもの也膳はなし卓へ並へる也白きか
 らくさの地紋あるふるしきのこときものを銘々へわたし候而食こほした
 る時の爲膝かけとす 手をもふき口をもふく此間へ中村爲彌を通したり
 也はなもふくなるへし 別に椅子
 け
 たり器は瀬戸物 オランダ焼の
 さらの風也 キヤマン也 キヤマンを日本に茶碗をあつかふより
 手荒く大なる鉢之下へ重ねてから／＼とさ
 すれと何多葉粉は更になし 火を恐るゝ故なるへし粉もてなしふりの上手なる
 にあはなへ押込と申也
 こと實に驚たり 異國人妻のこととを云は泣きて喜ふといふ故に左衛門尉妻は江戸にて一
 二を争ふ美人也夫を置いて來り候かおり／＼おもひ出し候忘るゝ
 法はあるましきやといひたるに大に喜ひ笑ひて使節も遠く來り久しく妻に逢さること左
 衛門尉か如きにあらず左衛門尉のこゝろを以て考く候へと申たり筒井のわかれを老人也と左
 おもふへからす此上出生あらは再會の時の物語にすへしと申たり魯西亞の諺に五十は
 出生少し六十はなし七十は猶更なし八十は若やきて出生殊更多しと申せば筒井も其諺の
 ことくなるへきを願奉ると申たり詞通せれと三十日も一所に居ならは底には可參人情
 少も不變候顔色も鼻高く白過たるもの多はかりみなよき男に居ならは氣のき、たる
 と申ものもみえ奇麗にて食物を少々盛來りて屢引替こと至る多し日本ならは
 如女わかものみえたり 食物を少々盛來りて屢引替こと至る多し日本ならは
 一盃進上とか可申を賀し奉りて頂戴とて其人の顔をみなからのみ親しみ

とて盃と盃を摺合てそれをのむ也西洋人わかれ其外に互にいたきつきて口をすひ候事禮也其一段輕きは手をにきる也奉行所へ來りて歸りかけに並み居たる御普請役共之手をことくくににきり行たり歸りかけわれも使節に手を握られたり海國圖志にイギリス人わか國の人をあしく申せとも左にあらす女之心別段也わか妻のわれに深切なること實に感する余り其ことを外國の人に暮かたに成候間とめたるを押し歸りたり使節其外船の乗口まで送たり三階之上へ出ればみな劍を抜太鼓をたき奏樂にあおくり下官は三段四段にて三本ある櫓の帆けたにすぎ間もなく並ひ立て遙に暫之間見送也江戸の來實に猿のことし不出 今日元來は蒸氣船其外にも乗移候積なれと薄暮にも成且人の心もおもひて急き歸りたりされと十町はかりにて挑灯となれり今日の事を案事候ふ松平美濃守は下屋敷遊山と号し參り居實は万一の節の下知を傳ふる手當をなし望遠鏡にて始終船の動靜を見居り非番方には鍋嶋の船手大砲をのせたる船を密に所々へ隠し廻し置内實の備別段也よりて夷人を喜ばせたることばかりにて歸り長崎奉行所は一同參りて御朱印其外御用書物を受取互に無事を祝したりけふ土産として筒井よりは牡丹に蝶の料帛箱硯五色奉書帛大小三所物左衛門尉よりは印籠富士山の圖緒しめ根つけ共に櫻にて万世も神の御孫のしるしめす皇國の山の姿をもみ

よといふうた有小廣ふた二ツ衣冠の人馬上の圖也これも日本はかみ下計着たる漆盃三ツあしにつる也朱は外二尺六寸大巾にてかさねもある刀壹本ふち頭鏢目ぬきみなさくらの金蒔繪鞘は青貝さくらのまき圖也通辭を以此刀にて三人並へてこゝろよく胴切にし車骨を如瓜に切たり重過不取廻しとおもふへからす左衛門尉はこの倍より重キ刀を三千ふり位は日々にする也故に此刀などは萃からを遣ふかことくおもひ居候と申たるに人をはいかにして試たると申たる故刑人之屍を切る也これを日本にてタメシと申也西洋人は修行せぬ故にきれましされと腕壹本か足一本は必切へしかる切ると語らせき銘は次郎太郎直勝作川路左衛門尉佩刀と彫腰車大段拂の花亭老人の贊語有荒尾土佐守は五十三次之圖料帛箱すゝり御てく頂戴せしよし立古賀謹一郎は畫蠟らうそく十本すゝりふた二面也これを船中にかさり其所こへつれ行て殊之外に喜ひみせたり印籠はいかにするものと申村爲諸君をおもひ奉るへしと云たり食へぬ奴ツ也

○十八日 晴 四ツ時前揃に西御役所は魯西亞人使節其外呼出候御返翰御渡しに成使節次官ともに綿并紅白之綸子被下之惣中には五斗俵百俵冢二十疋被下之畢御料理被下之花かさり等有之三汁九菜也畢對話

有之これより引つゝき對話之積六ヶ敷御用中之六ヶ敷談なれとこれよりは申サは余事のことし先ツさして身分に及ふこと又は命をさし出すこと十二月はあるましきかとおもひ申候

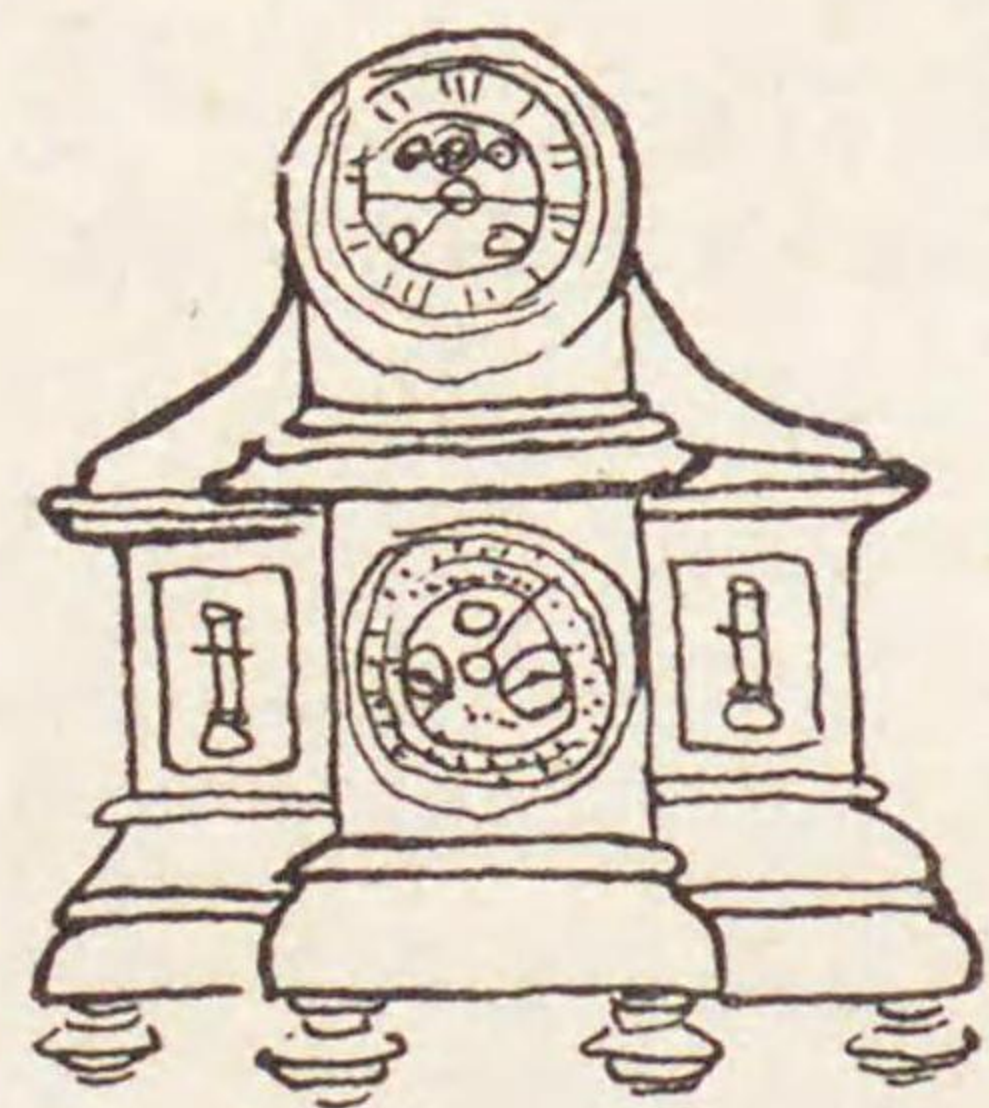
○十九日 晴 筒井の寄合として参る元來は今日五ツ半時に使節之來るはつなれと町使を差出候故斷申候

○廿日 曉終日大雨 五半時魯西亞之使節西御役所之参る左衛門尉肥前守七ツ時迄辨論いたす左衛門義魯西亞は虎狼之國と世に申候然りや信義の國也やいかに道理を守らばわかことに隨ひ候へとて理をつくし候申諭候處大に承伏いたし候而エトロフへ立入間敷カラフトを手さしいたし不申差出置候軍兵を引拂可申旨申之すらと参り可申躰也これ二荒の御神の御力と 上の御武徳也出立前に 神の乗うつらせらるゝ論を申たり思ふへし神人にたくす分毫も私なきとき神の乗うつらせ玉ふ也

○廿一日 朝雨夕晴 四ツ時より西御役所之寄合いたす○魯人より贈物

有月のかたち自然の
とくちのちかけ
にみる也チロ
すも也チロ
シヤは常月
元日は正月
ロシヤは正月
は十五日也チ
圓月は月也チ
なと有月も
時計の本に
申候と箕作
支

いたし候而過日遣し候物之挨拶申述る筒井肥前守へは高サ六尺はかり之鏡キリコにて高二尺余さしわたし大なる所にて壹尺はかりも有へし塔のこときもの也みなり崩に成てさら鉢等と成もの一ツ女のひかさ一ツ也左衛門尉は高サ壹尺はかり有へし圖のことく惣廻りは紫黒色の石にてすゝり石のこまかなるかこと
上の丸キ所に大なる針三本有
ン飛といふもの也それにリン
九ツ半は十二打也小半も打也
の丸に針三本一本は一ヶ月
曜也壹本は一年に一度廻り也これは一年に一度 左右之内一ツは寒暖昇降也一ツは何なりやしらすヲロシヤ文字ことくくにしるし有通詞にも箕作玄圃にも不解一ツは壹尺余のきりこの竹のことき色の高つきをくれたり今一ツは女のひかさ也紋紗のことくにてふさを下ケ象牙の柄也これは江戸一



の美人也とて早く歸り度よしを申たること有はされ御目付儒者迄も贈物いたし候故に贈たるへしおさと美人のこと長崎中に聞へたり御目付儒者迄も贈物いたし候に付魯國を返禮いたし候は、可貫受旨を筒井肥前守自分申上御目付も伺濟也組頭中村爲彌にはラルコル附之時計三寸四方に高五寸計のものを送り菊池大助にもキヤマン器等を贈たり此二人のこと伺になし申談之上爲貫受候一評議之上返禮いたし候積支配勘定以下は贈物なし布衣着用之もの計のとみえたり長崎奉行には手附通詞迄も贈物有此節御老中方に伺中也

獅々は鼻至
ろびくし先
ツムク犬の
はことし鬣と
也大なるも
より大なるも
なるへし大

○廿二日 晴 上様の献上物之義相願是又兼る伺濟に付受取候高サ七尺はかり四枚折をかみ屏風金流金な武者之置ものに時計を附たる或は十八疊敷に如天鷲絨にて厚壹寸はかりの花毛氈目を驚たる錦六卷六尺四方ほとのかみ一ツ獅々の寫眞を織出したる奇絶なる毛せん其外也御老中方にも献上物之義申立候間是は贈候わけ無之候に付及斷候○今日七時半時まで及議論魯人論大に窮し候来る廿五日までの日延相願候に付不承届明後廿四日可罷出旨申遣し候され共甚六ヶ敷事共を申候一時的か

た附無覺束からふとは書面迄可差出旨申立ル其余之事も 神力に宜いたし度もの也

ヲロシヤセンくとりきむてもみろきん玉をつるすものかは

と申候て大に笑ひ申候○江戸より御越之役々御取扱誠心難有奉感伏候旨之書面を出ス

○廿三日 晴 宅に寄合有之候○魯人を書面差出す○公事人ならば追訴趣意書のことし對話には六ヶ敷故なるへし屢屈するをいとふとて人々笑ふ也

○廿四日 晴 正五時揃に西御役所に魯人と對話いたす魯人辭屈し候あいろくと遁れ辭を申候暫日延之義申立候明日之義は用捨之義申聞候日延明後日九時半時罷出度旨申之承置候

○廿五日 くもり夕雨 けふは異國人日のへ願中に付在宿なり○松平美濃守より對話之義申來る筒井肥前守にも同斷也よりて同道いたし候あ美

濃守方の可參旨肥前守より申越乍去肥前守は師弟を由緒有われは由緒なし外藩へ無譯行へきの理なしよりて肥前守御用向に左衛門尉方の來候間其節美濃守も左衛門尉宅に被參候積申遣す今五ツ時來る肥前守一同對話也○支配向一同來る調物其外にて夜五時過までかゝる○久々按摩せす健藏か以前かゝりたる按摩西浦町太田祐を呼候也按摩申もの也呼候を按摩其外いたさせ候かためのひきかへること坊主也十三の時より針治導引にて唐館へ參ると申たり按摩をいたしなから唐人のはなしいたす柔弱なること驚入候唐土の衰たる日本の足もゝてすと申位也按摩に晝八ツ頃より夜四ツ時までかゝるこれは御用談有て屢かれを退けたるか故也今日至るひまの日にて如此○廿六日 雨 四半時より西御役所に參る魯人と對話日くれまでかゝる魯人詞屈して明日までの日延申立る○暇乞いたす時にいたり江戸よりの御重役は難有とて段々申述候ゝさて長崎奉行は云々とて存外之義を申たり筑後守怒て辨せむとせし故日くれ候此次の事とて立せたり

○廿七日 雨 昨夜五半時頃より大にさむけいたすよりて葛根湯をのみ汗をとりたるに曉七ツ時頃吐氣に候哉心下至るくし用人共を呼起して醫師を呼にやりたり醫師の來りたる頃は心下のくるしかりしはよく成たり並々風邪にて此上わるくなることなしと云也され共按摩を呼今日は平臥せりくれ時より快醫師も明日厚着にて出候は、不苦旨を申たり急之調物なといたし昨夜は烈敷傷寒のはしめかと大に驚たり○昨日松かさりするをみて

こゝも又はるをは松のかとかさりこれぞ千さともかはらさりける
今朝醫師の來るまでの内に

君恩未報身將死 怒罵魯戎泣碧穹

天の事也

といふ句をつくり前の二句を考居るうちに快なりたるもあまりの事にて大笑也畢竟遠國大御用を引受其上筒井此節耳遠なること一段まさりたる故に御用濟まで我煩ひてはと深くこゝろをつくる事故なり

○廿八日 曇り大風 魯人と對話いたす書面に可申達旨申諭す此末も御逢ありや今一度フレカッタ船へ肥前守左衛門尉を招き申度或はわかれをおもへはかなしなと云魯人の愛相當にかくの如くにていつもくかゝることにては先ん廻らるゝ也され共必用之談にゐはみな詞屈して日延を申候ゐは書面にゐいふ也魯人の機をみることに殊に早く實は人を馬鹿するといふかことき意有されとも正理を以押ゆれば必無言に成別事をいふか日延を願ふ也○今日日本の番船は大風にお波立候間覆らぬか幸也船中之もの共潤水にて裾より露したゝりて其難義いふへからず魯人はハツテイラに乗る平地のことし船のこと實に残念也

○廿九日 晴 昨日魯戎共申達としくればる來りて屢對話のこと覺束なしよりて中村爲彌を名代として遣へしとて爲彌か彼へ申談かたの大意を今日しるし候ゐ横文字に直させ通詞を添遣し候積にゐ一同左衛門尉宅に寄合申候○松平肥前守對話として來る同人不相替えけしき也暫對話い

たし候ゐ被歸候

○晦日 晴 中村爲彌フレカッタ船へ參候間より合なし○魯西亞船より近く新春を御重役の人々迎らるゝ故に新春の賀として牛を新に宰して其肉を奉るへしと申來る酒并肴を遣候ゐ返禮いたし候積戎狄之意にはつかなることにて背くは無益なれば也魯戎にて牛を宰するは殊禮之由也國君故なければ牛を殺さすといふこと禮記にみえたり魯西亞の正月元日は日本十二月十五日に當る也かの國は閏月なく廿七日晦日三十二日晦日なると有よし也よりて八月十五日に晦日のこときやみも有わけになる也春といふは三四月の頃也

嘉永七年寅正月元日 曇り

こははると門のかさりに驚てふるさとしのふ旅衣かな

論辨季冬到首春 魯戎辭屈乞間頻 只希邊界平安定 永看太平擊壤民

けさ髪を結せなからかくおもひたる故に記しみしに平の字二ツ有追直
 すへし○昨晦日は中村爲彌をフレカツト船へ遣したるに歸遅し飯をも不
 食まち居たるに五時頃に歸りたるよし家來申之まづこゝろ落居たり夫と
 申候通詞一同呼出候相尋候に云々のことにて決着にならず通詞森山
 榮之助といふもの死を決して申談をもなしたるとの事也此の別段なるも
 のにて左もあるへ
 し使節少も立腹のけしきなく爲彌をことの外もてなして通詞へも酒給さ
 せ爲彌へ随ひ參たるもの共にも書などをくれ爲彌にも贈物をなしたり茶
 出
 書物也其外筒井并自分へはオルコル一箱巾五寸長一
 尺はかり也小茄子ほとなる早つけき入二
 ツ子供のも
 ち遊び也以上よき菓子を贈らむとするになし其かはり也との事也御目見
 以上にはみな少々なから有其外一同へ年賀として奉るとて牛を四分一は
 かり白かなきむにて奇麗につゝみ白木の臺へのせ贈りたり其節云々事
 有に付今日も九ツ時より筒井方より合也元日よりかくの如しあまりの
 事也爲彌おもひ込別段也今戦争あらは命を捨るもの多かるへきこと少も

疑へからず日本士氣之別段なるもの也○昨日贈物にさくら酒と云もの有
さくら酒は日本限たるとおもふにと通詞に問たるに唐土朝鮮にはめつらし歸り之土産
 なし西洋には有て其上に實大也其實を以製する酒也と申たり
 と仕舞置せたり昨日中村爲彌に爲待置候は氣之毒也とて其内帆のかけ外
 しをさせみせたるに目を驚たる事之由軍將出て一聲笛を吹たる時四百人の人一
 時
あまりの帆はしら其外へ如猿かけ上り帆つなにくものことくに日本にても軍艦出來
 傳はりてトケイ早廻り三度のうちにかかけ候も收候も出來候由
 候は、かく可被成御傳へ可申なと申たり誰にても直に銃炮の
 傳授などはする也
 ○二日 雨 おろしや船より牛をくれたる挨拶に鮮鯛一折遣し候中村爲
 彌をおろしや船へ懸合として遣し候○今日は所々へ年始として出る長崎
 奉行
御目付古賀謹
 一郎中村爲彌昨夜も歸りたるは四時前也われ昔より六ヶ敷御用に撰はれて
 多く出たりされ共元日に四時までかゝりたるははしめて也○むかし木曾
 へ行たるとき柚の蔭口の柄にするもの至柔にて軽くして折れす必用に
 立へきもの也とおもひて此度きそ山にて少々買たりカンハ又はウダイと
 いふ也木の皮さくら
 たり似これをハツテイラの楫にすへしとて紅毛在留のカヒタンにみせたる

にこれはカムフル木楠のこにみゆれと左にあらず甚たデヤツチ此木し
 及ひエイケン木に似たるやうに覺ゆエイケン木は通詞共は檜の類也といふ也
ふは從來舌官といふ書面を出して申すは近頃松平肥前守より右之エイケ
 ン木は銃炮臺其外になる木なればとていろくみせられたれとみな其も
 のにあらずこれそ必エイケン木にて軍用に必用なるものなるへしハツテイ
 ラのかしに尤よかるへしと申越たり森山榮之助話を以今般參候魯人名前使
 フーチャーチンこの人第一之人に多眼さし船將ウンコースキこれは至多穩當なる人
 布恬廷としるすたゝならずよほとの者也船將ウンコースキこれは至多穩當なる人
 事に少船將次官ホスシエツトこれは蘭語に通して今般之通辨みなゴンチャヤロフ此人無
 も不拘船將次官ホスシエツトいたし諸懸合引受也一通之極才子也ゴンチャヤロフ官なれ
 とセキレヌーリスのことなす公用方取扱といふかことし常ホスシエツトはわれに船
 に使節の脇に居て口出しをするもの也謀主といふ躰にみゆゴンセロフはわれに船
 中に酒の酌などをし食物もちほこひて取持たるもの也○中村爲彌夜四
 時魯船より歸來る同人并通詞とも終日之心痛實に感服せり中々以わか可
 及所にあらず○使節布恬廷年賀として御玄關迄參候義と心得吳候様と之
 事に朱唐昏へ布恬廷としるしたる名札を差越候

船ノ名ハト
 フレカ
 パル
 ハ
 漢文ナラ
 字書にし
 る名
 はすもの
 名
 ガシケ
 イツト
 ヲ

○三日 晴夕雨 長崎之内安禪寺御宮 御靈屋并大恩寺 御靈屋に參拜
 いたす四時揃に寄合有之候夜四ツ時相濟申候○魯西亞人の鮮鯛一折遣
 す魯人を日本ナニと問たる故タイと答たるにロシヤにナシと申
 たると也此節魯人に箸を持覺たるもの有と也

○四日 昨夜より雨午後晴 魯人一條も先 天下之御都合宜可參躰なれと
 後日天下之御爲可患こと有はこと穩に甘く爲行届たく心配いたし居候處
 今般書付相渡候義有之一通は韓文一通は横文字一通はかなにて其かな書
 之方へ書判を据たり右之書を魯船へ持參いたし吳候様申候得共 御國躰如
 何と斷たりしかるに再ひ珍敷ものなと一覽爲致度且は一旦對話等をもい
 たし候もの之處永く離別之事となれば今一度は是非にゆるくと罷越吳
 候様申之いかと考居候砌幸に付右之書面は懸合之節其序に爲彌に爲持
 遣し候る左候は望にまかせめつらしきもの見に參可申とて過日ヲロコ
 ルを贈たる挨拶に脇差白さや直小刀同上七十五錦の袋に入青貝まき書之

廣ふたにのせ候も其廣ふた共に遣したりこれは挨拶且みやけこゝる八時前羽織袴にて家來は野ふくにいたし巡見之格にて參御國躰いさゝかいかゝと如
 此例之通ふねを見受候と奏樂に船之上り口は下官之もの共これははし子
あむべらな敷其はし船之上り候もは次官之もの共軍將等みな出迎たり其次
こいかに立派也船は上り候もは次官之もの共軍將等みな出迎たり其次
之船そこは土藏物置之如し玄關ともいふへき所に使節フチヤチン出迎た
り己か部屋は通したり士鑲炮をもち立てりきやまむの窓の所に新に床をつ
くり花毛氈の美々たるを敷て着坐することく成せり此毛せんはヒロチ其上
 へ肥前守左衛門尉御目付荒尾土佐守古賀謹一郎坐せり其外使節はしめ曲
 ろくに支配勘定御徒目付まで曲ろくに居流たり使節のへやといふも
 のは疊十五疊はかりなる所は花毛氈を敷つめ此所みな草天井は白くぬり左
 右板はめにて惣戸棚之如し板はめはチヤンといふ唐木に似たるものにては有紫
檀などの類より高直之ものに至る薄きはき木也と申
 也こゝにて辨論有都合五七度みな左衛門尉申諭したりはやこれにて申へ
 きことはなし魯人之船へ御重臣之御二人等御出は皇天も喜せ給ひて永く

泰平之證なるへし昨夜の雨も午後かかくまでに晴て使節之喜ひ可譬にも
 のなしいさ此方は可被爲入とて左右へかけ並へたる大砲之所は行て軍將
 一たひ聲を發し候と太鼓をもち居る也角兵衛獅々のことし夫を嚴敷打候やいな
 や所々より軍卒二三百人突とかけ出て大砲の繩をとき調練をする也トロン
ヲをかけ候計業其さまいかにも大騒動なれと一聲も立ることなく臂の指を
はこめ不申候遣ふかことし大砲をくり出し一發し内を掃除して再ひくり込くり出して
 一發せり畢いさこなたへと申候て船之第一番之上へ出たりこゝにも二階
五段なるへし參る度に畫師をつれ行てこゝにて二階へ上りたるに使節みつから
圖をとらせたり詳なるは夫に可告知こしかけを取てわか手とりこしかけさせみつから
 令して將士なるへし劍を抜て一聲を發して差圖すると四百人はかり之軍
 卒共潮のことくかけ出て三本之帆はしらへ上りたり檣百九十尺有日本之曲尺
のなれは一寸は短し高サ百九十尺此時も一聲もものいふものなく口ふへの如

き聲の笛をふく也其時二十八間もあるほはしらへ上り候ことみな帆つな
 繩はしこを傳へ上り候其早きこと可譬ものなくみなあきれたるはかり也
此時前後三艘之ふれみな同じこのまゝにて大洋に走出たらは帆桁を東西に奔走し帆
 いかにせむとおもふはかりに西家來共之内には驚たるも有也 帆を東西に奔走し帆
 つなに傳はり上下するさまは全くに蜘蛛の如しみるく帆をかけ帆を收め
 たり帆つなに濡絆のときものかけ有夫をかた附たるを庫之助みたるに將士出て笛
 なふき候と大勢出て密に仕舞たみ夫をわきはさみ引ことみな悉節度有と也 笛い
 さこなたへと申候而軍將の部や通したりこゝにも如前床をまうけこ
 うはさらさの蒲團を敷たり至あきれいにて軍將といへ共學問するとみえ書
 極やはらか也 軍將といへ共學問するとみえ書
 籍夥こゝはかりに火はちの如きもの有火を禁すること甚し使節其外之所に極寒
 とくに仕かけたるもの也烟草益なしたはこをのむ場所所有てキヤマンのさらに水なれ其
 所に燈を置夫にてのむ也夫故に鼻たはこといひて鼻へたはこを押しみてかく也臺所なと
 惣銅はり也これ夥火藥を貯置こゝにて琴を十三才八ヶ月とかいふ童子と將士
 ば也火藥所は決しあみせぬ也 こゝにて琴を十三才八ヶ月とかいふ童子と將士
 とにて彈たり箱に段々有て下之段に象牙の手札の大サなるものを並へ夫を指
 にて押とからくり有て聲を發する也チロコルの音の如し譜有 此童子
 の父は海軍之都督にて聞たる猛將なりしかこの兒をのこして死したり其
 功によりてよく今もつかはれて且往々立派なる大將なるへしと申たり

以上通詞之咄也此兒の居所に額有て父の畫像をかけたなり如生異國人ながら父子の情いと
 あはれにみえたり惣しゝこの國のもののみな其こゝる也帝王并太子次男之像使節の部や
 け有それより下へ行たるに麓末の出來合のかけ合差出し度とのことにて
 使節之へヤ々次キヤマンあかり取の下へシツホク臺を置たり以前は立わが
 れにて酒を出
し今日シツホクになしたるは別懸といふかことき扱なるへし惣して船のあかり取は上
 キヤマンにて其上へ眞餘チウの格子をはり其上を自由にかけ歩行也いと都合よるし上
 坐に相向て肥前守左衛門尉其横坐使節也大なるシツホク臺なれば魯人之
 方便節船將軍師通辨官書記壹人オ十八 書記壹人これは韓文をよ 日本之方肥前
 守左衛門尉土佐守謹一郎荒尾古賀中村キクチ 爲彌大助一同に右之シツホク臺をとりまきて一
 同に飲食す支配勘定御徒目付は隨從官之内にかりてこ
 れは別に一席也 御目見以上は難有もの也 羊飯其外牛肉ふたの類或
 ホヲトルをかけたる類也ロシヤ帝王日に二度の食事に五十の盤を並るといふこと
 魯西亞國史二賦税章十八の部にみえたり彼國飲食に奢こと
 へし其間にはなしなしたきこと有は詞は通せねは互に目を見合頓て通
 詞を呼也啞の寄合のことし乍去飲食其外のこと人情みな通す廿日も同居
 したらは多分は差支あるまし少年の書記よき男にて温順なる才子也手ニテまねき
 たるに來る酒を吞せたるのむ也汝は才子也わか子
 日なるかといへは笑ふ也女を知居るかと聞は笑ふ也至あよき少年也このものはしめか今
 日まで使節に影のことくに從ひて日本人のはなし其外共みな手帳にしるす十八才五ヶ月

也と少年也不凡 知 軍師わか扇子をみて稱る故に汝に與へむといひたるに通
 詞を以常に御手にふれられ候品を被下忝候由を申頓て懐をかゝくりて
 トケイを出し其くさりを取てわれにくれたりいかに斷ても聞すよりて
 もらひたるわかトケイをみせよといふ故に龜物赤面なれとみせたるに其
 くさりをわかトケイにつけくれたり其躰をみてわかトケイを使節見て時
 少々違へりとてケンを直しくれうらを開きとくとみて歸したりしか頓て
 くさり有はトケイなくてはいかゝ也奉るらむとてへッコウの箱に入たる
 至あうすきトケイくれたり 申てコノ事興に出たるに似て左にあらす扇をくれよかしに
 ケイをくれたれと歸りて箱をみれば川路左衛門尉様と申札を入て有其上に暖也何度也や
 といひしに寒暖計を筒井にくれたり歸るとき羅紗に似たる木綿のこときものを筒井荒尾
 古賀にくれてわれには何もくれすこれをもて押にわれに別段のものなく 夫を使節の
 部やへ通し再び辯論してこと畢りたれば歸らむとせしにしはしまち給へ
 又再び親しくものいふこともかたがるへしカラフト嶋にて再會せむやよ
 しはしと引留て蒸氣車 これはよき焼酎チャウをもやして夫にて廻すくるま也ムス
 コウよりへトル日本道二百八十里を人五百人をのせ數艘の

車を引て一日をシツホク臺の上にて廻しみせたり 五寸ばかりもあるへしその
 に行と申也 次へ出て江戸にてもする影繪をなしてみせたり 飛かことくに廻る也 禽獸天
 地之理五星之眞のかたち或日蝕月蝕三ヶ月十五夜の譯月中のけしき日輪
 へ世界のつきて廻るさまなとみせたり其仕かた至る巧にて引替躰みえす
 自然と變するかことくにて且九尺四方ほどの白布一盃にうつる故虎其外
 の獸實物之如し 前の酒宴の時よりかけ書の終まで始終奏樂
 にてロシヤ歌を哥ふこと一寸のやすみなし 長崎奉行は兩人共御
 役所に詰候而手くはりし其外内には固メの人數も有はこゝろいそきて歸
 りたり日本の船へ乗移りて少しこき出すと例の口笛之聞へしか忽帆はし
 らへ上りて殊之外にかゝやく手にもちなから花火をつけて持居たりしは
 しか間數町のうち晝のことしこれ兼あきく火術にて右を以われらを祝し
 夜分を見送をするなるへし五半時西御役所へ歸りたるに人々待受て無滯
 を祝し夫より江戸に之書狀等を出し夜九ツ時歸宅也

○五日 雨 宅調今日魯西亞船之内蒸氣船上海へ向出帆せり ○昨日氣く

はりはなしたれと少も勞とはおもはさりしか今日ことの外寐むし按摩を
とらせたり八時頃臥候故なるへし

○六日 くもり 西御役所により合有之候○今日は暮六時に相濟申候め
つらしき様に覺申候○魯人の時計を挨拶に十兩余のもの買足候る三所物
遣し候かくししたる跡にて魯船より支配向歸り來りたるに魯人殊々外
に承伏してわかおもふ如くの受いたし候上に歸りの節の着用にせよと
て毛にて織たる羽二重とも可申哉一寸を見つき龜あやの如きもの二丈は
かりと遠目かねをくれたり無余義八丈嶋二反ちりめむ二反うね織二反を
遣し候けしからぬ散財也

○七日 くもり 魯人對話跡に近々出帆之由に付御料理被下有肥前守
左衛門尉も同席に給申候魯人日本の酒をのみならひ候やみな一合二合
位も給候魯人器用のものには箸を用ひ飯の三椀ツ、も給候もの有之候魯
人長壽のもの有よしなれとみなとしふけて三十二と申に五十余にみゆる

も有其外十三四十七八ものみな日本人よりとし二ツ三ツも多くみゆれ
は旁長壽もの少なるへし肥前守に長崎ははしめてかと尋たる時三十二
年前に長崎奉行たるよしをいひたるに殊に驚たる躰みえたればわれいふ
肥前守の年を字にてしるせば喜也漢字草躰の喜之字也高年にてよろこぶ
といふ人の盃をみな受候へと申たるにことの外に喜ひてわかはなかみへ
しるしたるはいたゞきて懷中しみな二ツツ、も又酒を給候日本に盃の取
替せといふかこ
とときをいはひ奉るといひて格盃にもち居て酒いつれも今一度飯に酒にても
なつかせ其人の顔なみながら一時にのみ事也と云て御笑ひあるへしと通辨官い
ひ軍師はよほとシヤレものといふかことき風なる男なるかいさゝか酒き
けむ躰に赤夥頂戴といふ手まねをなしたり其さま咽の所へ手やり又頭へ
手をやりやかて頭上へ高く手をさし上げてうなづきたりこれのとまてつま
りたるにあらず頭
までもつまりたりかしたらまでもつまりたるにあらず頭
の上へつみあげたるかことくになれりといふこと也おもはす其躰にみなトツと
笑を催したり夫より出帆に付使節其外へ被下物有使節へ縞ちりめむ十反越後
ちりみ五反次官は縞ちりめ

段五反ツ、通辨官は別 魯人共殊之 外和らきて何卒此次罷出候節肥前守左衛門尉之懸たらむことを願ふ旨申立るわが先妻の死なむとする前に母上へ今世にて御禮を申上度と申たるに母上の驚せ給ひてあはたし御手を振り長崎奉行其外は挨拶いたし立歸候別段に大澤豊後守に向ひ私共参り不申候は、す御迷惑なるへしと御察し申上候國君の命人臣之分いたし方無之候さて豊後守のみならず奥方其外親族のまぢわひいか計ならむとおもへは深恐入候其旨御歸り之上は宜と申たり其外長崎奉行へ向ひ役筋之事とは乍申今まで耳さはりのことなと申たるはかくなりては可申様も無之氣之毒也不相替におもひて憐を垂給へなといふ異國人の詞の上手なること根のおそろしき可憎也使節の妻はイキスの女也と承り候さくら酒といふものをくれさくらも有といひし故其圖を求たるに通詞クンコウスキ寫眞してくれたりこゝめ櫻といふかこときもの也高サ壹丈余にもなる叢生するもの也といふ也尤實もはなも葉も似たる故にみ木のこと迄は不論日本通詞かさくらと定たるものなるへし

ゑみしらかめつるさくらは日のもとの犬さくらにも及はさりけりと申候あこゝろもちよし今日魯人の遠目かね反物爲持遣す明日は出立い

たすよしなといひて厚く謝したり遣し候もの之内裸人形に腹を押は音を發する有は使節の子孫繁昌の意を表口したる贈り物也と通詞答たるに大悦せりと也

○正月九日 くもり 昨夕より風邪殊之 外片頭痛強眼中まていたみ強し 平臥御役所施藥方醫師間野俊庵へかゝるカマウンの類なるへしと云

○十日 晴 少々快よろし

○十一日 晴 大に快よろし此節御役所附施藥方醫師太田祐慶にかゝりはり并按摩いたしもらひ候大にするし有

○十二日 くもり よほと快無理なれと押あかみはかりを結より合いたす○今晚十二月十八日まで宅狀來るいつれも御無異御老人様方御機嫌克と之御事恐悦也○今晚も夜八ツ時までより合也粥なと差出候

○十三日 晴 不快全こゝろよく右に付長崎奉行一同巡見として御藥園御武器庫會所蘭館の參候蘭館といふは西御役所下海面を新に築立候あ巾半町長二町余はかりも有へし則出嶋といふ所也門内はカヒタン壹人通詞

毛の如き穴に
有る夫より
附木を以て
燃立候は水
や火を以て
沸立候は水
かゝる銀を
其内に置
いせしを
銀に即する
也白事類

其外出迎いたす夫カヒタン之住居へ参る住居は海岸へ高く造り出し二階造也二階はみなヒイトロ之障子にて門其外共にみなロクシャウ塗也花美をつくしたる座敷也座敷はたゞみも有よほと日本風を加へたりこゝにて酒菓子等差出候夫カヒタン部屋は案内いたすこゝには外科醫も居たりいろ／＼と究理之道具をみするみな手つま遣ひのことしみな大に驚其内近頃アメリカにて造たるといふ脈一ツ動くうちに百里之内にも通達合圖の出来る品を拵かゝり居たるをみせたりこれはエレキテルとジシヤクとを合たる法也故に其先を握るに手ひひきて手をつかみ居れば十人も廿人もみな同じくひ／＼く也九十九人持居たるに強く仕かけられてアツといつて倒たり其外ものをうつす魔法としらぬものはいひもすへき怪敷かゝみいろ／＼とみせたり其内に女房悻娘其外うちよりたるをかゝみにあり／＼と寫しとめたるかゝみ有其外可憐は國のたよりに妻か贈りたるといふ髪を毛をきり夫にて草花をつくりヒイトロのすき畫にいたした

る或は兒らかかく成生したるとて寸尺をきぬいとてとりたる其糸或は女房の顔はかり寫たるかたちあり／＼とみゆる鏡等を出しみせたり外國の人の情かくの如しけふは御用ながら手つま遣ひを呼たるかことく樂しとなれり目の玉をくり出して切さき腐れぬ藥をかけてこま／＼しき血しほ滴たるまゝヒイトロ器の内に入れたる又は五臟六腑迄手にとるかことく腑わけをなしたる圖等有月のうちの世界をうつしたる有人のすむやと問たるに冷氣にて物の生育は有ましと答たることなとも有之候

○十四日 くもり 唐寺其外巡見として参る見るへきものなし長崎奉行へ向ひ昨日は野師共御見せなされ今日はふる道具や也とて笑ひし也唐館に参る船主其外みな出迎たり其けしき築地やふれ軒かたふきて荒村の古寺のことし唐人共はいろ青くやせて喪家の狗饑歳の乞人のことししかし例によりて坐につきたるに蓮實と龍眼肉をいれたる砂糖湯燕巢の砂糖湯スといものは凍こんにやくかむてんの如きもの也其外一卓の食物を出せりみな菓物也書をこのみたる

にこの節の次第故氣力なし乍去御奉行の御前故一二枚をしるすへしとて顔亮生といふもの宋詩又は梅花等を書きたりいつれも拙の極也され共運筆の次第等はよろしこの節は夏船冬船共に不來故に歸ること不能其上故郷は戰爭のちまたと成日々合戦やむ時なしなと聞ゆれば哀しみて日ことに關帝堂みくしをとり或は泣或は色を直して如死なり居るよし也砂糖其外共に遣ひ切てみな市中より買上なりと承る唐人共貧相なるけしき亡國の民となれば相まてもよからぬにや

○十五日 晴 長崎所々御臺場其外巡見として參る○松平肥前守新臺場殊に宜出來也十六万兩かゝりたるといふ也甚感服せり今日にて全御用濟に成

西の海てさらりとけふの御用濟御早く歸りマシヨク

○十六日 晴 長崎奉行御目付に爲暇乞參る○長崎諏訪之社といふは第一之大社也然るにいまた參詣せず日々門前通行計に付今日參拜いたす

○十七日 くもり 昨夕の入り殊によろしけふは必天氣なるへしとおもひたるに昨夜より雨にて巳の時より晴也俄にけしきのかはるは佐渡によく似たり○けふは用達通詞其外之もの共追々乞暇として參候○水野筑後方今日の出に山に松ありて村つる之圖を越して讚せよとの事也筒井古賀なども同しくするよし也詩とおもひたるに不出人來り支配向集りて御用煩し斷かとおもひたれと強之事故に直に筆とりて

昇る日にかけて崩れぬ山のみか君か万世鶴よはふ也

としるし遣したりよくはもとよりなし火事場のことくなる所之即吟に家來共驚たり

○十八日 快晴 挑灯引に而出立はつか四十日はかりなれともはや來ぬことをおもへは殘をしきころ有も可笑○市中所々の役々出る少々なれと懇意之かにて三里又は十里はかり送るものも有御代官は日見峠一り半まで送る也○大村丹後守城下即大むらといふ所に止宿也來るときは夜

すからにて此所を曉に通しし也

○十九日 終日風雨 大村より彼杵にいたり止宿此みちはつかに五里也
かく泊ること長崎奉行の例也これは村によりて止宿ならぬ所有よりて領
主より茶屋を立置てそれへ馳走人を附置こと也料理も三の膳附にてす
りふた其外三種にて菓子まで出る九州并毛利領は日々かくのことしいつ
も見たるはかりにて可憐子孫の爲に饑餓のみちをつくりけりとおそれお
もふ也鶴匠鷹匠役の末とてよからぬものに極り居るはしらすく天物を
多く費す故に遂に天のとかめを受る也それをはしらす孫子によき衣させ
うまきものを與んとて人を恵むことしらぬものは其子孫乞人非人のこと
くに成か或家斷絶すること疑なし以上のこと十人に八九人は間違ひなし
五十年も立てはよく分る也

○廿日 朝雨午後晴 彼杵よりうれし野に晝休塚崎へ止宿きのふよ
りの雨にて川々留りたれと山川故に間もなく明へしと事也これは西國

の山川はみな岩橋なれば水いつれは其上を流るゝ故にわたりかたし万葉
橋の云々といふ冠辭あり近き隔近き契
りなと、有と覺たり大石を並たる故也四時より出立して故なく塚崎に止宿せし
也こゝは松平肥前守茶屋にて庭に温泉有至るよろし領主も時には遊覽の
地なるへし

○廿一日 晴 六半時塚崎を出立いたし候此所大手鍋
鳴の領也晝休いた
し佐賀の着○佐賀領先達此所大手鍋
鳴の領也は夜九ツ半に出立せし故によくもみさりしか
けふみれば縮類着したるもの一人もなく領分へ入候此所大手鍋
鳴の領也既三日からかね赤
かね類の火鉢至此所大手鍋
鳴の領也まれ也九分は土也これは領主にて異國船御備此所大手鍋
鳴の領也の大銃鑄
立に寄民間の銅器を禁せらるゝよし也されはこそ此度魯西亞人此所大手鍋
鳴の領也の使節此所大手鍋
鳴の領也布
恬チヤチン廷チヤチンをはしめ大將分此所大手鍋
鳴の領也の共乗組候此所大手鍋
鳴の領也フレカツトより運送船此所大手鍋
鳴の領也に行たるに
歸さに風甚なりければ岸へより漕候此所大手鍋
鳴の領也の臺場見はり此所大手鍋
鳴の領也の内此所大手鍋
鳴の領也乗入たるに忽に
相圖有て大銃へ玉こみして覆ひたる幕を一時に取拂たるけしきに異人共
大に驚て出むとせしに鍋嶋の早船黒船といふ幕を打内は
みえぬ様にいたし有數十艘乗出して異船

を取巻候や否士共二三に忽に異船乗越たり異人共言語は不通只青さめて手を合せおかみ居たり其躰をみて勤番之長崎手附乗附候も穩に可取扱御趣意申聞異船を引出し候も返し遣したり其時の心もちよさいふへからすと手附共家來の物語たるよし也○此以前松平肥前守入來之時支配向打寄御用向いたし居茶屋殊之外狭かりしかけふ來りみれば廊下を附て別段に奥ふかく十二疊之屋敷を建られたりこれは今般肥前守の公儀より御頼み大銃鑄立一覽として一夕逗留之節肥前守閑話として參候爲之由大家之取扱に驚入候○肥前守より鳴七ツ其外魚類夥一間之臺へ山のことくにつみ野菜并香物を同しく一臺につみてくれたりいかむともすへき様なし下役より家來道中師迄にくれ遣し候

○廿二日 晴 佐賀の御頼海防之石火矢往來に場所所有之候に付見置之義無急度松平肥前守申に付今日は一日逗留いたし候も六半時之供揃に參る往來に 公儀石火矢鑄立所と申候大造なる杭打有之其所に天井まで

はり立派なる會所出來番所其外共嚴重也今日參りたるに親屬家老鍋嶋安房家老鍋島志摩懸り之由に門内に出迎たり其外物頭等懸り之面々は門入口に夥出迎たり松平肥前守脇差計に繼上下着用會所之庭迄出迎たり此所昨日附ケ廻り之家來方申聞候間上使等にも無之候よりて供之家來は爲開組頭間夫ニは困候由を以再々應斷けれと不聞入候也如此并御勘定御普請役召連參り刀を取候も肥前守の及挨拶候と肥前守先立に會所に通し候も茶并菓子出る對話中例之通手を附被居候自分手を附居候故也夫のみつから先キ立に大銃鑄立所被爲見候も夫々之講釋いたし被爲聞候いやはや大造なる仕かけ也川をせき込候も二寸余之厚木にまつくりたる長四十間はかりなる樋へせきあけ末を瀧にいたし候も水車を仕かけたり返照爐はいまた九分通之出來に付右之場所は別に家製之大銃仕立所に一覽いたし吳候様と之事也右之所の參候處返照爐にて一度にズク鍊一万貳千貫をふき立たり昨夜九ツ時に仕かけ今日四ツ半時にとけたり返照爐といふはタ、ラを不用して一度にスク鍊をふきて鑄物ながら鍊を銅之如く柔になるを以大銃をつくる

也こゝにて水車を以大銃の穴を明或は大銃を切或は仕かけに而一万貫目も有ものをはつか三人にてあけおろしを自由にする也それを見畢候而歸り懸肥前守旅宿へ過日入來之禮として參候處親族家老其外夥玄關式石之左右へ平服し取次二人玄關式石之半迄出迎たりこゝにて申置候而罷歸候肥前守從來之懇意に付對話としてゆる／＼參候由に而八ツ半時を被參候手みやけとて手樽一ツ重つめ三重被賜たり被參候と供は追而迎に參候様と之事に而被歸たり此本陣狹しとて六七日前迄に別に坐敷を被建たり則右之所に而通したるに日くれても物語つきすよりて夕飯を差上度候得共旅中其上左衛門尉方に而造りたるものは却而なめけ也手みやけのもの奉らむといひしに尤よしとの右之品々にて酒を出し夜四ツ時頃迄いろ／＼と物語有舊作之詩など認められて左衛門尉にも強而しるし候へと之事に而扇を被出ければ魯西亞人の云によりて彼船に乗て歸さにといふ前書して

二荒山神のめぐみにこともなく再ひ歸るわかやとりかな

と肥前守之扇へ記して參らせたり順作良右衛門呼出し酒を爲給且いかゝしてしられけむ宮崎又太郎原甚藏といふ家來に逢度と之事也甚藏は日田へ羽くらの代參として參りたれば其ことをいひたるに聞濟れて再ひ酒のみ物語して夜四時に歸られたり肥前守節儉にして領分之百姓難有ことなと實に當時一人なるへし二十年來の懇意なるに以前は二三段も又すゝみたるかことし今夜納戸使にて反物代銀二十枚くれたりいかに懇意なればとて可貫にあらずよりて夫は差返し候

○廿三日 晴 六半時に佐嘉を出て神崎と云所にて晝休いたし田代にいたり止宿○此所は豊後日田に近しよりて高橋古助殿被參候例之通酒差出候而いろ／＼と物語なといたし候古助殿末子當年十六才之由參候相應に相見候紋附之小袖遣し候日田郡代池田岩之丞來る一寸逢候而御料所之事承候而返し候日田の百姓廣瀬求馬并同人倅孫共召連來る今般之御用濟を悦候而當人并弟子共までより詩一篇を贈る求馬は當時詩も文章も宜行跡

も宜候老儒は此求馬壹人なるへし生國之外下ノ關迄も行たることはなく諸侯之抱を辭して御料所之百姓たること實に別段也このもの別段之取扱せすは道を敬するの理に背けりと則子并孫には次之間に逢麻上下一具ツ、遣し求馬は先生は當時之大儒也願くは教を受度旨を申候而同間に暫物語をなし先生御寒むからむとて縮緬紋附の羽織を手つから着せ遣し候求馬來りたりとて復太郎など大に驚き召連候蘭學者箕作元甫共に彼旅宿へ行て逢其高德に感し歸りたり日田大原八幡之神主禮として參る是は今般魯西亞人と對話之時用ひ候中啓貳本之内一本は立派に箱をつくり廣瀬求馬に箱書をさせて八幡に納たれば也此八幡に安泰に御用濟之祈禱をなしたるよし古助殿も御申越且外にいさゝか思ふ旨も有はかくはなしたる也豊後陣屋附之庄屋其外之もの共大勢來りてわか行列をみむとて往返三十里之所をけふ田代まで來れり

○廿三日^{四カ} 雨 六半時田代を出立せり池田岩之丞手代共は宿内へ出て送

りたり古助殿は本陣へ被參候廣瀬求馬父子并孫は宿外に平服したり壹町はかり過て田の中に日田之百姓共大勢平服して居たり乗物之すたれをあけ置て目わたしたし遣し候原田といふ所を少々廻りて大宰府之天神へ參詣いたす此天満宮は末社其外共に社領三千四百石也といふ立派なること也この坊は大坂町奉行之時出入に其かたへ行たり驚はかり之料理を出せり乍去急候間見候計に目録遣し候而出立候

あはれみて神もうけませ大御國たやすかれといのるころを
螢なすえみしか燂打けたむみそらにみつる神の光に

などおもひつゝ候急きて山家宿の晝休へ參る兼約にて松平美濃守此處に待居られたり則同人茶屋へ參る例之通家老其外玄關白洲に平服せり美濃守は表坐敷之次玄關之次へ出迎たり泊まては三里也江戸にては閑談もならずゆるく物語候へと之事に酒など出申候今日御出に付拳の鶴并鴨一羽を進上之事に手つからくれられ鴨は途中にて御用ひあるへしつ

るは江戸には珍しく御屋敷へ廻し可申と之事也定る歸り前に着なるへし薄墨の大成つる也それより慰にとて持參の刀共夥みせられたり正宗行光神息等をはしめにて一々に眼を驚せり其内幸ひに八分通りは鑒定當りたり其内に兼定のことくにて至るわかき刀一本有これは愚眼にては了簡附不申候間いつれとも難申いつれ上手と相見候と申たるに美濃守抱之銀治か去年打たる也美濃守殊之外之喜ひにわか鑒定を深く賞し刀二本右之銀治につくらせ贈り可申と之事也や、日くれに成冷水峠といふ上下三里の山みち有は戯に

としよりの冷水峠越るとてかこにも乗らす長刀さす

此次第に付御免可被下候とて本陣へ歸り着替候る右之峠を飛か如くに歩行して六半時頃に内野へ着せり

○廿五日 大風雪并あられ さむさかきりなし六半時に内野を出立して飯塚と云所にて晝休いたし木屋瀬茶屋本陣に止宿

○廿六日 大風よほと雪也 昨夜五ツ時より手水鉢氷たり今朝のさむさ昨日より甚し六半時過木屋の瀬出立いたし候る黒崎にて晝休小くらに止宿此所には家老其外城外へ出迎ていと晴ばれし

○廿七日 くもり 昨日之躰には商人船さへに不出といふことなるに夜中風收て今朝は旭かけさやかにさしのほりたり四ツ時豊前小倉を出て九ツ時過長門國下關に着いたす一昨日よりうら賀之異國船渡來之説いろくくと申いまた不治定其内に立花の飛脚の咄也といふにうら賀之五艘來り内蒸氣船一艘は猿嶋へかゝりたるといふよし也さる嶋のかゝりたらはアメリカ船にゐるベルリ之黨なるへしと江戸にてはいかにやと昨日は少もねられ不申候

○廿八日 くもり 六半時下關出立いたし吉田に晝休いたし舟木に止宿也○異國船のこと毛利家の相尋候處取沙汰はいたし候得共たしかなる事は不承旨申答候然ル上は僞歟しかし途中に武家方之飛脚躰之ものに逢

候る承り候處薩州之ものに於十四日にうら賀の異國船四艘渡來之由承りたり其餘はしらすと云され共毛利家に於はたしかに答候間彌おもひ煩ひ候

○廿九日 くもり午後快晴 六時過舟木出立いたし候る小郡に於晝休いたし七ツ時宮市へ止宿十里のみち皆歩行也○大道村と宮市の間に佐野峠といふ所有松山の上にて大海入海田畑農家其外九州之山々等一眼之内にあり長崎は中國の五十町七十町壹里を三十六町に直し往返にて九百里也といふ也其内に於一二を争ふけしきなるへし○長崎は出立之頃白梅は落花にて紅梅の八重さかりになりしか此邊は一重の白梅半開なるのみ也玉のうら玉とちりつるうめのはなまた此さとはつほみ也けり

○二月朔日 微雨 六半時宮市出立いたし候る福川に於晝休いたし花岡へ止宿けふは初午との事なれと太鼓の音更になし少女は茜木綿のきれを

髪へかけ胡粉を如白壁塗居候

○二日 雨 六半時花岡出立いたし候る高森にて晝休關戸に止宿○今日に於十四泊長崎より江戸まで三分一之みちにならすされ共旅につかれて雨といひ別あきくせりそれに付るも母上の二ツに四ツの子を御つれ被成小もの二人御供にて初旅に江戸まで御旅行さそ御困苦之御事と恐入候

○三日 くもり 六半時關戸出立いたし小瀬川と云所にいたる此川渡より西は周防國に於東は藝州也玖波といふ所に於晝休いたしこゝより船に於宮嶋の前を通り廿日市に止宿○藝州領となれば目に立て海山のけしきも宜村もよろしされ共領政はいまた不聞及候○けふ旅宿によき松庭に植有をみて竊におもふこと有て

おもしろき姿をみする庭の松棟木とならむことは難かり

○四日 晴 七ツ半時廿日市宿出立いたし候る海田市といふ所に於晝休

西條四日市に止宿○この海田市といふ所には妨蠟カキをつくりて渡世とす大坂に出る藝州のかき船これ也こゝにてかきの汁かきのつゆものを出すいづれもよろし元來藝州領は至る處末なれと此かきはかりは食らるゝ也尤領主にる處末にするにあらず入用は多かり居なるへしたとへは茶屋に臺子は有て何も備居なから茶はなく立派の手拭かけは有て手拭はなしこれ其筋をものゝ如何しるへしけふ廣嶋を通行したるに例を通大造に横丁々々の木戸を打或は戸に圍ひいたし候而其所に町名主共罷出大手には町奉行出我供立の前は五人若黨之人騎馬に先乗をなしたり廣嶋の町麴町位もあるへきか備前の岡山肥前の佐嘉よりは遙によるし乍去家來共いふ食物みせ或は翫器を商人其外吳服やに奢侈のものつるし有などは佐嘉などにはいか計かまさりけむこれ近頃領主を貧なる所謂なるへしとよくみたりといふへし我も同意也けふのみちすから大なる雪ころかし或は雪をかたつけたるか道邊に山の如くつみ有其さむさ信州寒中のことし

され共氷なしけふ途中に町便急キの飛脚躰の者を見かけたり又しも異國船かと四日市に承たれと更に不相分候尤先キ番を御普請役よりも異國船の風聞いまた取留不申候由申來候

○五日 晴 六半時過西條四日市出立いたし溜市に晝休奴田本郷に止宿○昨日之事追々尋参りたるに溜市を役人云薩州大坂藏屋敷より當月二日出急便にて薩州に途中に出逢次第可相渡旨を書狀と之事に事柄更に不相分候今日九時半時着なり五十町壹り七十町壹り也といへ共さほとはなきとみえたり

○六日 くもり夕雨 六半時奴田本郷出立いたし候而備後三原に晝休いたし九時半時過尾道へ止宿尾のみちは家數一万軒有といふ左もあるへし其繁昌大坂のことし其上に入口に夥塩濱有右等を合て此所計に七万石以上ものなるへしかゝる領分にて貧なるとはつやくわからぬ事也三原よりをのみちの間入海にて絶景也三里の間海ながら湖水のことく

箱根の 湖根の にて實に別段也○本陣に大閣殿下より給ふ所之粟田口國吉の陣太刀大閣より玉ふ所いかし有つゝの筒御ふみ之御書損を戴置たる有一覽いたす夜八時同役之急御用狀來るアメリカ船うら賀之渡來いたし候に付差急歸府いたし可申と之事也

○二月七日 風雨よほと之事也 七時半時尾の道出立いたし候る神邊にて晝休いたし七日市といふ所迄參たるに出水に橋落たりけふは止宿といふことなりしか中村爲彌之了簡に隣村にて橋有之候場所よりわたる百姓わたしに付橋の中はつかに壹尺ばかり急流出水にておそろししかし無難にわたる馬荷長持は不相成用人共を殘し置

○八日 くもり夕晴 六半時矢懸町出立候る河邊と申所に晝休いたし板くら宿にいたるこゝには木村民藏か従弟妻の親類其外有て民藏を從來召つかひ候る家老用人迄も被用難有右之御禮とて袖へし肴其外を差出す目錄遣す順作心附にて昨夜松平内藏頭より贈候酒樽を民藏妻のさとへ遣

すことに喜び候由也民藏にいたくら宿にかく親類有は召連べかりしを身寄なしと聞て今般之供に不召連事くれゝも殘念也後悔すれとも詮なし民藏に對し候る申譯なし同人もかくあらは今少しは咄候るもよろし例之謹深き男故不申なるへし感心もいたし又殘念にもおもふ也板くら宿より吉備津の宮に廻り候る參拜此宮は 景行天皇之皇子の御陵也といふ也こゝに世に聞へたる鳴釜有火を焚は必なると申也釜殿と申所に有きひつの宮に參拜之後右之釜殿へ參る巫女出て火を焚シトキをつくる右之釜はしめはほらの貝の聲の小なるかことく牛の吠るかことく鳴出しやかて夥鳴たり唐人ならば如雷といふへきは必定也一同大に驚候る偽ならぬことを知りこゝの神主は堀家權平か親類にて其祖父消息文例サキ草を書たる男也今の神主も少々は文字あるもしるへからすこゝを果て岡山にいたり止宿吉備津は唯一神道也と神主は申たり可疑兩部とみゆること多しふるき一切經なと有

○九日 晴 天氣殊によろし

あさ日かけ昇るをみつゝ旅衣東に向ふこゝろうれしさ

六半時岡山出立いたし候。片山といふ所に晝休三ツ石に止宿。○岡山にも民藏か身寄有て肴をくれたり。岡山之町奉行昨夜路傍に平服せり。山内權左衛門と披露せり。同人は聞へたる留守居に以前知ル人也。機嫌聞として參る面會候。異船之風聞なと承ること。くく白髪也。年齢を聞は我と同年也。われもしかあるへしと歎息せり。○昨日吉備津宮に釜のなるを聞なからなるこまや仕官する身は世の芝居當れとこそはうやまつて申す

或人もしホ、うやまつてでなくては鸚鵡石になるまい。いやホ、といふことは嫌ひ故にわさと申さぬこととムリ升すワル口なんだシクハンいやはや芝翫きとりも馬鹿おやじあきれるそよドロシテ芝居か當るものか。ヒ井キそむなにいひなさむなあれも今は千兩役者の株たよ見巧者イエサ人かないらからさ

○十日 晴 此ほと途中に飛脚躰之ものに逢は必異國船のことを聞也

其を打合ておもふに去ル三日は大師河原沖迄異船乗込たること、聞ゆ三艘也。以上より昨夜少も不眠けふは三石を曉六時に出立して片嶋にいたり晝休七ツ時よほと過姫路に着支配向一同評議之上此節は可致身の時也。せめては旅行にても早くすへしとて曉八ツ時之立に申付候。これより足のつゝくたけは歩行して江戸へ一時も早く着之積也

○十一日 晴 曉八ツ時早メ出立いたし候。五十町道うち交候。十六里のみちを経て兵庫へ止宿。○一の谷まで參りたるにならの長吏出迎として來る兵庫の旅宿へ法隆寺地中普門院來りて惡魔降伏之御札并よみうた等差出なら奉行所出入之百姓喜三郎町人小嶋や平右衛門來りてなら縮并御札等差出候。大坂よりも林才二郎來る明朝も正八時之出立なれば旅宿之混雜大かたならず候。喜三郎へ横麻上下兵右衛門之羽織遣候。聖德太子之祈候由或は 神功皇后之陵之屢いのりたるよしなといつれも深切に申す。僞も

あるましならより二十里も我に逢度計に入用をかけて去ル七日已來逗留して當テもなきに待居たる也○去年姫路に止宿の時わか荷を持たる人足湯釜の落大やけといたしたる故金二分遣したるよしは其頃の日記に記したり昨日尙又糺したるに三日目に右をやけとに死したるよし也親も子も有よし故香典として金三百疋遣し候ひめ路之代官禮として來り候道中師の話に右之人足はよからぬ者也と去々年姉は井に投して死し弟は首をくゞり去年は彼みつから過て煮かまのうちへ落入死したりかくなれと誰も憐ものなしと也いかなる不幸なることにや

○十二日 晴 曉八ツ時兵庫出立いたし候る歩行に大に急候る九ツ半時大坂に着いたし麻上下に着替候る西役所石谷因幡守方に参り同人同道に御城代中屋敷の参御定番御目付も被参候る御逢有之候る定例之梳も菓子出候る一同退坐改る御城代御居間の参り品々御内談等有之咄つき不申候を無理にくれく退散いたし夫々佐々木信濃守方に参り候處與力

共一同目通相願候間御用談之間に面謁先役之禮等申述畢る奥の通り候處奥之稻荷は取拂に成太郎之居間調所に成御隱宅奥之居間に成同所に酒出ることをも無理に退散候る六時過旅宿の引候處罷越候人々夥事にそれは大坂之與力同心町人或は御代官地役支配勘定其外未々迄に付旅宿は麻上下に埋めたるかとし家來一同當惑也され共なら人并大坂之人々は世話になりたる人々に付迎方與力共調役其外参り合候八田五郎左衛門之類に酒を出しなら與力羽田謙左衛門も一席也自分不殘に酌いたし遣し候尤接伴いたし候今は頭にはあらず別懇なる人として殊更に懇意にいたし取扱候右畢る惣年寄老分之もの共は是又同間に酒給させみつから酌いたし遣候彼是に四半時過に成直に乗船也今日一旦は菓子其外夥來りたれと彼是と入違候る返禮にいたし候にきやかと申候も大かた也實に人々驚候なら人長吏等は勿論謙左衛門并狹川隆助等は攝州一之谷之邊迄出迎たりなら二十里有へし謙左衛門などは一言も不語只御なこりはとても不盡と申候

平服したるはかり也同人は白さや刀一本遣す其外目録或は柄さめ印籠等夫々の遣すこの入用も又夥し乍去少も儉約なしにいたし候この度の御用はいつ方の参候も故郷之にしきと申候けしき也今日は面會を願候る参候もの共半は御城代の参候遅く相成候間歸り候

○十三日 雪 ひらかたに夜明申候御船大きく候遅く八ツ半時ふしみへ着こへは佐々木育介父子さや太郎兵衛等参りたり淺野は所司代は伺之上大津之泊へ参候積之處草津泊りと承候る家來差越候段々と申談等有之七ツ時過に相成とても草津には参兼候間俄泊りを割替候る大坂津力参候處五ツ時過也こにも御代官又は京地之人々参り歸り候は四ツ時也しかるに船中へ長崎廻り候宅状并同役之内状等届來候間右之調に中村爲彌其外参り九ツ時過退散也

○十四日 晴 曉八ツ時過大津出立一寸臥り候計也水口に晝休七ツ時過坂之下に着也十五里のみち也され共宿場等之外多分は歩行故如此速也されとも

少もつかれなし

○十五日 風雨 七ツ時坂之下出立いたし候る石薬師に晝休いたし七ツ半時桑名宿に止宿

○十六日 晴 六時桑名出立いたし候る船にて熱田に渡るなるみにて晝休岡崎に止宿○なるみの今川義元の舊蹟桶はさまにて名高けれと實は屋形はさまと申所也と承りたり其地名を問ふに桶はさまに近き所に今も其名有と申也此節十三里或は十五里十六里之旅行也よりて九歩以上に歩行せり

○十七日 くもり 正八ツ時岡崎宿出立候る吉田にひる休七ツ半時過遠州舞坂へ参着十五里半也三州寶藏寺に御日から旁 御宮に参拜こゝには 神祖御八ツの時之御試筆其外有度々拜し候る昔の御不自由なる御事に落涙仕候御双帯かけの松御硯の井なと有レとある人の申せしは御書其外ともに駿州華陽院に有たるを昔之僧轉住之時このてらへもち來た

る也と物語候

○十八日 終日雨 八ツ時舞坂出立いたし候。吉田にて晝休いたし六半時過嶋田へ止宿。今日之路程凡十四里也。家來共大につかれ候。

○十九日 くもり 八ツ時出立いたし九子と江尻にて食事いたし五ツ時蒲原へ着嶋田。十六里余也。道中師いふ御勘定奉行等に絶。聞も不及事也と也。

○廿日 晴 八時かむはら宿出立いたし候。沼津にて晝休七ツ半時箱根へ止宿。十三里半余。みち也。

○廿一日 晴 八時箱根を出立。積之處關所差支候。六半時頃關所に成也。六それより大磯にて晝休五ツ半時戸塚へ止宿。支配向其外追々來り御用談九ツ半時に成。即刻出立少も眠らす。

○廿二日 晴 平塚宿出立いたし候。かな川へ參候處異國船八艘かゝり居候。義よく相見候。三十町もあるへしみる。二艘は出帆に下田に相廻

り候。川崎に晝休いたし高輪迄參候處同役。急狀來る御用番へ不及御届直に登城。御朱印返上等いたし候様と之事也。こゝより早かこにて八ツ時前登城。いたす閣老衆御逢御談等有之候。暮時頃御用捨に早退出いたす。今日一躰。御退出は五ツ時過之由也。

○廿三日 晴 例刻登城。伊勢守殿に御直に御渡。御封書差上申候。

○廿四日 晴 同斷此節江戸は至。穩也。異國船なれたる故なるへし。○昨日江戸御屋敷より參着。御悅として御肴拜戴難有仕合奉存候。

○廿五日 くもり 例刻登城。○上田角右衛門より書面伊勢守殿に御直に昨日上る大坂に御口上。趣は具に廿二日昨日と申上候。御沙汰。趣無洩十分に申上候。

下田日記

○嘉永七寅年十月魯西亞船下田に渡來いたし候に付同月十七日俄に御暇拜領物被仰付四五日中出立之組に候處同夜下田より注進之趣も有之伊勢守殿に急に被仰下候旨も有之候間同十八日登城之上先格之通御朱印等頂戴退出の直に品川宿に向出立夜五ツ時頃に相成候に付川崎宿に止宿俄之事故送別の人壹人もなし

○十八日 晴 夕かたより殊に大風並木の松の枝折吹落すけしきなどいとすさまし○今日は七時出立に於十六里余のみちを行小田原に止宿今夕と昨朝とは二十里余を隔つ實に夢のとし昨夜は曉頃までに長持其外追々着揃いたし申候右に付駕之内に敷蒲團をいれ來らさらむには貸夜具のしらみに苦へし今日も過半歩行也○茶并鼠いろの砂糖少々煎へいなと買

申候梅干も買申候幸ひに梅干は先格に大久保家より贈申候はつかに梅干一曲地獄にて佛に逢るかとし

○廿日 晴 小田原宿少々乗輿いたし夫々歩行三嶋宿前の建場を乗輿也
其余は不殘歩行乍去少もくたひれ不申候

○廿一日 晴 拂曉に三島宿出立いたし三里はかり歩行いたし参り候處
下田より急御用狀來る道傍を名主の宅に寄開封いたし一覽候處早々参り
不申候は魯戎うら賀の可廻と事也よりて今日中罷越候積乍去三嶋よ
り下田迄五十町道二十里余に當るに付如何あるへしやと森山榮之助出立
通詞より御普請役
被仰付たるもの申談候處五十町道とはいへと近し早々御出の方と申候

間出立を積相成候得共荷物并足いたみの家來乗候かこ人足に差支候に付
今日自分は歩行也途中に倒レはかこのせ可連参とて切棒かこをつら
せ候る足のつくもの計供いたし候へと申たるに良右衛門秀三郎并侍壹
人徒士草り取等是非可参旨申聞候間右を召連候あかけ出し七ツ時より六

ツ半時過までに六里の天城山を越候る梨本村へ参り候處もはや五里
に下田の参候由に付安心いたし肩輿に乗二里はかり参候處汗夥出たれ
は衣類如水其上アツカを入されは寒堪かたしよりて再ひ二里はかり歩行
して夜九ツ半時過下田の参り都筑駿河守の面會いたすいろくと御用談
いたし候る旅宿下田稻田寺の引取候處七ツ半時過也家來をかこふとむ其
外かりあつめ候る少々ねころひ申候○松村忠四郎來る無恙いろくと御
用談いたす○今日を歩行通計拾五里はかり也早足に人々驚申候

○廿二日 晴 六半時頃起申候昨日のつかれ如洗少もなし其上にからた
のこり等まで大によろし平日を修行初る相分り申候この健なるを母上の
入御聽度と詳なる日記をしるすにもおさとより讀候る入御聽新右衛門な
とも同様にせしことおもひ出候る落涙いたし申候○下田稻田寺は源氏な
らは夕顔をつれ可参位を寺なるに出し抜に参たる事故掃除等もなし○中
村爲彌に面談を義魯船より申來候間差遣候處左衛門尉に早々面談いたし

吳候様と之事也船も大造なる事之由これは西洋此節大亂國と相成居候故
之由寢間まで大砲を並へ引歩行候様いたし其上に棚之如きものをつり臥
り候躰之由也日本の百文錢等持居候由也けしからぬ事也○下田は南地故
歟殊之外暖にて火鉢は忘居申候明日より寄合初候之應接之面々参り申候
忠四郎は應接懸りに無之候に付定例之御用之外は不來候されと日々來り
候○此地肴はあり菓子も茶も至而不宜候これ手まかなひに相成候間其
心得に而何にてもよろし序あらは贈り可被申候長持一棹八匁に付何にて
も参り申候今日も船廻し之もの追々参り申候先ッ難船は無之候由也
○十月廿三日 晴 筒井肥前守其外役々到着に付一同入來旅宿に而より
合いたす混雜甚し○今朝春中其外之七百てう灸事いたす○一昨日炭城山
にて

霜つもる細谷川の丸木はしあとつけ初てわたる夕くれ
撓めるも直きも同じ弓と矢の岩はほつらぬくこゝろつくしは

○廿四日 くもり 四ッ時過爲彌其外來り予は居間に而調物いたし居候
處俄に表之方騒々敷家來壹人馳來り魯人参り玄關を上りたると之事也次
之間障子之穴をみればホスエツト也居合候もの共一同取まきて何歟いふ
也通詞は居らぬか川路サマノといふ也早速中村爲彌事引出して玉泉寺
と云應接所之連行たり日本は鎖國とまてに異國よりも稱したるにアメリ
カ應接よりかゝるさまとは成たり是非逢申度由なれと御目付立合ならて
はとて申斷返したりこれより即坐到紋附 御紋附之羽織に着替申候かゝ
る所に而は蒲團中に寐ながら魯人と對話するも難計歎息せり
○廿五日 晴 魯人之明日應接之義申遣し候處互に帝國之全權也長崎に
而は上陸いたし候而及對話候間今般は船へ參候へとて右之禮を争候而夜
四ッ時過までかゝる不相決九ッ時旅宿に歸ル
○廿六日 晴 魯人之懸合として中村爲彌へ永持亨次郎并森山榮之助差
添遣し候伊澤美作守参着入來○中村爲彌家來病氣之もの有之差支候に付

千次を貸遣し候處魯船に供まち中いろく之酒を爲給或は耳目鼻口等之圖をみせ名を承り書記し天保山に人々詰合土屋之幕打たるけしき詳に記したるをみせ候由千次之名を承り候に付申聞候處書記し候之センサンくと呼候由其外少々宛みな日本語遣ひ候由也

○廿七日 晴 より合に付一同御役所之參る魯戎之取扱いろくと議論有之候處伊澤美作守判然と辨別いたし理正敷詞明に其方に相決申候美作守才力別段也

○廿八日 晴 前裁に架子有伊豆の暖氣をしるへし○異人と上陸之禮を論して昨夜迄中村爲彌之森山榮之助を添遣し及談判こと五度夷人半は屈したり○門番所出來異人門内に入らず少々安心也門前之來る手をふりみすれば承知くと私言して立歸る有也○長崎と違ひまた御取締不立心配せり昨日も歸り懸みれば異人竹を杖にいたし二三人道傍に立居たり十年之末いかゝ嗚呼

○廿九日 晴 異人上陸候之對話受ることに成右に付旅宿を晝はかりに限貸遣すことに成候間旅宿替いたし候之太平寺と申寺に引うつる唯今迄村垣與三郎以前松崎滿太郎之旅宿也至らせまし下々はかさなり合之臥り候由

○晦日 晴 昨夜之雨はれて今朝二月末のことし此地に參候之火鉢を求むるものなし江戸より持參之鬚附みな用ひられす無余義土地に求申候よほと暖氣なる事也柳の葉猶全存し候之尾はなの残たるいまた人を招けり

○十一月朔日 晴 魯戎と上陸之禮を争たるに彼方に無余義譯合之候之屈服して上陸也獻上物之義及言上候處御受取に相成右之御返物被下候旨申達之○魯戎自分之顔をうつし參度旨にいろくと申再應申斷候處不聞入候間元來之醜男子老境に入妖怪之如くなるを日本之男子也たと申

されむも本朝之美男子のこゝろいかゝあるへくさて魯戎之美人に笑はれんこといや也と案外之事にいたし外し候處魯西亞人之婦人馬鹿は男のよしあしを論す才人は官之よしあしを論す男の美惡を論するは愚也故に御懸念に不及と申候よほと醜男とは存たれとかくまてとは不存布恬廷の才子も言廻しに困たりとみえたり

門をもることをわすれぬ犬の子はこと國人を猶吠る也

右は異人の竹を持歩行す犬ほゆる故也と聞て感ありてよめる也

○二日 晴又雨夜雷雨 九ツ時頃魯船響應に付一同參る七ツ半時過歸ル

○三日 大風晴 玉泉寺に魯戎之使節と九ツ時暮頃迄應接猶虜屢詞屈し候而此躰ならば十分に參り可申哉日々五ツ時より夜の九ツ時迄少もひまなし今日應接中

ことさやくましらに似たるあやし男を和すといさむやまと魂

なと、申候

○四日 晴 今曉九ツ半時書物いたし明六ツ時前よりからず鳴まで再ひ臥し候而支配向と御用談いたし居ながら食事中五ツ時過大地震に破候間表之廣場に出る生れてはしめての事也寺の石塔其外舩籠等みな倒たり無間もつなみ也とて市中大騒也中村爲彌來り早々立のき之事申之支配勘定上川傳一郎先立いたし御普請役其外まで書物を携近習中小性一同に六七町はかり逃て大安寺山へ四分通上り見居候處はや田面へ潮押來りたり無間も市中土烟立てけしからず騒也火事かとみる間に大荒浪田面へ押來り人家之崩れ大船帆はしらを立ながら如飛に田面へトツと來たる躰おそろしとも何とも可申躰なし其時居合候もの共大勢おもしろはすいばらわわけ木を傳ひて道なき山をひら上りに上りたり絶頂へ參りみれば手足をかき破りて血の出ぬといふものなしこゝには女其外逃上りてみな念佛を唱へ或は泣居たりや、靜たるけしき故下らとするに少も道なし村人をして

道案内させたるにこゝにはみちなし安らかなるかたかとて案内したれと
 これもしらす絶壁如屏風畫かける鶉鳥越よりも甚しいがにして上りけむ
 と一同再ひ驚たれといたし方無之漸三町はかり下りたるに此間何度もみち
 を替其苦いふへすから 柚のあとを見出し夫々四五町下りたるに松村忠四郎尋來りたり逢見
 て互に涙くみたりたち附にて立派也これは家來もちたるを着たる也旅宿
 はとくに流失したると也そこにて立ながら御用狀を認或は米を買遣し
 又は近郷へめしを焚に遣し夫々の御普請役を遣したり郡司率助はたか馬に
 乘駈歩行忽に六里は
 行かり歩せり夫に漸米は有之候得共はしも何もなし手つかみにて食事夜具も
 無之候に付支配向に奉行左衛門尉夜具其外共に別條無之候に付貸遣し六
 疊之百姓家の爲彌其外五人まくらも無之ふせり申候忠四郎之衣類其外共
 に皆濡勿論流失之品も多候に付丸やけ同前乍去家來迄別條無之左衛門尉
 は家來のものにいたり候迄少も怪我無之衣類其外にいたり候迄も少も別
 條無之候御安心可被下候大助家來壹人官之丞家來三人行衛不相知御船手

同心二人下田手附壹人并子供壹人今以行衛相知不申候筒井中間も壹人は
 有之候由也

○十一月五日 晴 六半時出宅に所々廻りみるに田之中に二十町前後
 之所は廻船三四百石より千石之船上り居る也きのふ逃參たる山麓には逃
 損し轉たるにやとみえたるか死に居たり二才はかりなる兒の死したるか
 二人並居たり或は火事羽織に帯刀いたし屋の梁へ上り居たるか其まゝ
 沖に被引候而死したるも有之夕かたみれば死人を掘出し居たり夥敷事也
 魯西亞船も三人迄助たり魯人のはなしにては同船脇を百人も其余も通り
 たりと也魯人は死せむとする人を助厚療治之上あんままでする也被助人
 々泣て拜む也可恐可心得事也

○六日 晴 六半時より下田に參る下田は昨夜中に四度つなみに二度
 は奉行等山の辻上りたり右之譯故今に山中に野陣有少々といへ共黒川嘉
 兵衛宅へ床上二尺も上りたると也より合中もつなみの注進有大騒いたす

乍去迹はいたし不申候下田迄當時之蓮臺村寺脱カ三十町也夫故右之患なし昨夕よりはしめて飯の手つかみ止たりされと同村温泉場故に湯の桶なしよりて今に湯遣ひならず候下田町に死人を他村之ものに申付掘出さする也身寄の引渡といへ共はつかに妻一人たと申譯故葬もならずはつかに土をかけ置也可憐事也四日五日と黒米かと申候様なる粥其外握めしを給粥も手桶に入たるをかけ椀にすすくひ候而給ると申位也平日の食味といたく異なれば飢に望まされは十分に給られす右に付今日は飯のうまきことかきりなし平日魚食をすへき事也太郎市三郎敬次郎等へよく御聞かせ可被成候○今般衣類を遣し候は古賀謹一朗時服一ッ袴中村爲彌野袴時服一ッ菊地大助時服一ッ袴日下部官之丞上川傳一郎小袖一ッ宛胴着一ッ、青山與惣右衛門衣類一ッ袴永持亨次郎八丈一反裏 壹反綿共御普請役不殘の衣類一ッ、也森山榮之助は別段衣類遣す

○七日 晴 今日魯人の懸合として中村爲彌遣す○筒井肥前守用人之

悴貳人供頭一人四日には濱見物に参り浪打際にて烟草のみ居たるに大浪來たる故少々之事と存跡へ下り夫ともしらす居候内沖之方如山なる浪來候けしきにてそれつなみと申こと故磯山の上り助命也され共旅宿の行こと不叶暫して歸り來りたり衆人皆死せりとおもひたる位の事故親子うちより泣たりと也左も有へし

○八日 くもり又雨 中村爲彌を魯人懸合として差遣候而宅調いたす○江川太郎左衛門手代來て地震は東は箱根を西沼津原吉原にいたり潰家多夫より西も彌甚敷風聞承候由申之下田近邊太郎左衛門御代官所地震つなみ強く口野といふ所を土肥村迄太郎左衛門御代官所十四五里之所流失家死人多有之候由申之○昨夜四日に江戸を歸たるもの之咄には地震江戸は子細もなきよし乍去松村忠四郎箕作元圃は類焼いたし候哉に相聞水火之たり扱々氣之毒也○九ツ時頃船便昨日御届候由に來る江戸之地震いろ／＼と申居候處委細相分御兩親様御別條不被爲在おさと御介抱も不

相替之事なから行届候様子大慶おさと持病案事居候處起候由に候得共認
ものも出来候由安心孫共無事是又安心也○今日初而並之白米之飯を給シ
エンケイ塗の飯櫃をみる今朝迄は桶等に入家來も主人も同じ桶とみゆ○
下田之町盜賊夥し御勘定方其外之衣類泥沙之内より出るに多くは紋附也
具足櫃も金あるかたは不出といふ類舉而數ふへからす我故に此騒動をみ
るや否早々御固の大名之家來と下田組之ものとを合せてベリく人を
出し改之其外町々をよく見廻らせて盗人を召捕たしといひたれと組之も
の子供の如きを合せて十人其上盜賊を召捕候而も跡に仕かたなしなど
云類か奉行一向に身に染ます其姑息甚し江戸にても大火大地震有は用人
共等よく心得へし 公儀に而も町奉行其外之嚴敷被仰付候而可然もの也
○十一月九日 くもり又雨 下田より流失殘のつかり桶をもち來りて今
日初てゆあみいたし申候御てらの客殿の椽頬也○魯人より一昨夜伊豆の
山より火氣上昇したりもはや地震つなみの氣遣はなしと申來る御安心可

被成と之事也これは西洋の説に元來地震といふものは地中に火氣の動
く也と申也硫黄の氣 夫故に火氣もれて上昇したれば地震なしと察たるな
るへし其夜光り物の飛たるは土地の人もみたるよし也○つなみ後はしめ
て浴してみれば手足に小疵殊之外多しみな山へ上るときいはらに破られ
たる也家來みな同じ○浴して客殿之椽にある鳥の糞おのつから洗はるゝ
をみて

板敷は浴みなからに洗はれて中く清くなれるふるてら

女などの奇麗すきに此節のことみせし畢竟乍恐 東照宮はしめ奉りこ
の百万倍の事に逢はせられて天下を治め玉へる也それをしらす宮嬪立派
可憎事也

○十日 晴 御めくみの御金御來る魯人はや知りて食料のこと申越た
り下田は葬るに土かたければ土をかけ置也故に冬ながら臭氣有○よめの
死骸は孫を抱しめながら死して手を離れず夫を泣々老人の土を穿ちて漸

に死骸をかくすなど可憐のかきり也昨夜もつよき地震二度也○遠州の方
を見せに遣し候御普請役より吉原宿をみちふたかりて旅行をならぬよし
申参るあたみの湯場は五日に大地震に湯の穴より火を吹出し地形變し
村落みな崩たるよしに付内々爲心得傳一郎差遣ス○けふ村々にて濡衣類
を乾し居るをみて

わたつ海の浪かけ衣家ことに干せとかはかぬ袂ならまし

此こと偽之
段追ふ相分

去ル五日あたみの温泉を火を吹出し其上地震に變地いたし湯場潰候由
也○富塚順作來るしかるに面談をひまなし臥り候節漸く江戸の様子承
候

○十一日 晴 昨日御用狀來る然るに伊勢守殿御直河内守へ御渡十一月
八日之御書付に下田表地震津波等不容易天災之處何れも怪我も無之段達
御聽先ツは御安心被遊候併不意之災患可爲難義と被 思召候依之出格之
譯を以御内々拜領物被仰付之と有之候を筒井肥前守自分羽織并八丈縞

吉藏醫者三
人まで爲見
申候追々よ

三反伊澤美作守都筑駿河守同斷松平十郎兵衛村垣與三郎古賀謹一郎の
同斷二反被下之先ツは御安心被遊と之御事落涙いたし難有候

○十二日 くもり 富塚順作けふ歸るに付目錄遣し候吉藏は昨夜を俄に
風邪に付出立ならず留置申候此節長崎の如くならむ風を引ならは療治は
ならず大事に且万事わか旅宿を仕出しに夜九ツ前迄も支配向参り居
候位之事故此御用中風をひかぬ積にて浴はやめ申候浴するところ客殿之
椽に山かけ風當ありて戸をたてかくる位にては一向きかすさむきこと
いふへからず兼もいふ去年は六月の七月のかけ海岸を見分十二月雪中
きそ路之旅行當年之冬はつなみの騒このわけなるに市三郎太郎敬次郎は
枕を高くして高祿をたゝ取にいたすことあらは天罰必然なるへし万事に
わか苦勞をおもひて出精すへしこれわか苦勞にはこるにあらす兒らか爲
をおもへは也役人の子孫よからぬと申は其親たるもの不隱徳にこゝろつ
かす家豊なるによりて兒の愛にひかされ奢をさせ其兒たるもの奢になれ

て親の貧なる時手に取こともならぬ程のよきものをやすくとおもひ其奢を身を亡すにいたる也よりてかくしるし候おさと此ヶ條市三郎其外によく御よみ聞かせ可被成候亡兒彌吉は太郎等か親也よく此理を知りて物をほしかり奢の氣なといふこと露なかりし也太郎敬次郎を不便におもは、事足らす至る不自由にいたさすへし此こと乳母も急度申付置へし彌吉か平日のことおさと太郎敬次郎よく咄聞かすへし

○十三日 晴 柿崎村玉泉寺に魯人と應接いたすこゝも村方はつなみにて家居大に損したり魯船のかゝり居る海岸を通る帆はしら其外に番人居るけしき嚴重也

○十四日 晴 柿崎村玉泉寺に魯人と應接いたす昨日の應接嚴敷過候而魯人大に怒たるかとおもひたるに今日は大に承服して柔に成事七八は決せり夷情はかりかたき事如此

○十五日 晴 けふは温泉をくみてめつらしくゆあみいたし申候少も湯

さめなし故に躰あたらす○少も馳走はならず山のいも多キ地なればとゝろに麥めしを馳走にいたし可申由申聞たるにトロ、を大すり鉢に入たるまゝ近習之ものさゝけ持出たり大笑也

○十六日 雨 使節へ遣し物へ差添候而芝崎秀三郎遣候處左衛門尉様之御大恩に相成候處其御方は如此と寫眞鏡に御すかたを寫したき旨相願候處御聞届無之候得共右は何も六ヶ敷事には無之由先ツ試に秀三郎をうつし候旨に寫され同人當惑之由此かゝみは鏡に向ひうつり候かけ其まゝ不消候而永世までものこる仕かけ也何も可怪事にはあらず夫々藥にてすることゝ日本にゝも出来る也左衛門尉之身かはりに秀三郎之色男は大

笑也
○十七日 晴 魯人に對話いたし度義有之候に付左衛門尉之まとるをふり候處直に船をよせ上陸せり左衛門尉纏かゝる勢不思議といふへし○石河土佐守松平河内守を見舞來る魯人けふも像をうつし度旨達而申之大に

困り申候痘瘡の跡迄もうつり候由也

江川太郎左衛門才猪狩に出

○十八日 晴風 異人と中村爲彌を遣し見合せ申候江川太郎左衛門來る異船之様子爲見届遣し申候是又同人一覽候得は天下有益之事も可有之によりて也○寒の入と申候故歟寒よほと也御兩親様御機嫌克恐悦之御事もおさと日記之躰に而も同人不相替御兩親様之御機嫌をはしめにしるしいろくくと御深切に申上る故此事は別而安心也○市三郎太郎敬次郎に申聞へきは今般之御用心配は申に不及候半分山にかゝりたる古てらにてよほときたなく障子きはみて所々すき間多し北向之建地故日のあたることなしされ共中くこたつとこの沙汰にてはなくこたつともおもひ不申候夜々四ツ半時九ツ位に支配向歸る也中村爲彌は一里半はかりなる所を行終日異人と應接候あいつも五ツ時位に歸る也其以下とても同じ食物は殊更わろし此子や孫に付寒さ食味のこと少もいふへからす山の古てら故狐頻に鳴也太郎敬次郎を乳母共よく申付物をこはからせ地震かみなりを嫌に

候由也過日 日承候一昨 日行鹿一ツ山 打と鹿もたリ にとよもれ太 郎等こはか 郎ことあは 乳母役の深 切過てに深 したぬ様付 外之事もに 記之

すへからす

○十一月十九日 晴風 昨夜江戸御用状に而攝泉其外大つなみ地震四國伊勢志摩北國も同斷之由驚入此末のこと御勝手其外之義心配寢られ不申候○蓮臺寺村は九十九石之山村也しかるに左衛門尉はしめ支配向迄俄に引越たれば米さへに食盡したり此節から賣所なし幸ひに公儀より之御廻米に而米は差支なし右に付嚴敷所有合にて一菜限の令を下したりけふ晝はしはむほうの名折より小なるあふらけ只一切に菜のひらにて汁なし夜食はゴモク縮計にてめしも汁もひらもなし其縮サンマを焼人參を切こみたるもの也何分食ふへからすより頼みてひやめしの茶つけに而仕舞なり宅に而太郎市三郎等此ことをおもひて食味のこといふへからす○廿日 くもり 日本所々地震つなみのこと魯人ホシエツトといふものに咄したるにかゝるときは又しもあるもの也油斷ならずと申たりしかるに十八日夜九ツ時頃に大砲に而も打拂たるかこと音遠く聞えて家よほ

と動きたり菊池大助は九ツ半時頃にて打臥したるか驚起たると申也いつ方に又しも天災はあらずや蘭醫元圃之説に西洋之新説にては地震雷共にエレキテル之氣の動く也よりて至る深き穴をうち夫の錠鎖を下くれは地震は其所にとまり雷は屋上よりくさりをはれはもれてもくさりを傳ひ落て人を害せざるよし也

○廿一日 晴風 魯人柿崎村玉泉寺に上り爲彌と應接する也其應接之ものは辨當遣す也應接外之ものに書をよくし且寫眞をするもの日々玉泉寺に上り居に付辨當を給さするよし右之ものはモウザイスコオと申也丈六尺五寸畫ける關羽のとき男也度々別段に辨當を給たる挨拶として酒三瓶漬物二瓶を贈り申候これは應接外之人故なるへし異人の精密如此返禮として櫛柑二百其外磁器遣す

○廿二日 晴 昨日は正四ツ時前より應接はしまり夕七ツ時までかゝる魯人ホシエツトと爲彌森山榮之助之懸合也七ツ時頃より布恬廷乗出し來

りて夜四ツ時過までの談し也爲彌之歸あまりに遅し家來を遣したるに柿崎の玉泉寺迄壹里半之所凡一りはかり參たる時歸に出逢候而迎は歸りたり夫々今日之取計方其外昨日之義等承候而八ツ時過に成申候榮之助談之内に其様なる馬鹿なることは申かたしと申様なる詞を遣ひ候處布恬廷失禮也と申答たり榮之助輕くも 公儀之御人也異國の人と對し有躰を申す也夫を失禮と申すは心得すといたけ高になりて争たるに彼大に詞を和けて段々と懸合たるよし也榮之助は矢部駿河岡田利喜次郎など可並才力多きもの也

是實詠也

○廿三日 雨 魯船を修復する湊豆州にさし當なしよりて異人に御目付御普請役を添て遣したるに那賀郡戸田村と云を見出したりそれは誰もしらす勿論圖等には更になししかしよく聞は良港也今まで人のしらぬ所也

西人航海術別段也

○廿四日 晴 魯船今朝出帆と之事に右之御用狀其外にて俄に下田に參三十町一同より合候而申談いたし夜四ツ半時過歸宅夫々宅に支配向一同來る右に付明からず啼を狐かとおもひ無余義夜通しに成○異船今朝出帆いたし候積之處楫きし不申間切かはら折たれば船不動して無據滯船なり兩三日前下田に影移ごみを焼候を出火と存候而異船を龍吐水をのせ候而火事見舞として參候右之譯故無益とも可申哉乍去異船之懸心懸みな此類也

○廿五日 晴 異人今朝も出帆ならず風あしければなり○戸田^{ヘタ}に異人船補理に引移假屋等出來候節異人之爲に民居等引移之義無用にいたし度もし無余義は其入用は民いたみ不申候様十分に差出し度民を傷むること魯^{ヲロシヤ}會^ノより堅申付候而制禁なるよし申之

○廿六日 雨 魯船いまた出帆ならずかちの補ひに繩を下ケ夫^ノから樽

を結び附たるよし大綱を以船を巻き候由この躰に右はいかに思ふとも大洋は乗られぬなるへし○魯船より出帆いたす上はフレカツト船へ招くこともならずとて筒井と自分の花毛氈を一枚くれたり一疊敷は右之挨拶に新右衛門くれたるさけ重箱と兼あつくらせ置たる漆コツフを遣したるに重箱の立派なるを殊に稱したりもち傳へといひてやりたるにもち傳へ殊に忝し子孫に傳へ可申永世の寶とすへしかゝること云々、右之謝として所持之品差上たきよしにて白銅にて造たる花立と菓子入か肴入か燭臺をかねたるものをくれたりキヤマンの鉢も附キ居申候蠟燭を三ヶ所につけ上へは食物をのせこれキヤ可申様にしたるもの也左衛門尉には土藏の下積もの也御目付にも爲見て笑て申たるはこれを用ゆるは馬鹿の大名歟潰前の豪商なるへし前の花毛せむに此器を用ひ余物夫に叶ひなはいづれ御目付方の四半帳は帡かす百枚にいたるへしと申たるに松本十郎兵衛大に笑ひたり○かく認居る所の異船今辰ノ刻出帆いたし候旨申來る○戸田に遣

し候支配向々昨九ツ時同村暫時なから大地震山より大石落牛并人死したるよし申來る昨夜二度地震有けれど右之地震はしらす十七里を隔たる場所也

○十一月廿七日 晴 昨夜廿四日出之御用狀宅狀共に來る廿四日に内海臺場御普請御用相勤に付拜領物被仰付候旨芙蓉之間におゐて阿部伊勢守殿被仰渡金七枚時服四ツ被下候旨名代として罷出候本多加賀守を申達有之候

○廿八日 晴大風この地のよし也 柿崎玉泉寺の魯人之重立候ものを差置通詞番人等附置たるに住持へカマの無心を申たるに一度にてこり／＼して不貸と申もおかしく承尋たるにパンを煮候故のよし絶倒奈良奉行たりし時に天のかぐ山の住持野詩を差出度と申たるを野酒と承り斷たると同じ聖人も牛を服し馬に乗と仰られたるに下田にては船人の乗る牛と申候もの有之候

○廿九日 晴風 二國會盟錄によるときは清康熙の時魯西亞韃地之方を侵奪し屢戰爭をなし城をも奪ひ取らるゝ迄に清朝敗軍に及へりよりて康熙帝會盟を臣下になさしめて黒龍江より西南之方は魯戎の入ことを堅く禁して互之條約を石碑にしるし蕃漢の文字を以誰にも分る様になしたりしかるに其盟忽に敗れて其後も屢侵掠の事有方今の 皇國と康熙之世いつれか強かるへく魯戎は其時よりは遙に又大國と成て且航海のこと其時よりは雲壤を隔たりしかるにカラフトを奪取らむとすること久し奉使日本紀行にクシユンコタンの事をアニハ港としるして奪取文化のはしめ既に大事に及はむいたし方を詳にしるし有其仕方いとく可惡説也文化のはしめ既に大事に及はむとせしかと幸にまぬかれたりフランソアのホナハルテと申候もの大戰爭を仕かけ魯迄之しかるに今般御國境の事を申して一旦我に説破られてクシユンコタンの陣營を可取拂とまでには申たれと夫より先五十度の所にいたりカラ
地は入こと日本 スメンタルヲロッコ人など申所とはつかに壹里計に人種之様子斷然として蝦夷と東韃の風俗別段に付右を以境とせむとカラフト風土

相違いたすといへ共クシユンコタンには櫻有と村垣與三郎其外も申したり其花を御徒目付平山健次郎は携歸たりと吟味方青山與惣右衛門申之上川傳一郎はカラフトに櫻なしと申す也これはクシユンコタンには不參西海岸を奥いろくと申せと聞入ぬ也これは後日侵奪之心ある故也依之われ力をつくして天下をたために争ふといへ共十分ならず候われ七十まで存命ならば再論をみるへし可歎こと也夫をいかに説けともしる人なし皇國は天幸ひを下し玉ふか此節再び西洋各國みたれられたらば早かるへし勝わか子孫たらむもの若此事を扱ふこと後年に有らむかと密にしるし置もの也此地を唐土西狄の論を引て捨むと云者もあれと唐土の匈奴を廣くすること不思議なりアメリカなと無人之地なるを英夷の開たるにてもみるへし其上にカラフトを奪ふときは又蝦夷をのみ得るときは松前にいたると云夷情にて地にかきり有て夷人の欲にかきりなし可恐事也元祿之度朝鮮と竹島を争ひ同國は被下魯人黒龍江をわたり韃靼の地に入ことはならず其時はカラフトにも入られす是非入らむとすれば大船を以クシユンコタンの方廻るなるへし然るに近頃漢土衰て魯人を制すこと不能かアツサムハツトマリといふ所は黒龍江より西朝鮮の方寄たる所のことし此ところ箕作元カラフトより百里圍其外もしらす

余之由同所ハツテイラを二艘仕出してカラフト之内スメレンの住居之方は三年來年々に來るよし也スメレンは男子一人に付革二枚ツ、韃靼の納る所を也混同江の上にも魯人大船をのり下らむとする所を韃靼の婦人に其地之頭にて清朝の軍にも出たるもの有大に怒りて一艘は碎き一艘は洲に乗あけて船動ことならぬ様に成たり右之譯に付若魯人害をなすならは逃來るへしと右之もの共申候由也これはスメレン人のよし也山丹人もクシユンコタンへ來りて魯船の破たることのみを云たるよし也去年七月頃之由也

○十二月朔日 晴 異船事無故候得は今日は歸府 御目見もいたし候積之處十一月四日之つなみ又々今般之難船にて中々一寸之事には不參今日之躰に不は年内之歸府に候は、大出來也

ほともなく春は歸ると聞なから果しもしらぬ旅寐するかな
 異人中村爲彌は魯人之不運夫に付御かゝり御人々も御不運とも可申哉段々御歸遅く相成恐入候旨申越○夜四ツ半時江川太郎左衛門急狀來る魯西亞船原と吉原との間に及破船異人胴を繩にゐくゝり一人ツ、水中に飛込候を大繩に引揚助命いたし候旨申來る右に付即刻寄合とも存候得

共旅宿差隔候に付支配向一同御徒目付吟味方等呼寄申談夫々取計方及差
圖即刻中村爲彌出立いたさせ申候羅紗并モンバ之衣類五百人前不被下候
ゑは相成間敷旨江戸に申遣す江戸にてもかゝる騒はあるまし只難有は日
本の手拔少もなしそこは大悦也

いかにせむこと國船のいとまなみよるひるかけて立騒也

これはいかにといへはみな大に笑ひ申候下手歌もかゝる時之一興也歌の
序にしるす村垣與三郎新規被 召出候時父左太夫範行のうた

けふかゝるめくみの露をわけ初て事ふるみちに身をなおもひそ

此節筒井の述懐

中へに命なくはとおもひけりわか身をらさる身をは忘れて

○二日 晴 趙甌北か簷曝雜記の内に康熙帝魯西亞と和睦いたし境界之
條約を定むるとき女帝へよき男を使者に遣し寵愛させて床の上にも相談
して條約を定たるよしをたしかに記し有使者は聖祖の侍衛托碩と申候男

老ぬれと笑
蓉の色は猶
ありぬみよ
や頭につも
るしらすも
雪

也左衛門尉も白髪なくは魯帝の御小姓となりて可參歟托碩は樂しにも可
相成候得共御小姓にてはいたきめに逢なるへし先ツ止にすへし

○三日 晴風 魯船フレカツト彌水船となりて上川傳一郎漁師廻船等原と吉

あつめ戸田に引よせ候積世話をやく始末申聞る其勢ひ勇氣勃々別段にて

且行届たり傳一郎は五十日野宿してカラフト百五十里之分見ン圖を作り

スメレンヲロツコなどいふ夷に逢て對話いたし歸たる男也今度之働さて

もこゝろよし○今般之御用には天變によりて却るおもふこといすかのはし

となる也いたし方なき事也さて御入用も夥ししかし日本の手拔は少もな

し○中村爲彌參候時は不及申昨日一寸菊池大助を遣し候ゑも酒食を異人方

にて出す也右故無余義右之挨拶として粕漬并重詰を田村與助使者にて遣

したるにホシエツト罷出相招キ候得共不分兩手に水をかかこ候處手を取

て部やの通し椅子によらしめて親指を出しアリカタヲヨロシクくと申

たるよし也與助之躰いかに有けむ樽をみてサケカくと申ける故漬物の

手まねいたしみせたれは直に開きてさじを出し取出し味ひ見て喜ひ候由
 ○四日 晴 今日はずなみの初忌日とて人々恐れ候得共何事もなし奉行
なれば寺院に申さとし今日下田之濱にてセガキをする也 ○一昨日魯船フレカト駿州江之浦と申候所に
 牽船に参候節大風に相成ほはしらも不相見迄に及沈船使節其外上陸
 無恙旨等夜をかけ候節櫛を齒を引か如くなる注進來る右に付役々寄合等
 いたすされ共此末々見込いたつれも空論也此躰に而は歸も遅く可相
 成候

○十二月五日 晴 昨夜も急御用狀來り九ツ時過八ツ前迄も右之調にか
 る支配向に給させ度おもへ共いたし方有之間敷と尋たるに阿部川もち
 を出したりこれは必かいること有へしとおもひ 與助大に賞せられ候此節は晝
 夜實に大あせを絞る也乍去少も困り又は弱り候 右之趣太郎市三郎敬次郎に御
 物語あるへし太郎は左衛門尉之辛苦をおもひせめては足袋なりとはくましと申たるよ
候由十一才にては宜しき志之由おさとよるこひ候節日記を以申越たり太郎は其志父之
吉によく似たりよき事也生質之美は左衛門尉中々彌吉に不及候乍去才ありて働ことは左

衛門尉のかた彌吉にまげさる積に兼おもひ居る也乍去才は有て害多し質の美はかたき
 也何卒よき質ツツキを大きく養ひ立てある才をよきに用ひ候は、宜かるへし強く豪氣にい
 いたし度候士は其ことなけれは飢人によき米を與へたるかことく暑中に赤き西瓜を食ふこと
 にくに世の爲をいたし水を知らねはかいたし方なきか如し出精すへし尤よろしきは宮崎復太
 郎純正にして深切かきりなき男也太郎を朝夕よくみちひき教ゆる故に太郎
 の質あかるなるへし詩も宜相見候此末御用狀の清書出來候間与風よみ申候

山てらの旅寐の友と手折來てこゝろなくさむ梅の一枝
 手折來し梅の一枝に古てらもきのふにまさるけしきをそそふ

谷の戸に聲ならはする鶯を居なからに聞山てらの庭

麥の飯芋の添もの村人か心つくしのあはれをそみる

からすより聲きしらぬ村鳥の軒はの山にきなくあけほの

さと人は温泉をおのかものにして都にまさる浴なすらむ

一筋の谷の小川を幾たひも越て隣へ通ふ山さと

○五日 晴風 いつ歸りかしらぬこと故いろくとおもへと大なる過也

布恬廷のこたく故郷を一万二三里も離れ船は水船となりてかたちもみえ

す沈みたり其心いかならむ 公義の御用にかかゝる虜と應接すれば身をも其夷と同じくせればならぬ也

○六日 晴風 昨夜もよほどの地震也○戸田といふ所の異人五百人を引よせ候積に成原宿のつふれ不申候を見候此戸田ならば二十町より外に出ることならぬ要害之地故よろし昨夜之都合に参り候は、年内之歸府にも品に寄可相成敷上川傳一郎を戸田に遣したるに三日之内に五百人之居所其外食物酒々ハコ等にいたる迄無差支様にいたしたり百艘はかり引ふれに十五歳以上六十以下之もの漁師をかり出し一番船二番船には褒美を出し等閑なるものは其沙汰に及ふなと其取計さながら鬼神の如し蝦夷カラフト百五十里分間測量し五十日餘野宿して不恐強健男也

○七日 晴さむし 豆州に参り初る厚氷也正五時を揃に下田に参る中
之瀬といふ所のはしをわたるときに

いさめとも老にけらしな置霜危踏わたる谷の板橋

一筋の細谷川を幾たひも越て隣へ通ふ山さと

右へ通おもひなから下田は行筒井肥前守ははや來り居たり下田は町も少々宛かた附申候魯人の船はかたもなく沈みて海底に帆柱みゆるよし也魯

人は十万兩を流し候由布恬廷申たるよし也自用之砂糖燒砂糖とて如くかたま六尺四方之箱に四ツ失計ひしと申たるよし也

○十二月八日 晴 此さとはけふもち飯に春まうけすとてけはひしらぬ田舎女の顔のこときもちを出したりけにけふは江戸にて御ことはしめとていはふ日には有けりきのふも下田のみちすからに山ふところの梅花盛なるをみて世のかく春の催するに山村の古てらにことしも春を迎ふこととにやと去年は十月の晦日に江戸を出木曾の雪山を過長崎に行肥前路より晝夜をはしりかしこにて年を送り春を迎へて二日より異人と應接をなし歸りにはアメリカのことをきゝて日ことに十六七里のみちを急き江戸に歸りける日は品川に松平河内守より直に登 城せよといひ越たるに驚て其日の八ツ半の頃に登 城し閣老の人々にいふこと有て日くれて歸りたり去年の六七月と海岸見めぐりしよりこのかたこと多かりけりとおもひつゝけるに再ひおもへは魯戎の布恬廷は國を去こと既に十一年航海

年に及ふ家を隔つること一万里余海濤の上を住家として其國の地を廣くし
其國を富さむとしてこゝろをつくし去年已來は英佛二國より海軍を起し
て魯國と戦ひかれも海上にて一たひは戦けむ長崎にて見たりし船は失ひ
て今は只一艘の軍艦をたのみにて三たひ四たひ日本へ來りて國境のこと
を争ひこの十一月四日をはしめにて一たひつなみに逢ひ再ひ神のいふき
に挫れて艦は深く千尋の海底に沈たりされと少も氣おくれせず再ひこの
地にて小船をつくり漢土の定海縣へやりて大艦を求めむことをいひて其
日より其ことを落なく書記して出し其いとまに兩國の條約を定めむこと
を乞ひぬ常には布廷奴フテイヌなどといひて罵りはすれとよくおもへは日本の幕
府万衆のうちより御騰ゴトウ用ありてかく御用ひある左衛門尉などの勞苦に十
倍とやいはむ百倍とやいはむ實に左衛門尉などに引競れば眞の豪傑也其
豪傑を朝な夕に見もし聞もしなから少もしらぬとは何事そや實に肉眼と
いふへしこのこゝろにては日本の豪傑多かるをもしらす日ことによむ書

物の誠をもよそ吹風としらす過ぬらむと大に驚てみつからいませたり
太郎市三郎敬次郎等よく承るへし元來治世の小人功をいひ賞を求むること
と多し可歎可戒

○九日 晴 圓融帝の天延三年八月を貞元二年二月迄十九ヶ月之間天變
地妖天延三年秋八月彗星東北にみゆ空中怪異あり貞元元年四月大地震五
月 禁中出火京師及近江大地震死者甚多し秋七月雪ふる六月を七月まで
屢地震九月大地震二年春大地震○筒井肥前より詩を寄たり其韻を和し
て

潞公豐鑠服驕夷說破神機妙得宜鳳闕方今將再築畫君麟閣是其時

○十日 晴 昨日八ツ時アメリカ蒸氣船へアハタムス乗組來る其騒いふ
へからす魯人之内下田に居候重立候もの右船へ參候由承り大に驚かけ參
りたれと早いたし方無之候刀をとりなからアメリカ二フウチャをくむて
大騒き又うかさされてよるもねられす昨日は八ツ半時江戸を大急御用狀來

る封を切るところへ戸田も大急御用狀來る一覽中異國船之注進俄に供
揃筒井其外一同來り急より合其騒動大かたならず候さすかに江戸にはか
ゝることはなし

○十一日 晴 森山榮之助歸來る戸田に上川傳一郎之取計宜使節之こ
しかけ飯臺迄出來居候に大に驚候而外國之もの之御難義をかく迄日本に
而は被成下候哉と感歎いたし候由○布恬廷今般破船に立まゝに相成
候由將士以下之もの共等は流よりし衣類等之内宜を着用いたし候處使節
はかり破れたる下等之品を着用いたし食器も使節は欠損たるを用ひ候由
衣類等可被下旨懸合候處斷也さて原吉原等東海道を通行中は下官共には
銘々に食料を爲持候而三行に並ひかたかはを明ケ候而歩行少に而も外へ
はり出候もの有之候得は直に下官は撻^ツれ候事之由所謂整々堂々之けし
きにて扱又宿々に而は前代未聞之事に付夥見物いたし候處御目付方達
に付雨たれ落を一寸も出候もの無之候由扱又アメリカ人參候を隠候而は

不宜候に付其旨右に付下田も混雜いたし候間しはらく見合候而は如何と
申候處もはや正月も間近^{魯西亞ノ正月元}日ハ先達^也也 暮之御用も可有御座候夫々達にい
たし候而は甚恐入候乍去御沙汰も有之候に付十三日夕迄にゆる／＼可申
越候アメリカに使節は用事も無之候由に而事もなけにいと／＼穩に申た
るよし^{此味日本之はらなきりたる故也前之下田に而申たること}江川太郎左衛門^等を合考候而使節の凡ならず可恐事可知右に付一段心配也
船引上ケ方之事一通り申たるに見切候而不及其義旨申聞候由十万兩も流
したるにいさゝかものこりをしくおもふけしきなきよし也かゝるものに
偽の大造なることなど少しにても申候而もみな笑るゝ也御國躰に不拘様
深切に無偽様にする外少もいたし方無之候

○十二日 くもり 昨日江戸之船便來る其内父上之御不快とかく御出來
不出來有之候由委細順作を申來る元來御六ヶ敷御症と申御臥りは不被成
候得共一寸之御快然いかゝあるへき心配也留守中おさと別れたのみ申候
○十三日 晴 一昨日拂良察船下田に入津也乍去アメリカ之積に偽候而

漂流人をつれ來りたる也しかるに魯人之參り居候を承候而昨日出帆也

○十四日 朝雨夕晴 下田長樂寺に布恬廷と應接いたす○今朝戸田ハツテイラに乗魯人八十人俄に來るこれはフランス人參候を承り候而右之船を乗取候積之由出帆を承殊之外残念かり申候フランス船參候はいか計か恐可申且はかれに被打候事と存候處案外にいづれも驚申候布恬廷はいかにも豪傑也アメリカ人はなしにては英拂之二夷魯戎之カムサスカを攻候而大に戰二夷共に敗軍英の大將敗死いたし候由

○十五日 雨其上雷電 乍去格別の事にあらず○昨日は下田長樂寺に寄合いたす暮六半時までかゝる唐太一條は決着也魯人と應接よろし夫より歸宅之上調物有支配向一同來る曉八ツ時までかゝる○今日も下田長樂寺に魯人と應接いたす魯人屢詞屈し候而よき都合也人々之申たるよりはよほとへこませたり

○十二月十六日 くもり 昨今にて魯戎之條約も大かたは片附へしこの

戎の存外なるは左衛門尉などの少もはたらきにあらず一ツの不思議を證としてあくる也それは異船沈みたる一條也當月二日朝まで天氣至るのとかにて船頭共もよろしと申たればひき船百艘はかり附て二里ほど牽参りたるに一朶の怪雲出て船頭共あやしとみる間に俄頃西之大風起りて山のことき立なみ來りてフレカットの城を水中に置たるか如き船をくるくゝと廻したり其勢ひおそろしと申候も大かたなりよりて船頭共みなひきふねの綱を切てハツと散て逃て江の浦へ漂着せり使節の船など御普請役附添たるに船頭共みな神佛をいのるにいたり候由これも右之江の浦へ逃たりフレカット船は二たひ三たひ廻るかことくみえたるに横さまになりて深く水底へ没したり其時通詞森山榮之助は何故牽船ははなれにけむと不審におもひて異人の遠めかねを借りてみたるに沖はきり立て大に荒るゝけしきなれと渚濱邊はさほと可恐風にはあらずよりて船將次官之ものを後日之證人と存候而望遠鏡をわたして船のさまをみせたと也俗に

いふ神風なといふけしき也右に付布恬廷は命からく成て立のまゝに
ていかむともすへき様なししかるに江戸の御沙汰にて異人の危難可救よ
しのこといと厚しよりて中村爲彌其外上川傳一郎等出格に働て假屋等も
速に出来したるを異人共目さましかり且上の御恩を謝して外國の人の
災難に御心をつくされ候事其御手厚さ全世界中に聞も及はぬ御仁惠也其
難有サは魯王に可申立はさら也永世へ傳へ可申と之旨までを申したりう
まき辭をいふは布恬廷の常故いふ百分一もおもひ居たるに昨日之懸合
わかおもふ通にとりひしかむは無理なるへし西戎のおもひ込別段也決
承知いたすましなと申て異見有けるを斷然として今一度といひて申争た
るにおもひの外に屈して數十ヶ條之條約ことくく決したりはしめい
かにといひしは古賀謹一郎なりしかいたく驚ていかなれば布恬廷のけふ
の安賣してまけにけむ可怪なと申たり其みなもとをよくおもへはいかに
夷狄にても公儀之御所置難有といひしことはの少しは腸のうちにある

しなるへしその御所置も神かせよりそ御施とはなれりけりと難有ことに
おもひたりされはことしは國々の海嘯地震日のもとにては書契己來とも
いふへきことなれと御世の万世は神もおもひ玉ふらし天變地妖も御く
にのいにしへ人のいふさとしとやらむにて御世永かれの御いましめ故に^{皇國}
やと行末のことまでおもひつゝけたり

○十七日 晴風 魯戎に被遣候條約書横文字とかな書穩に合候事事實に
對合すること甚かたし譬は常にいひ習たる大手御門明御賄御小人など申
こと異國にぬは日本之御制度に明ならずしてはならぬ類也何卒役人には
蘭書をよむものゝほしき也

○十八日 晴 朝五ツ時より寄合はしまり夜九ツ時まで也魯人一件別段
に付六ヶ敷義出来候村垣與三郎出立江戸に伺之積出立かけ立寄たるに
宜こと出来候差止申候

なやらひの聲をも聞かす山てらに獨さひしく春を迎へつ

あまりさひしき歌故に

みよあすは花の江戸なる早春にあつきめくみの衣をかさねむ

此さともちつきなしはるのもちをつけはかならすあしきこと有と申也
珍しき俗也

○十九日 晴 下田奉行其外より合いたす○昨日魯人より去年カラフト
に取立候陣營肥前守左衛門了簡に取毀存寄無之旨之書付之いさゝか
御國威相立難有候力にて争候は、十万人かゝるへし魯人共頻に難有かり
て命あらむかきりカラフトの事に付御心配はかけ不申なと申なれと蚕食
を常とする虜賊らかいふこと少も取にたらすいさゝかにても取用候は、
大事也

○廿日 晴 昨日中間壹人旅宿近所之溝に小魚を取居たるに折助く
と呼もの有中間怒て何をぬかすやといひてふりかへりみたるにアメリカ
人也中間も異人も互に驚たるに亞人之方を冠り物を取候而役割御早ふと

申挨拶いたし候立去候由也亞人は麻うら草履白たひにて小紋縮緬之衣
類或は蛇ノ目の傘となるも歩行するよし實に驚入たる事也亞人は蜜柑
を着しも買ひて大銀錢一文置て行鯛一枚も同様と申譯に而至る富める國な
り行末心配する事也

○廿一日 くもり又雨又晴 けふは 日本魯西亞永世之會盟とも可申譯に
而書面之爲取替有着服は 御紋附之羽織蜀江かたの野袴花山桃林のまき
繪太刀作之大小用之これは前中納言殿并左衛門尉之自詠を鏝に彫たる大
小也供立は旅中例之通也元來は日本に而も立派に御料理被下等可有之魯
西亞にても祝砲又は帆はしらのかさり等可有之處つなみにて下田は野原
にて何もなしフレカットは沈船といふ譯故いたし方無之魯西亞之全權日
本の重臣肥前守左衛門尉下田之長樂寺といふ海岸高キ所に流殘之寺に集候而條約
書爲取替候書面本書はかな書添書は漢文横文也横文を双方之通詞讀之爲
取替候御料理被下なし酒三獻に而鯛多く臺の上のつみ上ケ候而遣し候菓

日本に箱は爲
取替しは巧
入遺人したる
桐箱へはた
を箱へはた
なるも金の打
かるは織物
のたる織物
の袋は織物
約は書を入
には書を入
を不構と
故に構と
乍申構と
候こいさ
キ候ろさ
動

子なし幸に宅并新右衛門を贈候菓子昨夜船便に参候間右をそのま遣
し候使節殊々外喜ひ候元來今般御手厚に御取扱謝するに詞なし只々以
後命あらむかきり日本の御爲悪しき事はいたすましカラフトの事なと少
も御心配あるへからすなといひていろく謝義を申たり餓たる虎狼の
人に向ひ尾を垂食を求るかことし乍去彼も亦天地間の人間也難有おもふ
ことも有へし只々少も氣油断のならぬのみ也今般のことエトロフ半嶋カ
ラフト全嶋は取之候由之文通に既にカラフトには陣營迄をクシユンコ
タンに取建たるに右之陣營は日本に随意に取拂ひエトロフ全嶋日本へ
屬しカラフトは魯西亞と境を分つことをなす仕來之通たるへしと之書
付取之別段にシラヌシより百里余之場所日本附屬之仕來申達し置カラフ
ト之陣營を日本に取拂候旨之證文取之右之如くに参りたるは一に公
儀之御威光二に支配向中村爲彌其外之骨折三ツにつなみ四に神かせに
船沈みて食物さへに困たるを公儀より厚御取扱ありたるによる也今夜

はしめてよくね申候

○廿二日 晴 今朝は出立之積に付昨朝先觸を出し筒井は昨日條約濟に
而即刻出立之積にて長もちまてを出したるに夕刻御用狀到來魯西亞懸合
之様子は如何に候哉伺之上歸府いたし可申と之事也一同驚歎して條約相
立候上は魯人は下田奉行の引渡たる事故に取締等なすへき様なし一同は
戸田に居る也其こと江戸に御存無之故之御沙汰なるへしとの事なれと
全權御委任とは御用向之事也歸るにはいかに少事なれはとて可伺と之御
沙汰を不及伺取計候は不相成候間歸府一條に成候上は伺之上取計可然
と之事申談今日は川崎にて川留に成たるころに御滯俄に由てらの無
住なれば軒くち欄倒れて庭の塵拂ひたることもなく椽頬は鳥のあとのみ
なるかきたなくみえてよくも化物も出さりけむと俄にたみの破れ足に
引かゝりたるかことく覺湯遣ひのならぬ迄苦勞になりたりされと大御用
にかゝる所に間違ひ多しよりて静りかへりて亞人持來候遐邇貫珍と云

書の抄録等にかゝりたり此書は唐土香港と申所にイギリス人つくりて一冊十五文ツ、に一ヶ月ツ、賣出す也世界の御沙汰書の如し西洋新聞此昏これ風説書と申也といふものを横文字にせず心得になること計漢文に書たる也横はまの條約其節をさま橋より遠めかねにて所々を望たること内詳にはしる中々日本人の聞たるよりも詳也

○廿三日 晴 昨朝魯人より越たる條約書をよみ合たるに書損有直しとして遣す魯人漢字不案内に書跡あしきにこまり候而柿崎玉泉寺之僧をたのみて記し吳候様たのみたるに奉行所之沙汰にあらされはしるしかたしと之事也困り果てて西洋昏をわたし日本に宜しるし吳候様と之事也可笑のかきり也され共其人北京にて十年學文をなしたる故に存外に字の遣ひさまにはおもしろき事有○下田は行て奉行所となるへき地所を見分いたし歩行き申候忠四郎召連罷越候三里はかり也山水のけしきよし山家に梅多しさかり過てやゝ落花也下田は暖也當年はさむしといひなから氷

は至るまれ也けふ下田に異國人の船中欠乏之品を賣る所へ行みる蒔繪器磁器等多く出し有之候かみをくみて長して下たるは南京の人といふ也アメリカ人召連來る日本人に少も不變髪ペロ／＼といひて猪口之直段を附居申候其所へ障子をからりと明候而ロシヤといひなから大男入來る左衛門尉與三郎をみて御機嫌ようといひなから笑ひて冠り物を取てうなつくかことく禮をなす魯船之士大將といふかことし年は三十はかり丈六尺五寸畫をよくかく也ことしたるに少も不これ大かた魯人之仕かた也かゝるところ長崎といへ共會違人々驚たりなし胸塞りて直に立出候魯人はモーサイスコイといひて屢對話之席に出知ル人也

○廿四日 晴 畫像をもらひ候而國王の爲見御恩に相成候旨をも申立旨魯人布恬廷申之乍去異國の肖像差度候義は如何と及斷候處左候は肖像をうつし差上度旨也左候はと申たるに日なたに四方如雪なる木綿を張其内にキャマンにて差渡三寸はかりの目かねの如くなるものをかけ其内

に白銀のかゝみをかけたるヲ二間はかり隔向ひ居る也早廻り之針五六分はかり之内に顔色シハ出来物之あとまてうつる衣顔之いろ目もうつる也これは子孫へ傳へ可申と大悦いたし候

○廿五日 くもり 遅く候も今日ころは江戸に歸候積之處御用向出来候亦歸られ不申候それも分りたる御用歟骨の折るゝことならば却るよろしアメリカ之書翰一覽と之事也それならば通詞共にても可濟事也魯西亞之御用は無滞出来候亦爲取替も濟たれと此度のことく天變人事の故障多はなし初魯人共上陸を難澁いたし候亦存外之手間かゝり申候夫は道理之上に上陸爲致申候其次つなみ也これなくは十一月十日はかりには濟可申候十一月廿八日歟と覺申候魯船難船いたし候亦駿州宮城と申候所に着十二月二日船を引出し候と天風に沈船其内フランス船來る大騒動起らんとせしか彼船逃去て先ツ事なし條約爲取替は濟たれと船なくて魯人歸られすアメリカ船來りて以前之條約一覽之事被仰付候亦又延たり此躰に

ては又々事起るへし命有内はとおもへは心障はなし

○十二月廿五日 晴 下田長樂寺に魯人と應接也これは暇乞其外も濟たれと今一度對面いたし度と之事也段々申立之趣尤至極に聞ゆ布恬廷實に豪傑也われらも戦争等に屢逢たらはかれ位のこととはなるへけれともあまり難有御世にて心配少き故に別亦智慧たらぬ也トルコ之國風を評して其奪取るへきことのやすきを論し第一に遊惰のもの多しと申たり可恐事也これまた魯人ホシエツト之説也

○廿六日 晴 下田に寄合として參る井戸對馬守對話いたす○江戸に書狀來る歸府之御差圖一同躍然

○廿七日 晴 下田に應接之始末承に參る○布恬廷の手かみを差越榮之助によませみれば左衛門尉等之おもひの外に下田に罷在折角布恬廷のおもひ附に江戸にて正月を迎親族打より之事延引に相成氣之とく也右はフランス船と戦争の患を心配なるへけれと決る右様之事なしと安心いた

し候る江戸の歸正月いたし吳候様と之たのみ也布廷虜と申候も此わけ也
實にフテイ奴也

○廿八日 晴 六半時蓮臺寺村寶臺寺出立いたし候るなしもにて小休
いたし湯ヶ嶋村に着

○廿九日 晴 曉湯ヶ嶋村出立いたし候處途中に大急之御用狀來る本
たち野と申所に晝休いたし候而例之世に傳ふる修禪寺之トツコ之湯之
前を通る修禪寺は將軍賴宣家カを北條時政之弑せし所也夫を過て戸田峠にか
ゝる三里の上り也四方に石多き山なるにこの頃の大震にて小家位の石所
々に落有之候而其節之おそろしさいふへからす夫を五十町の下りさなか
ら屏風を立たるかことしこゝは谷の埋たる所道の潰たる所有みな地震也
戸田村は最上のみなどにて東西南を塞き北に口あり乍去林ありて風當り
なしこゝにて魯人の船をつくるを見分いたし使節之居所并缺乏之品わた
す所を一覽いたす使節之所に晝茶并蒲萄酒を出す使節には土産として

蜜柑一箱柿同斷猪一疋鹿貳疋遣す歸りかけいつ江戸に參候哉と尋候故に
使節之文通に安心いたし候而十日内に江戸へ夜すから歸る也と申たる
に十日に晝は正月の間に合ましと申故七くさ迄は賀義莫太之由申たるに
承知いたし候而子供たましの如くもの有わさと正月の賀として奉るとて
キヤマンにて大サまんしうの如くなる一ツは左衛門尉一ツは奥かた一ツ
は御嫡孫さま其内小なるは次男の御孫へとて贈たり實に子供たましのこ
ときもの也今日はかこわき六人徒五人二本道具に參る魯人共四百人計
出て見物せりかならず圖となすなるへし

○晦日 晴 曉戸田を出立候而本たち野に晝飯給七ツ時前原木宿に止
宿こゝより葦山には十八町也と申候江川太郎左衛門手代召連候而太郎左
衛門嫡子安之丞來るあくれば十三歳也と申也よほとの子也御用立可申
兒也當年猪狩に出候而鹿をうち留候由鋏炮も宜かるへし十二歳之兒なか
ら咄もわかり太郎左衛門不快之容躰等つまひらかに申也○去年之大晦日

は魯西亞人と夜四ツ時迄之應接元日はより合也當年も似たること也

安政二年正月元日 晴 原木宿出立いたし候も箱根にて晝休小田原へ止宿いたす○雲助共あの人よく旅をする也ことしも元日夕箱根越必一度にては濟ましといさゝか心つけられたる氣味にて畑に青貝ぬり物を買申候大笑也

○二日 晴 六時過小田原宿出立いたし候も大磯にて晝休保土ヶ谷へ止宿○そめの親もとより奥方へとて干魚をくれ申候初穂を給候處殊によろし○奈良へ引越前に居しもの之由くらと申女今は保土ヶ谷宿邊農家の妻と成たるよし俊藏與助を見附候も物語いたし候由其女われもみたり顔に覺あるかとおもふ澁かみに目鼻のことき女途中の農家に手をつき居たり十年の昔おのれか事はしらす人のおもかけには驚也

○三日 晴 拂曉に保土ヶ谷宿出立いたし候も川崎宿にて晝休七ツ時前

江戸着

校訂者曰 原本ニ正月四日以降二月十一日迄ノ記事ヲ欠ケリ今原本ニツキテ按スルニ江戸歸着ニ依リテ筆ヲ絶チ二月十二日再度ノ出向ニ再ヒ筆ヲ執リタル爲ナルカ如シ

安政二年二月十二日 終日風雨 六時過出立いたし候も川崎宿にて晝休保土ヶ谷に止宿當正月二日止宿之本陣へ三十九日目に又止宿也○御養父様の舌疸既五年正月下旬に舌より出血すること耳たらひに五はいも御つかれ甚しよりて出立御免之義相願候處不容易御用に付格別之御人撰被差遣候間尤之願には候得共難被及御沙汰候間早々出立いたし候様伊勢守殿御書取御渡に付無余義今日出立也出かけの御暇乞腸寸斷するかことし七十七の御老人病の床に臥玉ふか起歸りて手をとる哀み玉ふ命たにころかなふものならはとしろ女かよみたるうたをおもひ出てはつとはかりに只泣になきて目出度歸府拜謁のことをいふに腸切斷するかことし

○九ツ時過よほと地震也かな川宿入口に中村爲彌其外急御用狀到來に付附添之御普請役へ夫々取調申付るほとケやの旅宿に同伴之御勘定星野録三郎に取調申付候あ夫々の差立申候

○十三日 晴 昨夜馬入川出水に船わたし不相成旨申來るより藤澤宿に止宿平水六尺ましと申す也ならへ引越之節も大雨にて水まさり既に川留に可逢といたし候事などおもひ出候

○十四日 晴 馬入川明き之注進承候あ五ツ半時藤澤宿出立いたし候處酒匂川出水に人々頭上まで水參候由に付大磯に止宿○附添參候御勘定方星野録三郎旅宿に昨夜盜賊大小并菓子箆筒被盜取候旨届出る○江戸の御普請役來る十二日之地震はよほと也と申也御病人如何と心配いたす昨日之雷雨大森邊嚴敷候由藤澤には微雷也

○十五日 晴 六時過酒匂川明を待候積に於出立四時前川明也小田原宿に晝休いたし同所を南之方曲り山踞海岸を二里參ると根府川御關所

也この邊を出る岩を根府川といひて庭石にする也小田原を熱海迄七里之間海岸山踞のみを行也江之浦と申所に於小休いたす小田原を四里也同所を二里行候と伊豆權現也 御朱印三百石にて箱根權現と相對したる大社也別當般若院山の中腹にありて石垣塀等城の事とし伊豆權現の今日は祭にてにきやか也同所を一里に於あたみにいたるこの邊いづれも谷間の小村はかりなるに熱海はことの外に打開けたる所にて料理茶屋髮結床等江戸の事とし山中の一世界桃源の事とし今井半太夫方に止宿いたす金花堂の本店とか申也玄關前に湯壺有掘抜井のふき候ことくにえたち居る也夫より所々に引也半太夫方には紀州其外諸侯又は奥方泊り之札至る多し東海道の本陣にても半太夫方のときは少し其上茶屋かゝりにて何事も風流也湯とののはカトラ口にて巾三間に五間もあるへし楠の無ふしにて立派なること也湯はあつくもぬるくも自由になる也清らかなること水晶のとき湯に亦少も臭氣なし濱よりわくと申也いかさまにも潮の事とし左衛門尉湯

はきらひなれと此湯にてはとくとあたゝまり脊中となかしまらひたり
常に罌丸を塩にて洗へところは元來潮なれば其事に不及大笑也

○十六日 晴 六半時あたみ出立いたし候而網代と申候所に晝休いた
し伊東庄和田村といふ所に止宿この村此邊には珍敷うち開けたる所にて
村道なから巾五間も有へしよし有氣也里人に問ふに誰かはしらす城あ
といふ所有と申也伊東九郎などの一類にはあらぬかこゝにも温水有村内
の溝よりはふり出申候昨日より乘輿なし惣歩行也

○十七日 曉より甚雨夕七ツ時止 六半時伊東和田村出立いたし候而赤
澤山の麓を過八幡野と申所に晝休いたし候處河瀬村出水に假橋落た
れと小川に付御急之御用無理にもこし立と申こと也江川之手代共世話
たし越立濟候而稻取村といふ所に止宿三百石之村なれと人別三千人有
れ出羽守殿之御加増地也其頃人のかれこれ申したるも宜也とけふぞ知ぬ
る○昨夜之和田村に有城あとは伊東家之城跡に伊藤入道之墓も有也赤

澤山は河津を工藤か殺たるといふ所也伊藤の鎮守に久須美明神といふ有
といなり也 ○今日もみの笠に歩行也これは身にもくすり百姓も助る故也
久須美の神社は間宮武三郎知行豆州加茂郡岡村と申所也和田村之隣村也
久須美佐渡守など由緒なるへし

○十八日 晴 六時過稻取村出立に四半時前下田に着いたす海善寺と
申寺也庭に山有五間はかり之大石有地震つなみともに都合よろし新右衛
門方は福泉寺と申候之同様之庭に是又安心也

○十九日 晴 四ツ時都筑御役宅に寄合に付罷越申候八ツ時過新右衛門
着直に寄合所に出席也至る薄きあさき無垢蕪黄之袴 御紋之御羽織
にて立派也○六ツ半時頃忠四郎來るいろくくと咄候而同人弱り候を引立
遣し申候夜四ツ半時頃歸り申候大に氣力を得たるけしき也

○廿日 晴 出かけ新右衛門來る○五ツ半時揃に假御役宅に一同寄合
夫々所々巡見いたし申候欠乏會所之參候處亞人魯戎參り居申候役人を見

候も一同歸申候其節アバヨ玉泉寺に參ロウと申たる由也玉泉寺に見廻りとして參りたるに亞人を美女本堂に出候も日本に役人を見居たり黒キかみを短く切候も左右にかき分けこしには裳衣モコロモといふかときものを着用せり廿二三なるへし外に男女子二人居たり兒共いづれも奇麗也彼國の犬二疋居申候先達も魯人を贈たる書にあるかことし魯人の墓所に參り見申候日本風につくりたりこゝに亞人の墓も有これ亦同じ夫を大浦といふ所其外海岸巡見いたし柿崎村へ歸たるに辨天嶋の社に參り候節亞人夫婦居たり供まぢの中間に持參候床木シヨウキをみてことにめつらしかり候も中間にかり候も夫婦していろくゝにいたしなかも居申候夫を下田へ歸候途中に魯人買物いたし其身は反物と陣笠をもち其外は日本に商人の小僧にかつかせ歸り來りたるに行逢たり冠り物を取候も御早ふと申たり新右衛門其外初も面々このけしきをみて歎息していろくゝと申候も憤り申候左もあるへし實に日本地のことくにはみえ不申候

○廿一日 晴 より合に付御役所に出る○小田ははや蚊出申候○蓮臺寺村のもの追々來りて着怡を申すみやけに目錄遣す存外也○父上の御不快不被爲變悪しくは無之由新右衛門を承先ッ安心也其躰ならば歸宅迄別條あらせられまし○蓮臺寺村に湯も遣はれす不自由になれたれば此度の下田は至るよろしきかことく悦び申候乍去寺はつなみに逢大地震にいたみたる也食物は朝塩たちめしはかり例に通也ひるはみそに握めし菜は夜一菜汁あれは菜なし勿論一滴の酒もなしさりなからなれて樂々とおもふ也今朝を居合刀大棒等を遣ひ申候書物はよくよめ申候小學春秋歴史右の日果畢もひまあれは歌をよみ詩作なといたし申候夜はいたたくたひれ居候やねむし此節別も健也尤灸事は不怠日々也藥これ又同じ此こと母上にも御聽に入度かならずしてかなしき也一番からすを四ツまでよほと間あることを在出アツして知たり江戸の朝夕多事實に驚入たること也○昨日新右衛門も山野を歩行したり少のかこもなしあまりくたひれたる躰なし○

御用有之候。明後廿三日戸田村に參申候旅の中なる旅にあさて、當惑也。
○二月廿三日 晴 六半時下田村出立いたし候。二ヶ所之峠七里之山道を越候。松崎村といふ所に參り同所に晝休同所をサツタ峠之方に向候。而大洋之ふちを八里船にあたり戸田村に參る夕七ツ時前也。御役人之往來に百姓共難義いたし候に付今日はかこに不乗は勿論つらせもいたし不申長持其外もなく都而之人足を爲減候處いつも之ふれ當より大に減先觸六人之人足遣ひにて相濟申候。これも足の稽古有之候故出来ること也。湯殿に參候處金玉を洗ふ爲に如雪やき塩を大病人に與ふることくにいたし有さすか之金玉北風に逢たるかことくちみあかり申候。
○廿四日 晴 五ツ半時戸田村大行寺に魯人使節布恬廷呼寄候。及應接夫の魯船製作所に參る日本之船大工異國之船大工集り候。而働居申候。日本之方今は上手に相成候由アメリカ船かゝり居候間廻り見候處黒ン坊居申候。色全くに塀墨に塗たるかことしハツテイラに居候十五六之男は日本

人と少も違ひ不申候扱々紛敷もの也

○廿五日 晴 旅宿にてより合有之候。○下々迄には數十人之面々二度之辨當家來は近習中小性共に三人と申候譯故大いそかし也。○魯人わか考置候通之書面差出安心せり。○墨夷スクウチル船へ魯戎百五十人乗候。而退帆せり。

○廿六日 雨 魯人と五ツ半時を日くれまで辯論いたす。○戸田といふ所は八百石余に而家數七百軒余人別三千人有三方は高山及屏風一方は海也。乍去沼津を八里余南に而暖なる地也。はや八重さくらは散かてにて牡丹盛に孟そうの竹の子出たり。

○廿七日 雨 過日異國船の出帆のけしきを聞に出帆の百五十人とのこりのもの手を取り口を吸ひ候こと常よりは甚敷或は泣き或は叫ひ其内乗船してみなとをいつるとき再び互に聲をあけてわかれ候由さすかにみる人も哀になり候由也。

○廿八日 くもり又風 伊豆沖に異船みえ候處いつ方にか參候由下田より申來るいやなること也英拂の二夷近々可參もしれす

○廿九日 くもり又風 昨日は唯今濱より上りたりとて大鯛其外持來るいつれもヒン／＼とはね廻り申候人々めつらしかり申候○昨日水戸殿家來鈴木半兵衛來るこのさとは鑿を爲持候人を見たることもあるまじき所なるに肥前之家來も來るよしに付所々之家來入こむなるへし○戸田村之いなか娘にいさゝか澁ぬけたるか二人有いかにして知りけむ魯人其名を知りて呼候由也よき女にはなりたきもの也

○二月晦日 くもり 去ル廿七日卯刻御養父樂水様久々御病氣之處御養生不被爲叶御病死之旨申來る尤御用向は平生之通可取扱旨之達し有之候御届は備前守殿に候得共委細は伊勢守殿にも申上候旨同役松平河内守之申來る樂水様御病氣は舌疸と申候ものにて五年已來也御用多に御看病もいたし不申殊更在出まていたし恐入たる事也出立延引之義相願候處段

々々御書取伊勢守殿御渡有之候間無余義出立いたし候跡也○昨日は精進也○五ツ時頃下田に入候アメリカ船魯人迎として來る長四十二間に帆は十四かゝり居申候船賃高直也とて返したり戸田村に葉白の松有しら賀松と申候

としをふる戸田の高根のしら賀松万代おける霜にや有らむ

岩瀬修理の詩を和して即吟

日對異人不識春 憐看面上作堆塵 辛勤如是願救得 三百年間鼓腹人

○三月朔日 雨 九ツ時より寄合いたす○此節喪中なれと日々御用向にて精進はかり也其上旅中故これと申候つゝしみもならず寄合席にやは談笑もせねはならすいかにも朝夕恐入居るはかり也

○二日 雨 一昨日異國船をみむとて庭の山の上りたるに其躰をみると百姓壹人かけ出し來りたり何事と家來より問ふにそこゝに猪の窠有と

て教くれたる也庭の山峯につゝきて春日山位もあるへし

庭の山は遠き高峯に打つゝきはてをもしらぬ山てらの庭

都人あはれとはみよふす猪とも床をならふるたひねする身を
感ありて

行末をねてもさめても忍はれぬかくなるさまは夢かうつゝか

これは異人と皇國人打よりて船をつくる也互に手まねましりに物語して
こと辨する様等をみて也

○三日 くもり けふは樂水様の初七日に被爲當きのふは御回向其外に
人來りしやいかに戸田村はくもり也江戸はいかになとおもひわつらひ候
母上御いたみも不被爲在候哉昨夜小田よりたより有太郎の詩作來る一覽
尙出精あるへし復太郎へ遣し候同人直し遣すなるへし同人の直し以前に
付太郎作を正眞也乍去あまり可笑こともなし布恬^{延脱カ}阿閣老^{延脱カ}被遣物を義
に付俊藏を取計委細同人の日記にて相分り申候よろし然るに布恬^{延脱カ}申談

候處のせ參候船無之候に付當十月預り吳候様と之事也

○四日 雨 此さとは二日三日にて相濟候積之處おもひ之外にひま入て
はや十二日に相成申候江戸は出かはりと成申候奉公人のあらたになるは
いやなること也布恬廷の畫像をみて

休言此夷猾 愧殺汝奸雄 一片三橋艦 横行東海中

○五日 雨 昨夕より沖を方五里はかりに異船みゆるいつくの船に候哉
しれす戸田へ向ひ來る上は亞船なるへしもし英拂二夷ならは大こと也亞
船過日之直段つくにて歸りたるなるへし異情の案外なることかくの如し
○昨日下午より便有て太郎を詩作來る其外文通有樂水院様を御法号來る
いとかなし五ヶ年來を御大病とは乍申今更の如くにていふへからさるか
なしみなり乍去母上の御つゝかなく一同を御手當等安心せり伊勢守殿よ
り御たのみの品々出來候節折悪敷ことにて俊藏等を取こみ察入たること
也○おさとのうたはなの袂にては如何上を句にあこそをかゝりきれ可申

哉下之句ルとめててよろしく候哉おさと乍例行届たること感歎せり○昨夜も五ツ時まで之寄合也○樂水院様御葬送之にきやかなる難有事也御存命ならば御覽に入たきとのこと尤也されとこれも亦涙也

○六日 くもり 下田の拂良察船渡來之旨注進有之候○右に付下田の九ツ時より出立いたす○魯人之御用は相濟候而下田の參る下田のフランス船參候由承候而も布恬廷少も不驚昨夜五ツ半時試に爲彌を遣したるにはや寐たる也起して懸合したるよし其落附別段也

○三月六日 晴 昨夜布恬廷の用向有之中村爲彌を遣したるに八ツ時歸來る布恬廷は熟睡いたし居候由此節フランス船渡來之義に而下官は大騒きなるに別段なること也○戸田之御用濟寄に付九ツ時出立いたし而松崎の參申候九里也途中山はかりにて險岨いふへからす其内壹里船にのり申候曇月に而四ツ時頃也存外之浪にて家來共嘔吐也遠州なたの浪月にて光けしきものすこし九ツ時前松崎村に着いたす昨夜御用に而寐不申候故

つかれ甚し○御目付岩瀬修理も松崎迄被參候積之處大つかれに而其手前三里へ止宿筑後守これ同じ今般之旅行はかこをつらせ不申候故人々大に困申候このみち中々以箱根なと之類にあらず可驚險岨也

○七日 雨 六半時松崎村出立いたし候而峠二ツをこえ候而蓮臺寺村に來るこゝへ順作こゝろして駕を越したり一昨日夜通し同前昨夜も九ツ時過に臥り八半時に急御用狀に而被起六半時之出立故不眠も同前故歎今日はめつらしくつかれ候間三十二町之所かこに乘申候蓮臺寺村は久々逗留いたし居たる所故村役人共遠く數里之外へ出迎申候九ツ時過下田の着也其外役々之着は日くれ也

○八日 晴 下田は朝冷氣也左衛門尉其外雨を侵し候而險岨も不厭參たるにフランス軍艦は昨朝出帆いたし申候今更になり候而は目出度かと心附キ申候○今朝戸田の急狀來る同所之アメリカ人六人海中に飛入逃去候由右召捕方之手くはりいたし申候

○九日 晴 アメリカ人逃去候を江川太郎左衛門手代杏之跡を慕ひ候
戸田山中に六人ながら召捕候旨申來る○堀田備中守殿より來候自書并
菓子今日取出し申候

○十日 晴 魯西亞人差出候書付之内に閣老之人々と目の前にて議し不
申候は難成事ありて筑後守一同御目付岩瀬修理
は昨曉出立也下田出立いたし候湯ヶ
嶋村は八ツ時過到着いたし申候六日七日と險岨を歩行いたし候間今日は
天城山六里のみちを至る安く越申候人はくるしみ可申事也○湯ヶ嶋之本
陣に

またたかき日かけなからにほのくらくこの間にくもるやまかけの庵
なしもとゝいふさとの本陣にあらひはかり一種煮てしるをも添へす出
したりなか／＼にうれしくて

とりかさりなき賤の男か真こゝろを味ひふかくおもふさわらひ

○十一日 くもり午後雨 箱根にてこは飯をうる聲をきゝてならにて

女共か真似したることをおもひ出候○箱根の焼野に雉子雌雄遊ひ居て
雄をなくをみたりいとめつらしく候○けふは湯ヶ嶋村を拂曉に出て三嶋
宿に晝休はこ根に止宿也○三嶋の本陣は地震後初る旅客を引受候由を
いふ也普請は新になりたれと土藏は骨はかり也地震の時は竹藪へ逃行た
るに途中地われて水を吹出したるよし等かたるいとあはれなる躰也目錄
遣し候川路彌吉さまと仰られたるとき御宿をいたし其後も一度止宿有し
といふ也三十年の事也

○十二日 微雨 六時箱根出立いたし候小田原に晝休藤澤にいたり
止宿○畑に戸田より御用狀來る一覽之上夫々取計○梅澤にても江戸
御用狀來る其内閣老より被仰下候義等有之是又夫々取調いたす旅行中も
希墨をはなすことならず長崎已來かくの如し其内おさとの日記太郎之詩
作等も來り候

○十三日 くもり 今曉江戸大急御用狀來る忌 御免被成候間着次第

登 城可致旨之御書付御渡也右に付即刻出宅いたし候處八ツ時霞關迄罷
越候處御退出之旨河内守に申來候間直歸宅

○十四日 雨 例刻羽織野袴に登 城御用部屋に被召出品々御尋之義
有之候

○十五日 晴 月次御禮有之例之通登 城

○十六日 晴 例之通登 城御老中の無急度申上候而佛參いたすこれは
中歸中故也

○十七日 雨 例刻登 城

○三月十八日 雨 例刻登 城 御朱印御預申置たるを受取明後日出立
之積先觸出す

○十九日 雨 在宿

○廿日 晴 六半時早メ之出立に程ケ谷へ參る○此度は中歸故かたく
斷候間送り之ものは町人四三人也○今日も遠馬多し昨日之用意とみえ宿

々所々馬飼之水并高張挑灯出し有之候

○廿一日 晴 七ツ時程ケ谷出立いたし藤澤に晝休大磯に止宿いたす

○藤澤へ戸田より書狀來る魯人スクウチル船に布恬廷其外出帆いたし
候由昨今二日に江戸戸田に差立候書狀に卷紙一卷少々残る

○廿二日 晴 大磯宿出立いたし候而小田原に晝休はこ根に止宿也例
之通多分は歩行也○藝州之嫡子上總介に梅の木と申候大磯はこ根之間の
建場に於行逢候旅中見舞之使者來る

○廿三日 晴 曉に宮根出立いたし候而例之コハマシノ聲にて女共か知
る三ツ家と申所まで行たるに大久保右近將監に行逢たり用人の大軒廉平
は元家來旁しはしと閑談したり右近將監より戎狄の臭氣をされとて黒方
をくれたり廉平は養命糖を差出し候右近將監歌を殊にこのむといふこと
なれと立ながら同前の閑談故聞まなしわかれに
君にけふ逢坂山の關ならて行とかへるのわかれするかな

なといひたり夫を三嶋に晝休こゝには江川太郎左衛門之元手代待受
ゐいろくくと申旨も有畢本立野村にいたりて止宿立野は館野にて何そ
いにしへのゆかりはあらぬか修善寺へ三里の所也

陣着候と鼻
かみ袋と
かみなたり
今時の武器
農具に不及
候

○廿四日 大風雨 六時立野村出立いたし候七ツ時下田に着也○湯ヶ
嶋と云所を天城山御林を越すみち下田中難所也よりて陣みのにて歩行
したるにはしめは雨中之山水奇也々と申たるか末にははなしもなし立
場といへと番所之如くなる茶屋にて湯をわかし置はかり也握飯を食する
に長柄をさしかけさせて樹下に床木に食す湯を吞に家来すふぬれに
る笠は茶碗へかふせ歩行などいふ躰也其余推してしるへしわれ奉行に
くの如し下々の辛苦おもふへし太郎市三郎など其ことをしらすいかにも
残念也供をさせ度事也鶴匠鷹匠役之末と申候よからぬは御役之もの不
陰徳もあるへけれと子孫御役の苦をしらすよき氣になりて御役つとむる
もの、苦勞をつくしてたま／＼食するもの等を食しよき衣類をきるをみ

て其まねをする故に罰あたりて御役人之こともは乞食非人之如くなる也
さてくいたし方もなき事也人の苦勞をたゞ取故天道の罰を當玉ふ也

○三月廿五日 晴 例之通より合いたすアメリカ之美人日曜日と申には
黒襦子之衣類にてかみかさり大造にて顔へは人形遣ひのことにきれを
下ヶ粧候由此女糸竹之こと其外しらぬことなきよし魯人ホシエツト咄候
由瓢箪形之三絃をひき歌ひ候由人間之聲とは聞えすされと夷人は涙を流
し承候由

○廿六日 くもり 新右衛門参る互に母上のことなと申出候落涙いた
し候今朝は新右衛門方々トロ、麥飯をくれたり六椀喫之

○廿七日 雨 例之通より合は出る今朝例之通大刀を遣ひ其上居合を抜
歩行ならしいたす庭上の大岩上り下りに凡二丁に成これへ上ればつな
みの患なし

○廿八日 風雨 昨日七ツ時頃アメリカ船二艘渡來一艘は蒸氣也航海測

量術修行船之由也右に付御用有臥らむとすれば支配向來りて申談いたし候間床を三度とり申候假御役所より合中故異船渡來之注進に様子のかはり候躰火事場役人之太鼓を聞たるかことし

○廿九日 晴 九ツ時より寄合也○昨夜宅狀來る○母上椽より御落被成候御手足を御いたため被成候と事乍去御氣遣ひあることにはあらざるよし名倉申たるよし先以之事也段々日記其外をみる内に家來共之内狀におさと朝夕其外之心附別段なること也樂水院様御病氣已來御引續之ことなるに實こゝろをつくし候ゐいたし感服之事に中々別人には出來不申事としるし有之候これにて少安心也何分にも此末之事御心附給はるへし○民藏之妻朝右衛門藥きゝて大に宜と之事彼妻万一之事あらは民藏さそこまるへしと朝夕おもひ居故大悦也

○四月朔日 晴 例之通より合有之候○下田にはほとゝきすまれにて山

中にもは時に寄承候由也○アメリカ人上官等上陸いたし候由遊歩中女湯を見附てふし穴よりのそき候由也

○二日 晴 海岸所々巡見いたす○松魚舟歸候を見受申候今日初るとれ候由下田にもは初漁之松魚は下田之岩の上に勸請有之候惠比須へ備候事之由惠比須さまか松魚釣たとは少々商賣違ひの如し初松魚は奉行并組頭之差出事之由也忠四郎方々十きれはかり來る此節御用中例之通禁酒に付飯のさいにいたす下田に夏大根なしわさび也今日の躰美人をびくにゝいたし候御寵愛するに似たり○今日亞人之美女をみるに髪くろし縮にてあみたる頭巾をかふり瓔珞のことくなるものをさけたりこしの細きこと蜂の如し日本女の半分もなし肌の白きにはこりて紗のこときものをきて肌をみすること有よし也

○四月三日 雨 例之通より合いたす右席に御奉書到來也井上新右衛門下田奉行被仰付之諸大夫被仰付二百俵に御加増被成下候而來三月迄在勤

可罷在都筑駿河守は新右衛門の御用向引繼候而歸府いたし江戸懸可相勤
 と之事也新右衛門俄に諸大夫名に相改候事に成井上を本國により候而信
 濃守と相伺候積右に付早速家來共を遣し候而世話いたす早速白無垢一ツ
 白襟を襦袢一ツ遣之衣類をしらへいたし候而母上御存命ならはいかに御
 歡あるへくと頻に落涙いたし申候新右衛門迄諸大夫とは父上行道院様ま
 ても御驚可被成候難有 君恩をことは申候も大かた也實に兄弟二人芙蓉
 之間諸大夫とは恐入たるのかきり也殊更下田を大御用いかにも恐悦也田下
懸り之義は何と易に天地鬼神人道を説てみなみつることを害しみつることを
 歎勘辨もの也にくむとありされは天地鬼神人道に對し恐入たる事也以後いかにいたし
 可申哉只々謙遜の外はなしこのにくみを避くるに謙也と聖人も仰られた
 り謙は和訓へリクダルなりへりと申候得は無理なる寶を少を貯不申施を
 つとむへしクタルと申候得はこゝろより人にくたり候か第一に衣類其
 外共に人より下たるものを用ひ不申候而は不相成さて六ヶ敷心痛此
 事此事也

事也このへリクタリ多ければにくみを防く人數多也へリクタリは憎之城
 郭也少きは堀を卑くし堀を淺くして籠城するかことし可恐事此事也可慎
 事此事也

校訂者曰 原本ニ四日ノ記事ナク

○五日 くもり 宅狀來る母上御中氣を由さてく恐入たること也御容
 躰を様子御ねふり之躰等不一方と心痛いたし申候乍去家來女共も附切に
 而新家も隔日に止宿を由先以之事也家來一同右に付骨折候由過分を至也
 おさとの心配其外共に察し入申候○大次郎と小一郎を新右衛門方火急に
 差支候間遣し候○より合として罷出候留守中亞人參り奥の方へ行かむと
 する故に秀三郎押出し候處何かかり候躰に而肩にあるイホエツトのふさ
しるを示し秀三郎か帶したる脇差に指さし寺の本尊へ指さし何かいひた
 れとわからす大かた肩にふさあるは武士も同前也寺院に參候は約定濟也
 夫を押出すは不心得と申たるなるへし

○六日 くもり 在宿亞人は女房と子供とを並へなかめてたのしみ候上
に女房の口を吸ふ故番人の日本人大に驚申候○船大將の亞人亞人の美
人の上着をもち遣し候而其女の首を抱へなから白晝に下田之町を遊歩す
る也國風とみえたり

○四月七日 昨夜より之雨をやみなし 八ツ時より寄合也これは御用向
船間といふかことくなれば也川留と同じころ也昨日は久々に而字をか
き申候戸田之もの達而之たのみによりて同村の白髪松を

立並ふみとりかなかの白髪松ひとり千とせの霜や置らむ

とよみてしるし遣し候其外旅宿海善寺之住職に被頼候而一二枚しるし遣候

○八日 くもり 下田奉行亞人と應接有之候○左衛門其外はこの應接に
は不出山に上りてみるに新右衛門之供立其外立派也三十日以前は調役な
りしか今は京大坂町奉行之上坐也母上に入御覽度と落涙也

○九日 晴 母上の御不快いかに江戸より便もなきもなか／＼に此ほと

はよろしき也○今朝庭中の山よりみれば蒸氣船一艘みなとにかゝり居た
り驚て問は昨夜亞船戸田を歸たる也土地のもの異人になれて平氣也いま
た犬はあやしみて異人を吠る也これも今に吠ざるへし

かはり行下田のさまに驚て初ほと／＼きす血にや鳴らむ

○十日 晴 忠四郎來る一兩度申談候義有之候而呼よせ申候同人出精に
而御爲を存候義殊によろし○昨夜アメリカ獻上之目かねに而月をみたる
に俗に兎といふものは月中にくち木のこことく村々之高ひくありて其ひく
き所兎のこことくみゆる也月中にくろきものなしみなすきとをるかことき
こと外の所と同じ其外に水玉のこことき所或はかけ口之段々うすくなりて
ギサ／＼のあるけしき或は一躰の地紋等中々筆の可記にあらず近く申サ
は桶の中にて半分とけたる氷を日なたにつるしてみるかことし○宅狀來
る母上少々は御見直し申上候方之由先以之事也右に付不相替なからおさ
と之心配別段之よし市三郎并家來共之申越候つら／＼とおもへは開闡院

様御大病中をおさと御看病申上候。樂水院様又此度おさは左衛門尉之
大切之場之手助り右故こゝろ遣ひ少く御用向にかゝり居候千萬忝候。これ
は實に謝するにことはなし。○高山之娘名失念ッサノヲノミコト病死之由
さて、可憐乍去至る病身存命にても啞にて聾にてはいたし方無之候外
孫にても忌服無之候旨同役を申來候旨家來より申越候。○おくに天のいま
しめ也別る可愼佛へ題目か念佛を唱候よりは其身を可愼其事申聞可被下候
○十一日 晴 新右衛門事信濃守と改名いたし申候。○今日は美作守信濃
守異國船に參る祝ひ大砲の音夥しく響申候自分之事よりも心配いたし候
る八ツ時より遠目かねにる山上より見居申候しはし有之候處沖之異國本
船ハツテイラ一艘湊内之蒸氣之方に乗よせ右に引つゝ候。新右衛門
等なるへしすけ笠多くみゆる日本船來る。本船相濟候。蒸氣船 一覽として來る也。これにて安心
候。居間歸り申候しはらく有て歸宅之案内有安心せり。早速書狀認候。様
子承に遣ス信濃守を案事候にる母上御存命の御心配おもひはかり申候

母上のことおもひ出候序ながら記す俗に大往生を遂たるといふことを申
す也。人は死するるときよくやすらかに死すれば其人かならず再び生るゝこ
ともしあらはよかるへし入日のくもりて悪しき時は其翌日の風雨など必
あるにておもふへしされ共病氣のこと故是非なし。伯斗とくの疾聖人の御なけ
きありしわけ故賢人君子非業よからぬ死をもする有必大往生といふにい
たらすといふ人あるへけれと此人にして此疾あることゝくりかへし仰ら
れたる御ことはをおもへはよき人はよき死に様先ツ十に六七も其余もあ
るへしされは多きかたを常とすへし賢人君子のけしからぬ死様するとき
實に賢人君子ならば其時にいたりて少も動かさず万世に名をつとふる也
これ錦の上に花を添たるかことくにて大往生をかきりといふへし其時に
迷へは小人也云にたらすさらはよき人の雷死などいふこと必なしといふ
へからすといひなから昔よりある書に小人の雷死等はあれと君子はき
かすもし君子にして有は伯斗とくの類也。夫を万人に一ツの例を引て云ときは

孔門の御弟子はみならい病なるへしといふかことし小人の悪を好むより申こと也とるにたらぬ也母上の御臨終のよかりしによりて有かたさのまゝにしるす也

○十二日 雨 異船二艘出帆之積なるに雨にて不出しかるに沖のかたに又三艘みゆるとの注進ありさてくもうるさき事也○亞人に出帆已前と相成候一兩日已前玉泉寺に参り居候亞人を立ふる舞有之候躰也所々花をさし候魚并けたもの、肉などを煮候酒を出し候由也例之美女なり物にてさわき参り居候魯人も亞人も惣おとり之由也夜四ツ時を曉七ツ時前頃までおとりつめ之由也よくもくたひれ不申事也角兵衛獅子壹万まはされ立くらみと申候事も有之候に案外なる事也○江戸のモノハと申候いたつら一覽候處其内に唐人につりかねと申候こと有之候由大に笑ひ申候○四月十三日 雨 昨日之亞船は一艘に魯人を送り届候而歸來れる也先よろし

此取締に役々夜中見廻り也難義なること也

○十四日 晴 昨夕亞船本船出帆今朝亞蒸氣出帆也○昨夜四ツ時頃下田奉行はより合也白濱といふ所へハツテイラ一艘上陸之由さてもうるさし

○十五日 晴 今日所々奉行屋敷等之地所見分として参る○宅狀來る母上御同邊之由御痛氣も有之候由さてく恐入たること也おさとの苦勞を家來共頻に申す也○此以前之狀に太郎鍍炮のすためいたし候由甚よし俊藏之深切乍例感服せり當時之武術鍍炮之外なし其次は刀槍なるへきか一有て二なきかことしすため決而怠るへからす此節士共五六人も抱申度候其内に鍍炮打壹人はほしく候太郎之世話いたさせ申度候俊藏世話にて柏木宗藏などにたのみたらはあるへきもしれす心附へし○一昨夜は一寝入いたし候而窓を見れば下田奉行は御役所を引也夜に成にはかより合也信濃守も太こと也○亞人之夫有之候女はもとイスハニヤと申候國之遊女也今般夫は魯人を送りて出帆して歸遅し英拂に船を奪たるとの風聞

書物なよみ候者并鏡炮打は別段に候給金な可遣

此不禮し
動之堪し
は強つれ
屈之若も
の共憤怒
けたるお
ひやしき
候ひられ
申も

有によりて絶食にて五日はかり平臥ホヲトロ計少々申也然るに船の歸り承候
亦起上り遠目かねにて見居たるに亭主ハツテイラにて如飛のり附來れり
これは船へ與力を懸合にやりたるに急用有夫婦顔を見候とかけより候而日本人
とて懸合は十之もの二ツばかりにて斷也
立合之人多く居候なかにてだき附候而いろく泣くどき人目を少も不
憚口を吸ふこと至る久し其上に而夫婦手を引あひ候而一間之内は入戸を
びて出ず其舂犬にことなることなし魯人見舞に來りて右之間は不入勤
番之日本人に對し指さしをいたし候而ヨカくといひて歸候よし也○魯
人之酒狂人手にあまりたるに山崎又十郎手もなくねち伏て地を押付たる
に魯人霜かれの虫のことくなる聲を出して日本人ヨカくといふ也一向
に不構引すり行て魯人之役人を引渡したるに其ものを四五人打より大に
敲キ其上にて日本の深くわびを申たるよし近頃にてころよき事也ヨカ
くといふこと長崎に而魯人承夫の亞人迄ヨカくをいふ也可笑○亞人
日本を退帆いたし不申候由六ヶ敷申居たるか女房のなけきにていぼより

ちいさく綿より柔にくにやくと成て早々出帆となれり天幸とも可申也
王昭君と申題にて

五月蠅なすえみしの塵も治りてこのたをやめにはつるますら男
と申候歌を以前よみ候ひしか日本人一人之森山榮之助か舌應接懸り之舌悉
集り江戸役人之筆の力悉あつまりて亞女の舌には少も不叶いにしへより
夷には別而女はよくきくとみえたり

○十六日 くもり 九ツ時より所々の相立關門見届として參る伊豆はい
つ方も石山に付石をくりぬきたる所なとみちに有ていと險岨にみゆ○今
日もひまにて川留のことし

○十七日 雨 五ツ時頃三里沖に異船之參候旨之注進有間も無庭上の山
へのほりみればはやみなとへかゝりたり千次郎なとさへにみなれてアメ
リカのスクウナル船也なと申候也戸田を歸り來りて亞女其外をつれ行な
るへし○晝頃を殊之外よろしき天氣に成日光の御祭は恐悦之御事也と

乍恐奉存候○夕かたへや頭江戸を歸候に書狀出す菓子等來る先以母上之御不快御氣遣ひ無之御様子に被爲成候由青木の來り不申にてもそこは大に安心なり乍去いとしく御放心之御様子其外ならず御痾氣之由に而むつかしからせられ候由は恐入もいたしかなしくも存候義に御座候乍例別段におさと之御心附には候得共尙又よろしく御心附可被下候○當地之御用向も凡五月節旬前には歸府にも可相成哉に御座候廿四日にはうら賀の廻り可申歟に御座候○菓子之内與助製之羊羹實によろしく候別段なる事家來に上菓子師出來候は大損か大徳かいか

○四月十八日 晴 例刻御役所へ出勤御用今日は多し實にあせを絞るかことし

○十九日 くもり風 追々御用済に付廿五日前に出立いたし可申哉に有之候然るに信濃守を差置參候義いや也この心遠國つとめいたし不申候は不相分候○今朝大棒二千百本一肩にふり申候

○廿日 くもり風 上川傳一郎昨夕參着也これより戸田の參候積之由右に付今日五ツ半時寄合也

○廿一日 快晴 例刻より合○昨日はより合七ツ時過に成夫を見分有之近村の參る途中空腹甚し○武藏の所澤外五ヶ村の新茶をみる十三匁十五匁の品も有人々いまた煮さるうちに葉なみの論をなしたりよりてこゝろして茶をも植なむ味よりもはむきのよきを先めつる也といふ狂歌をいひたり畑に以前なきものを植るによりて麥其外之民食少くなるをおもひて

茶の園と畑はいつしか成行てあさけ夕けに民は飢らむ

○廿二日 晴 今日都筑駿河守出立に而右之跡に井上信濃守引うつる明日左衛門尉筑後守引續御目付出立當月中には伊澤作州も出立なるへし信濃守さそさひしき心細きことに有らむなとおもひつゝ候

○廿三日 くもり 下田御用済に付六半時同所出立いたし梨本に而晝休

いたし湯ヶ嶋に止宿今日下田を梨本村五里之處一里之小鍋峠有下田出はつれ候迄かこ其外は天城山六里は勿論其余みな歩行也湯ヶ嶋といふは少々温泉有故也惣伊豆に古言あるか蛭ヶ小嶋三嶋湯ヶ嶋共に海邊にはあらず橋の小嶋ヶ崎などこれにておもふへし

民藏方順作
に之内御中
孝行御看病
別段なるこ
可及にあら
感服かけに
申候は去り
さからに御
度之はりし

○廿四日 曉より雨ひる前止 六半時湯ヶ嶋村出立いたし候る大仁村にて晝休九ツ半時過三嶋に止宿○けふ大仁を三嶋に途中に十九日附之書狀受取母上段々御手足御きなされ候由大悦候乍去御精力ともしく被爲成候由はいたしかたなし右に付おさと之心配其外中々筆帛の可盡にあらす謝するにことはなし開闡院様樂水院様へ別段之御看病引つきたる事なるに左衛門尉旅行多なれと此一條實におさとの大功莫太也○三嶋宿に吉藏止宿いたし居候る家來共逢申候由○日記之内おくにわか方は参り居候る養生之由且妊身なるへしと之事妊身と相分候上は一日も早く歸すへし高山へ行て家事に心つくすへし妊身と承候る一ツ之心得有おさとより

御心配御行
届故夫をま
上候な事し
市三郎有之候
不文なから
申越候

御咄有へし左衛門尉を開闡院様御妊身中は殊之外なる御行跡の御つゝしみにて父上行道院様夜々さし矢を被成其矢とりを必母上被成候由此れは子ならは武のこゝろかけ母上は日々四書之御復讀被成父上史類史類とは史記三有之候様と之御爲之由太平記太平記太閤記をよみ候る母上へ爲御聞被成候由これは書物すきに被成度と之思召之由右之譯故隣家右之譯故隣に三弦をひき候時は聞へぬかたへ御出被成候由右は常に御物語被成候間みな承り耳にたこのあたりたる位のことなるへけれとするす也おくに別る妊身中氣あらに無之慎ふかく姑に孝行に夫に眞實にしてよく禮節を守候様御教可被下候さてひま有之候は、日本之風に御座候間何にてもよく信心あるへく候ははやり神之類夫にかた輪なる子生れ候るはいたし方無之候得共左も無之候るはかた輪もの生れ候時天道へ申わけ無之候いにしへより胎内にあるうちよりの教と申こと有之候得は父上なといにしへのみちを御守被成たること、難有候間し候左衛門尉なと之不束に而三大尹之重職を被命天下之大任なることを不行届なからいたし候は

京都日記

安政二年九月七日 くもり 京都御造營并大坂砲臺場所御用として六半時江戸小石川市兵衛河岸屋敷出立其時川路左衛門尉源聖謨行季五十五歳也今般は被仰渡之品も有之候ゝ家來共至之減少いたし候ゝ四十五人召連候用人は富塚順作高村俊藏也供立は徒士三人鍵二本侍五人其外平日之通也板橋まで見送として嫡孫川路太郎并次男川路市三郎等乗馬に參る其外大勢參る例之通支度差出申候蕨宿に晝休大宮宿は八半時着いたす○今日は板橋宿迄肩輿其外は皆歩行也御用中如例禁酒故のみたくなし○八日 くもり 六半時大宮宿出立いたし熊谷にいたり止宿也寺領等を加へ十里なるへしはつかに肩輿にのる皆歩行同前也宮崎復太郎大宮まで送來り同所宿外れにゐわかれ申候今日江戸へ參候ゝわか健なる躰等申候

由物語候復太郎眞に奇士也途中其外に奇談有歸候語るへし

○九日 雨 八里余をみちかこに乗たるは二里也其外皆歩行也下田に五里はかりのみち箠に犢鼻迄もぬれたりよりて今般は晒布の蠟引にしたる合羽を用ひたるにぬれ不申候今桐油といふもの出来ては箠のかたは不便かもしるへからす疊の上にも昔このみの軍法者箠をよしと云にはあらぬ歟五里以上雨中を試不申候はしれぬ也今日は拂曉に熊谷宿出立いたし候本庄宿に晝休新町に止宿也本庄の本陣は太郎同道之時太郎大なる雪隠を何也とてあやしみければいたつら兒を入るゝ牢也とて笑ひし事などおもひ出候其時よりはや五年になりぬ太郎かわかことくなる老叟になるもさして長きことにはあらず出精あるへし追々まつたけ多し奈良よりは香少し○此節三度の飯五はいつゝ下はらはりて殊更に健なるを覺申候歩行之藥なることかくの如し

○十日 雨 歩行例之如し○拂曉に新町宿出立いたしくら賀野に晝休

喜三郎申に
はさすもや
造にて自役
コマイ遣ひ
有決近年
之ものにあ
らすと也

板鼻に止宿也くら賀野本陣木嶋喜兵衛宅勝手之方は大同年間に建たりと申也千年余なるへし大工喜三郎を雇徒士につれたればみせたるに別段也とて賞したり鉦はつりのまゝ也と申也鉦といふ字を万葉に遣ひ有しと覺たり奈良のふるてら中々鉦はつりにあらずやりかむなるへし百姓等之家質素に鉦はつりのまゝなるへし

○十一日 雨 拂曉に板鼻宿出立いたし候碓氷御關所に至る改受ること例の如し碓氷峠のそきと申所を建場にて太郎敬次郎同道之時關東とはけしき變如氷なる山風に乳母共驚て小かいまきのまゝ抱てさとう湯をのませ其頃敬次郎一日には十度ツ、も泣て乳母に世話やかせ候事等おもひ出候峠を西信州方に向ひたるかたは十月のけしきにて紅葉の眞さかり也けしき尤よろし妙義山よりたきの落るけしき妙義山の雨雲にて種々をけしきなるいふへからす順作に申付候を寫眞いたさせ候追分宿にをはさと人はみなこたつ也其さむさおもひやるへし今日も御關所を越候峠は不

及申追分宿まで皆歩行也みちあしく田のことしされ共少もくたひれ不申候道中師共驚候由也

○十二日 雨 拂曉追分宿出立いたし候も八幡に晝休いたし七ツ時前長久保へ止宿也○中山仲義江戸詰被申付候も不日に出立いたし候由を以使差越そはこなとくれたり○此邊は今日にて六日の間小やみなく雨ふると申也道わろきこといふへからす今日は少々風邪に付歩行なし信州此節わた入二ツ羽織也

○十三日 微雨午後晴 今曉八ツ半時松平河内守名前之宿次來る別條無之立田岩太郎并石谷因幡守之書狀也○石谷因幡守は當月十日自分名代として下田御取締御用彼地の罷越取扱候に付芙蓉之間におゐて時服三ツ被下之旨申遣候○立田岩太郎書狀之趣に於て十月中に京地は引拂に可相成よし也左候は、大坂は十一月に相濟十二月中旬迄には歸府可申也○右之御用狀之返書差出候も拂曉長久保宿出立いたし和田宿に晝休いた

し今日は風邪快候に付同所を五里八町峠みち皆歩行也峠より三里余をみち下り坂は早キものに於一時壹り余にて諏訪に着いたす○同所に温泉を取よせ候も浴いたす○今日右之通歩行いたし候得共少もつかれ不申候此峠に於て甲冑に於三里のみち歩行いたし候も鎗を合さるへし

○十四日 晴 江戸出立已來今日初天日を見候○拂曉熱川宿出立いたし候も洗馬に晝休いたし熱川宿に止宿也○櫻澤といふ建場に白狼皮の賣物有貳分貳朱也といふ也買はむとしてよくみるに里犬の皮のことし疑ひ買ひ不申候此所にうはばみの頭有實は鮫の頭也といふこと人の知るところ也昔にせ熊膽をうりし頃のものなるへし深山におゐて海魚骨をうる妙甚し○駒かたけ八ツかたけ地藏か岳等みな雪ふりたり朝は寒甚し勿論さとはいまた雪なし紅葉さかり也

○十五日 晴 六半時前に熱川宿出立いたし候も藪原に晝休福嶋に止宿此所に關所有改受ること例のことし今日は朝夕は殊にさむけれと晝

はきその溪も暖也きりくすなき赤ゑんはなと飛也福嶋の此本陣には三十年のうち七度止宿せり此邊は木曾材木を時いく度も往來せし所也福嶋木曾中に宜所也

○十六日 くもり夕雨 六半時福嶋宿出立いたし候も山中の新茶屋にあらひもち五ツを食すこれは太郎敬次郎も食したるへし東海道日坂のわらひもち名物といへ共牛のくそのことしこのわらひもちは水晶のことし夫を十八町行てねさめ也これも太郎敬次郎は知り居るへし蕎麥の名所也大にかけ合して二重箱を食す夫を三里にして須原にいたるこゝにて晝休めし三はいを食す夫を壹里余にして野尻に止宿也木曾中にあはねさめ前後山水の奇觀絶賞と云へし

○十七日 晴 六時過に野尻宿出立候も妻籠に晝休いたし中津川に止宿○こゝの本陣市岡長右衛門方は先年木曾山之節十二日はかり逗留したれば其縁に長崎の參候節上一具遣したるに今日切たてにて着用して

出迎たりさても田舎人の信實なる驚入たり熊皮一枚出之返却しめしたけはもらひ候も金百疋遣候末永く御出入たむことを願候間承置候太郎等後年遠國奉行等に參候は又右之上下を着用出るなるへし

○十八日 晴 拂曉に中津川出立いたし大くてにて晝休みたけに止宿○十里三十町也内一里乘輿其余皆歩行也十三峠まけ坂七ツ其外之險岨勿論歩行早足に七ツ時着也少もくたひれ不申候御安心可被下候

○十九日 晴 六半時御たけ出立いたし候も鵜沼に晝休いたし加納に止宿いたす○太田鵜沼の間勝山の前後殊更よろしきけしき也觀音岩東のかと地震の節かけたり實に驚へし○加納は永井飛前守城下也よき本陣也先年太郎敬次郎召連候節晝休にていたつらすへからさるよし等申聞候事などおもひ出候○鵜沼と六軒茶屋の間に美濃郡代岩田鍬三郎手代出る村田延四郎と申也顔にこゝろ當有承は村田道四郎悴也と申也市川衣次郎い詞かけ遣し候

○廿日 晴 七ツ時加納出立いたし候^も赤坂に^も晝休いたし醒^ケ井^に着いたす本陣の庭に山裾に^も大なる池清水也谷川魚みゆるさめか井の名空しからず候途中に^も松平大膳太夫に行逢申候御威光難有候○戸田采女正松平時之助竹中主殿より使者所々^に出る

○廿一日 晴 曉醒^ケ井宿出立いたし候^も高宮に^も晝休武佐に止宿○此節はいつ方もまつたけ御所かき多ければ精進を一向に忘れたるかとししめしの大なるもの多家來土瓶を買て蒸くる^も也清水花といふたてばにてやきいものごとくにまつたけをうる也○けふ摺はり峠をこゆる湖水みわたしたるけしき詩歌の名所なればふしこそなけれさつた山にもまさるへし

○九月廿二日 晴 七ツ時^に出立に^も草津に^も晝休いたしこゝまでは例^に替^へ候^も膳所^の大手前に^も家老出居候間下乗候^も挨拶申述候^も八ツ時大津^に着いたす京都^に御勘定方御普請役参り其外御勘定所支配^に町人等多

く来る○近江に^もは田中^にかやなとをつり住居候^も稻をかりもみに仕立申候大和などにもなきこと也かりほの庵の遺風なるへし例^に村しくれ寒木曾より甚し今日も晴ながら雨は少々宛三度也

たひ衣かさねても尙肌さむしひえに近かゝるしるしなるらむ
いにしへの都をかくとしのはれぬおもかけのこす村しくれかな

○廿三日 晴 八ツ半時^に供揃に^も大津宿出立いたし候^も三條のけあけといふ所に^も麻上下に着替三條の大橋より徒三人鑓壹本牽馬に供を改候^も浅野中務少輔方^に参る同人麻上下に^も出迎中奥^に通し料理出る

四とせあまりわかれしともにくくりあひていつれより先かたりそめなむ

右^にうたの通に^も一わたりしはなし中に刻限に成浅野^に六半時所司代^に所司代^に参候^も御機嫌伺^に式有^之無滞相濟此^に二度也既^候夫^に町奉行禁裏附^に廻勤いたす二條にて都筑立田其外に逢申候後院仙洞御所^に御事也之^に参所^に参る御普

請所 御所は九分通之御出来也 廿七日迄御修法中に付 御築地之外より仰奉る
也 内裡には参り不申候 によくも御出来のみけしき也 當今にも 叡慮不斜御こと 近日参 内候而
御機嫌伺之義禁裏附を以申上る

武藏野の千くさの末の露の身に大うちやまをあふくかしこさ

都筑の上り候而面謁之積なりしか晝後頭痛氣之所追々甚敷都筑方の参
候節は眼くらむはかりにいたみ候間其こと申候而中座にいたし京都寺町
通押小路上ル所日蓮宗之本山妙満寺に着いたす少も起候而居られ不申候
に付直に平臥いたす追々人参 花井隆助も来る羽田健左衛門同 御城代采女正
殿を御待まうけに而御内使者有之上田角右衛門逢不申候而は難成 御直書
等之譯有之頭を押へなから面會いたす相濟候而急速針醫あんなと申遣
ス追々来るいかに頭痛堪かね申候夜半便所に行たるに額にあふら汗有
よりて用人共之漢醫業の上手呼寄可申旨申遣ス 京都九分
は蘭醫也
○廿四日 晴 御場所は御修法中に付無之在宿也○明六時より少々頭痛

萬之店通出 水之下町 新大村達吉 通二丁目丸 丸太町通大 針政尾 一

よろし俊藏順作などもみくれ申候 参り候あんな高まんにて こゝろよく相成候
に付茶つけ三はいを食すます / こゝろよく相成これにては傷寒ならさ
ること決したり醫師大村達吉と申候もの来る 漢にして蘭をもいたす恒庵 疹察
之才氣學問有之位之男也 之上さして之事は無之候旨に而小サイコチモ湯のとき薬に合羊角をい
れたるをくれ申候夕かたにいたります / よろし鯛塩やきを漸のこと我
慢いたし候而たんと不食くらゐること也

○廿五日 晴 今日はこのよろし出勤之積供揃を申付たれと用人共不承
知其外立田岩太郎も強而申越候旨あれは宅調いたす○大村達吉来る最
早よろし明日は不参旨申之同人と醫論漢蘭之論承るよくわかる也才氣に
て取廻すなるへし○所司代はしめ所々を看来るみな 上の御めくみ也○
青蓮院宮に御使上る此節は 禁裏の御修法の御導師にて日々之参 内御
留守也御殿向御家來等なら一乘院之類にあらず立派なること也と申也
○廿六日 雨 今日は全快也よりて四ツ時より徒士三人侍三人に而後院

之之仙洞御所會所之參る妙滿寺之は八町はかり也寺町御門と申候所之入也御門は有と御門番所といふものはなし御別段なる御事也 參内之事廿八日九日之内に之夫之皇后之御所之も參り關白殿下之も參候事之由也

○廿七日 くもり 例刻後院之會所之出勤退散より二條之亭之參る淡州御逢有之くれ時前に歸る○京都の女をみるに兒を負ひ水をひさけ行ものすらみやひ姿あるかことしまして紅裾金襟の娘などは晝かくかことし江戸のたな尻のこしもとくしまきにて備前之とくりのことくなる乳をふらふらといたしはたぬきにて歩行かゝなどはなきかことしけにもいにしへより京の女といふも宜なりけり其遺風今猶掬すへし吾妻男といふは其士氣あるをいふにて万葉家持のうたかと覺額に矢は立とも脊には不負なといひ稱たるか也今其遺風有やいかに卑ものゝ諺に女まくるふくりなしと申こと有當今の士風いにしへに比していかゝあるへき

○廿八日 晴 例刻之御場所之參り紫震之殿清涼殿を之はしめに之所々見廻

る源氏物語さまなとけにもとおもふこと多し難有御事には 禁裏の常の御坐所其外 准后の宮の御坐所對の屋等にいたるまでみることに難相成場所みさるといふことなし關東とはいとことなることにて右故に關東之思召之深きまでおもひ出て感歎の外他事なし○寶藏院之三田權平并春悅事柳田土佐之都立派になりて來る日くれ頃はなし中地震甚しみな庭へ逸出したり春悅は椽より轉ひ落高村俊藏入湯中はたかに之駈出すなど其騒き大かたならず候幸ひにて不長して止申候○神嘉殿飛香舍桐壺などいふ所有對の屋といふはすけの局也相對して十二ヶ所有みな上段附に之彩色畫はり附之立派なるもの也御降誕之御方々すけの局にて御養ひ申上るとは不審なることゝおもひたるにこれにてはいか様なる御方之御坐所にてもよろしと關東之御儉素にてかゝる御場所建進せらるゝとは難有御事也○土佐之都は止宿させて按摩いたさせ申候京大坂江戸長崎の按摩に土佐之都のことくなるものなしいろゝの話にて聞に土佐之都も取締役といふ

ものをいたし役金はかりも十兩はかりになるよし也按摩中に喜三郎農業事多し時なれと一寸御目見とて五ツ頃に来る又も御目通難有とて只泣になく也十二里余日つけに来る達者なる老人也土佐之都一度のみ料貳朱遣し候外に金貳分遣し候喜三郎水や川二升もち来る二分遣し候この類此度は十兩にては無覺束法橋一乗之弟子悴等迄来る案外至極也○青蓮院宮御こゝろまちに御待被成候處御老中方は相伺候處罷出候に不及旨之御差圖之旨申上たるに大なる御失望にて青蓮院宮には六ヶ敷とて南都一乘院宮御使之由に一乘院宮より被召連候御家來を被遣候御菓子等被下之左衛門尉を呼候義不相成候は、富塚順作高村俊藏を近日差出可申南都々二條宰相を呼寄候其上に被仰下旨も有之候由昨日御近習之もの來り申し候くれ／＼も恐入たる御事也○中條良藏方には疫邪被行候良藏娘并甚之助病死良藏實之悴も此節至る六ヶ敷と之事也○青蓮院宮は御身上よろし今般之御導師にも御米三百石被進候

○廿九日 晴 午刻參 内いたす今朝より御清同前に勿論清服にいたすこれは尊 王室被成候は 將軍家之御職務也其家來たらむもの手をつくすへき丈之事は可致とて如此也○御取次と申候地下之人は 御機嫌奉伺候旨申之其ものより傳 奏衆に申立候被披露に可被及旨傳 奏衆之達し也 禁裡御機嫌を左衛門尉か奉伺之義御披露に相成候とは難有事也○御上棟相濟候爲御祝義 禁裏は三種一荷 准后より二種一荷被下之并左衛門尉初参 内之故を以御酒御吸物被下之御肴は白木臺へからすみ氷こむにやくをもり立檜之木の枝をさしたる也御シタ、メ被下候由に御飯被下之候右之御禮として鷹司關白殿兩傳 奏に参り申候關白殿には車よせに三通りしき出し有之其右之敷出しより上り候取次は申置也くるまよせ敷居きはまで送り申候御用中例之通禁酒なれと 禁裡之被下物之事故歸宅之上頂戴之家來にも爲戴候○南都は疫邪被行中條甚之助病死之由に付疫病よけとして與力共方の拜領之するめ遣し候

○晦日 雨 大佛境内養源院 御位牌所知恩院 御位牌所の参拜當知恩院大僧正は蓮臺寺役僧隆道と申候節公事を持出し吟味いたし役者に成度々手合いたし鴻巣勝願寺の住職候も右之縁に音信なといたし候故参候をよろこひ候而顔を見候とこれはくくと申候而昔はなしをはしめ隆道は大僧正彌吉様は御勘定奉行之左衛門尉サマ也なと申候而一山之大衆次之間に連坐いたし候所に大聲にいろくと咄いたし別段に菓子なとくれ申候めつらしき事也○夜分になり食事いたす松茸とかも茶碗蒸を俊藏考に拵爲給申候かゝるうまきもの生而初給申候絶品といふへし

○十月朔日 くもり 紅葉やよし仙洞孝格天皇御所は今はやけて御普請之細工場となりたりされと御庭のけしきはそのまゝ也
いにしへの錦のそとと御園なるもみちはあはれふかく染けり

などおもひつゝけたり夕かたの東山のけしきと御庭御築地のもみちの色みわたしたるけしきは實に別段なること也おさとにみせし
○二日 くもり 大坂より書状來る來る七日大坂着に十八日歸京之積申來るかくの如くなれば遅く候とも十二月二日三日之歸府なるへし○所々先格に蒸菓子參るいかにしてもカヒ生るわけ也よりて徒之もの共迄は今夕菓子遣す鶴匠鷹匠役之末と申候子孫ののどを干候かことし可歎可恐

○三日 晴 例之通御普請所に参候而御普請坊つき後院孝格天皇仙洞に被爲成候爲皇居之大庭見廻りいたす自然之山を開き池を大に穿ちたるものにて古木大石多く其けしきいふへからす御亭いにしへは所々に有けるか 孝格天皇登仙のちは朽腐るまゝに捨置たれば今はあとなきも多きとなり猶のこれるものきはくち柱斜にて檜皮かやの御屋根に骨あらはさぬはなし御橋の亭にては加賀守殿小田原を被召候而月見の御宴有侍從詩歌を奉られ

し所也と申也これも朽のこりし橋ありて桁はかりはつかにのこれり田植を御覽之亭有これは亭の前二三間前より田を開きて早苗の頃は天領の百姓之兒女來りてうたひ舞ひて田植するよし也この亭もくち倒いにしへのすかたののこれるは汀の松のみとりなるもみちのそめたるのみなるへし古木のさくらともみちことに多し御庭にたけ類も生るなるへししめしとりて芝の上のせたるをもみたり四季の御慰はこゝにてことかゝせらるへくとはみえずしかしあれにあればいふへくもあらねは人々かしこくもみな涙を催すはかり也○紀州沖に異國船渡來にて御かため大騒之由内廻り之もの注進有之候旨中書被申候大に驚申候この始末によりてまた大坂にて難波江のはるの霞をやみるらむと大に歎息也夢ならばとくさめよといふのみ也

○四日 晴 所司代より遠乗の御誘引有候得共出立前に付御斷申上候而二條御城内見置として參る二之丸御本丸共にあり御本丸は寛政之出火にやけて二之丸計也され共二之丸ははしめに出來 天子の 行幸も被爲在候處なれば御立派也御庭は小堀遠江守の造りたりと申也 行幸ありし故歟御唐門ありて則四ツ足門と申かた也探幽興意等之畫也御書屋有唐戸に而立派なる御事也 東照宮 台徳院様 大猷院様御參 内に被召候御車其まゝ有 東照宮は黒漆計 台徳院様 大猷院様は御まき繪也元和寛永と段々御立派なるかことしかしこくも

御車のこかねのあやにおのつから御世のすかたは顯にけり
 なとゝ心のうちにおもひつゝけ申候御城内は大番頭加納備中守近藤遠江守案内也夫々二條御藏に參る八ツ半時歸宅也○南都を西之坂穢多東之坂穢多來りて差出ものいたすいづれも金子遣す陳玄堂助藏來る同斷也穢多伊兵衛は革甲冑をこしらへ候教受候恩を謝し陳玄堂は唐墨製之教受たる故を以也伊兵衛革甲冑は周禮考工記に符合せり

○五日 晴 五ツ半時所司代に參る本壽院様之恐悦を申上候間 御朱印

受取に候得共のしめ麻也○今日までに南都を來候もの與力醫者出入之町人并奉行所之立入候穢多頭長吏其外にいたるまでに追々參り酒菓子なら人形なとくれ申候夫々の別なら之人は金子并衣類又は品物を遣し候る及挨拶候よほと散財也乍去難有事也其散財容易に出來不申候○健左衛門并長吏菅之助は並之外別段差出物いたす健左衛門は龜あや之小袖菅之助は目錄遣す

○六日 晴 四ツ半時過京地出立いたし候る供揃に相成候節二條宰相之下人汗たらけに成かけ來る唯今宰相こと佐々木育介一同罷出候と之事也よりてしはし相待居候内兩人來る立なから同前とりつまみはなし申候これは左衛門尉に御用有之候由に青蓮院宮二條宰相を南都一乘院宮より被召候處出京之途中左衛門尉之馬其外先キ供之ものに行逢候間驚て參りたるとの事也故に青蓮院宮を被仰下候旨は聞へすふしみへ七ツ時に參り六ツ時前乘船いたし候處ならの與力羽田健左衛門例之惣吉をともしつれ

候るこゝに來り大坂に送るとて乗船いたし申候伏見之縁者方に酒のみ大酔いたし候る例之大聲に咄す也つきぬわかれなれと夜ふねにてよすからはなすかうれしとて只なきに泣也此翁六十三眼氣わろしされ共ならを西洋銃に改候る大砲を鑄立候積に卿雲清八を尋ねて江川之弟子になりたしとて大坂迄も行也心かけ別段也

○七日 晴 ふしみより大坂迄舟行土圭三十八分余也○大坂に着いたし候處曉八ツ半時也天滿組惣會所也龜末之義はいとひ不申候間先格に不及町入用不拘様いたし可申旨書付を以申渡着候と不用之場所之懸アンドンなどみな爲消申候○江戸大地震大火之旨追々注進來る心痛せり其内境奉行并大坂町奉行之宅狀に 御城御別狀なしと之事しるし有之安心せり伊勢守殿御用多河内守いかゝいたし候哉など案事申候乍去いたし方無之候○宅は御病人如何に候哉御手足御不自由に付御養母さま之御病氣殊に案事られ申候おさと不相替之苦勞遠察いたし候しかし申候迄も無之左衛門

尉よりも世話行届候人故まかせ置候。夫は一ツの天幸也。○大坂之人々曉七ツ時頃來りはしめ夜四ツ半時迄一寸もひまなし上は奉行御城代之御家來其外より學者廣瀬謙吉大熊文叔其外醫者等にいたるまで夥こと也。家來共も放心するかことし俊藏初申候今日は御前之物を一向に氣にかけすよく御取廻し被成候に内實感心仕候と也。順作俊藏は目のくほむほといそかしならを參り候羽田謙左衛門狹川隆助京都を參候さや七郎兵衛さて大坂はかくの如きものかと只あきれにあきれたり考ても益なしとてよしあしにこゝろくたくな難波かた千里の外にたひねする身よ

いかゝなと即吟したれと家來共あきれてことはなし歌のわろければ也

○八日 くもり。ふくさ麻にて御城入いたし御城代之表向を拜顔畢。居間に料理給り別懸なること町奉行御用談有之候に付八ツ時前に御役所の參候様くれく申候處七ツ時前まで相懸る。○三日出之宅狀京都を届來候。家内一同無別條別當之家内又太郎母之怪我等相分り出火之事等詳

に承知家來共には落涙するもの有先以御養母様無御別條はおさと并家來共之骨折なるへしと先以之歎息中之喜ひ也。○貞助之兒來る六才也利口なる躰也。そはに呼菓子を爲給且目ろく等遣し候

○九日 くもり夕晴午後大雨。七ツ時大坂出立いたし候。住吉を參り岸松亭の小休おさととも參り候由也。夫を境に參り關出雲守一同御臺場見分。夫を大坂木津川口の參り御臺場と可相成地所見分いたし申候

すみよしの名にしまことのかみならば御代うらやすに千世ももりませゑみし等か船打たくこゝろをはあはれうけませすみよしの神

○十日 晴。つもり新田出立候。天保山に佐々木久須美と落合晝休いたし七ツ時前尼ヶ崎に止宿なり。○中條良藏疫邪に一昨々日病死之由可憐事也。なら與力之内文藻有之候もの良藏一人也。大和志其外之義とても出來申間敷候。此次謙左衛門其次半之丞也。末永くならのこと可致は羽田直之進なるへし橋本喜久右衛門宜といへ共長壽之義いかゝあるへき半之丞此

節はよろしといへ共受合かね候され共謙左衛門也勤功別段に付過日も直書を以忠孝之事申遣し候

○十一日 くもり夕雨 五ツ時前尼ヶ崎村出立いたし候而西宮海岸に而久須美と落合砲臺場所見分いたし候而西宮に而晝休いたしみかけ村に止宿此邊まさ宗さるわかなといふよき酒を造る所也禁酒故いたし方なし○今日之宿は狩野喜右衛門と申候もの也冥加金千兩を奉ると申也酒をつくること表向壹万石ツ、之由米壹万石をつふすときは三万石之酒出來るなへし實は十万樽も江戸に出すなるへし至而儉約なるうち也悴木綿紋附に而家來之給士する也奇談有香物よきならつけ也とおもひて一口に物したるに其塩辛さいふへからす無余義吐したりそれにて其常を思ふへし湯殿は今般新につくりたり全茶室のことし四角に而五尺はかり之湯つほに而わきにせむ有夫を拔は湯出ることくに仕かけたりあまりめつらしく且湯殿のあらめつらしきこと故旅中之慰かてら入湯せり

○十二日 雨又くもり 出かけ酒造くらをみる廿五間にては六間有余もあるへし其くら十二戸前ある也驚へきこと也夫より兵庫に參る和田みさきの御臺場繩はり一覽いたし其外相濟候而九ツ時過也よりて船を申付候而船にて大坂に歸り申候○兵庫は至而にきやかなる地也人別ならんも多し夫に而千石の村也實に可驚

○十月十三日 くもり 今日宅調也例之通人々來り大坂之地役其外來りて夜五ツ半時過までしはしもひまなし坂本鉉之助來る例之通議論夜ふくるまで居申候

○十四日 晴 此節江戸の大地震之次第追々承り實に未曾有之大變一類之内變死なきを幸ひとす三万人はかり之變死といふはまことかされ共知ル人に多きを以おもへはいつはりもあらしなとおもひ候○水府老公の御側用人藤田誠之進はわか留役たりし時より知ル人にて老公の御下向も必此人を以仰下されければいろく物語ことも多し出立前も來りてゆ

る／＼と酒くみて分に過るかことくなれば盃を納めむといひしをしはしのわかれとはいひなから人の上はしれぬもの也とて常よりも親敷かたり今一壺の酒をあたいめ給はれとてのみたりしことなとおもひて

ふしの間といひしは夢か難波津になかきわかれの便かなしも

とおもひ候○昨日は旅中見舞のもの所々なつとひ來りて中間までにも物給させたり江戸の此節のことおもひ出てかゝることも江戸はいかにおもへは食するもなか／＼にいや也

○十五日 晴 大坂御城代見置として參る以前拜見と違ひこゝも地震にゐる所々御損し探幽其外上手の畫はり附破レ申候乍去大造にはあらず米倉丹後守方にゐる晝辨當給候ゐる御城代に參る兼る采女正殿の外にゐる手間取不申早く參候へとの御事尼ヶ崎又右衛門を以被仰下たれば早々參る不相替御懇の御事也右故に御太鼓前迄居申候

○十六日 晴 久須美より合として參る○御城代をつかさめ御はなむ

けとして被下之○江戸の人々方には委細之書面來るよし也幸三郎などひま人も何故に書送らぬや例之等閑家可歎

○十七日 雨 夕かたより兩奉行并御城代玄關迄暇乞として參る佐々木信州にてはしはしとて離盃等有され共例之通なればはつかはかりにて歸りぬ

○十八日 雨 七ツ半時過乗船にて京師に向參り申候さても今般之いそかしさ別段也これは上かたに知ル人多ければ也參 内いたし候ゐる御取次其外に知ル人に相成鷹司殿兩傳 奏は御用に付ゐる事也以前より知ル人は青蓮院宮知恩院大僧正京攝之奉行所司代御城代此御二人は二代 或は 禁裏附京攝の與力同心奈良之與力同心京攝ならの百姓町人共坊官醫者儒者藩士末々にいたり候ゐるはあんな長吏或は甲冑并くらつくりのこと傳へたる穢多まで來りて夫々之を挨拶等かきりなし可笑は蒸菓子之類にこまりたる也今般之御用此散財よほとこの事也されと古郷にしきの意もありて

難有候

○十九日 晴 昨夜乗出候をふしみに着まで八十歩余也時過 ○さつまや仁兵衛と申候ものは別段なる惣年寄に昨年のしめ御免になりたりしかるに吐血にて臥居候而不來江戸は市中のこと必月々申來る也病氣はよほとより快候由六十八歳にて吐血恐らくは老病となるへしよりて御城代を被下たる鯉節の煮たるを遣し手昏も遣し可致されと自筆にてと存候間消息と俗文之間のときことをしるして仁翁へと宛源左衛カ門と別にしるしたり其末へ

老松の霜を凌きて万世の春かさぬるも難波津脱カのため

としるしたりかれみて只なきになきて喜ひたりと也舟中の慰にとて重つめに添て一とくり送たりたり二升入はかりの備前とくりへ蠣としるしたり家來を内氣早きものはみてかれ旅中御禁酒のことをしりてことさらにかきとしるして酒奉りたるへしと申故にかゝることする仁兵衛ならば不便は不加候酒とあやまり盗のみてかきをのへ引かけたらむには後世膝栗

毛の跡をしるすものあらは必記さるへし後世彌次郎キタ八の董狐なしといふへからすとて笑ひたりかきは土器へ入くちをかたくすれはいつ迄も保よし也タモツ ○ふしみにて晝休いたし候を京てら町日蓮宗本山妙満寺に八ツ半時着也 ○法隆寺普門院來候を摩利支天を鞭と申候を五寸はかりなる銅鞭をくれたりかれ奇僧不相替候

○廿日 晴 所司代に罷出候を 御朱印御預ケ申上候を夫を御普請所に廻る御繪少々残りたる計也これにては彌來月十日前に出立となるへし ○立田岩太郎は地震に姉孫壹人末孫壹人即死嫡養子録助怪我と承候間岩太郎殊更によき人六十二歳を老人殊に氣を毒にてはなしも出來不申候 ○廿一日 くもりしくれにてさひし ○棒かしの孫地震にて即死を由あはれなること也目錄遺す女房より可憐孫也とて泣也 ○法隆寺を普門院かうた

別れても千とせの齡ひたもちゆく君にいくたひあふの松かけ

此歌よく聞へたりしかるにはし書に久々御面にかゝり或はよみて侍るな
としるしたるいかゝ元來狂庵なる僧故也

○廿二日 晴 昨日は江戸を書狀來る大地震之委細之書付并おさと之日
記に而詳に承知もおさと不相替ながら御養母様之御取扱行届たる躰其外
民藏新右衛門困苦出精之様子與助之骨折共委細に承知いたし候一同家來
共には出精之段別而此變事に而相顯候旨厚おさと御傳可被下候太郎之
土藏にて危く幸にまぬかれ候義等天運と難有候敬次郎之乳母にはなれ候
躰いとくあはれにて承候もの共みなく涙を落し申候敬次郎之躰人情
有之候に付行末たのもしくと存候義に御座候又太郎之母可憐辰五郎之妻
共に實に泪之種也妻を次にいたし候辰五郎之二疋之馬を助候始末感心
也まづく親族共一同一人之怪我も無之を祝し申候

○十月廿三日 くもり夜雨 例刻出勤○夜所司代をかも雜煮來る夥事に
而仕方なし家來一同に爲給申候○宮田菅太郎來る來月十日前には歸府之

積に付菓子并土産に買置候木綿等たのみ遣す

○廿四日 雨 大坂を歸來之面々砲臺等之しらへに付今朝より來る菅太
郎いろいろと届物たのみ遣し候同人にはなむけにまさ繪鏝大小遣す御
普請役一同には金貳百疋ツ、遣し候石川忠之助へは返物遣し候○昨夜所
司代を鴨雜煮被下候を給今朝も又もちを給申候味ことよろし今般之御
用は入用よほかかりたれと食物には差支なし○又南都を惣代として菅
之助來り江戸之地震の見舞を申不遠出立の殘惜きとて泣かなしみ京都に
二三日逗留して居る也南都の人々不思議に深切也

○廿五日 晴 例刻御場所に參る紫震殿清凉殿小御所常御所御學問所其
外共に御繪出來にて御はり附御整になりたれば其御立派なることいふへ
からす眼を驚せり先ツ紫震殿はあけひとみ作りにて檜皮ふき也しら木作
にて御天井もなし御堂御宮をかねたるものゝ如し賢相御障子といふは則
からかみ也今の障子といふは則あかり障子也障トハ隔の意子は扇子のことくつけ
もの也衝立といふものも障子といふ也御手水所と御湯殿の隔の御つい立に

猫の繪かきたるを申也 清涼殿と申は小まりに仕切て御寢所御よるの弘徽殿きりつ
ほ朝かれいひの間御湯殿御手水所おにの間くしかた窓等有御湯殿と申は
名はかりとみえて金の御繪はり附立派なること也いつ方も御疊は常にな
し常御殿を奥をかたはいつ方も御疊をしく也御國の古實に明なるものに
聞はよき學問なるへし日々御寢所其外を歩行すること恐多し神璽間と申
は常御所の御上段なり服中に付御かまち外より差圖いたし申候内侍所も
刀自の詰所其外迄いづれも參候得共服中は御階段下より差圖いたすこれ
又 禁庭より之御沙汰也

○廿六日 晴 所司代に參り夫を御普請所に廻る 内裏の御隣に 東山
院之御所跡有今は明き地なり右之御池にみつちすみて 東山院を害し奉
りて 崩御也其みつち今にすみてみるものは必死すとて古池によりつく
ものもなし今般御普請に付やけ土を池のほとりに捨ることいかゝあるへ
しと 禁裏附長谷川肥前存命中申したるにいつしか人足共土を捨て池も

うつもれたり也 東山院の御ことは偽申迄もあるまじされとよからぬ
野人共こゝろなき申傳もあるもの也可驚事也

○廿七日 晴 例刻御場所に出る不相替紫震殿はしめ相廻る漢竹吳竹と
いふもの清涼殿と覺植附有漢竹といふものは布袋竹に似たり吳竹といふ
ものはよしのことし皮はなし○寶藏院之後見滿田權平地震見廻として來
る奥様市三郎にも宜と申候○但州北條をおこと名前に旅中見舞の菓子
來る平次郎かたき男感心也

○廿八日 晴 御目付御代官來りて御普請所に寄合いたし申候これにて
は無間も所司代之御見分となる也

○廿九日 晴 右同斷御所外廻り見分有之候○今日近衛殿御忍ひに乘
切として御出之由也途中に御見受申候麻上下之馬役御先乗いたし候而麻
上下之侍貳人御附添申上御當人は御衣冠也なるればなれてくるしからぬ
ものとみえたり關東ならば千部御法事之節にかきりたること也これも侍

從以上之如し此節官家之馬流行也宅に借馬之乗馬等多有之候

○十一月朔日 晴 六半時之出門に後院之會所一同參る無間も淡路守殿御出也夫の御同人に御附添申上候る會所の上場所に參る紫震殿其外御覽有之思召無之旨被仰聞之右相濟候る御返りには淡路守殿は武家參内之玄關に御別レ申上候る一同は會所に引右に御用相決候間來ル七日出立之義組頭に申談候

○二日 晴 傳 奏衆御同道に所司代御場所に被參候間六半時過出門に參る畢る傳 奏衆を御出來方宜別段骨折之旨被申候

○三日 晴 のしめ麻上下に新造 内裏に參候る申口之間と申候常御所御寢間之御次に懸り一同列坐のしを三方のせ有之候右を前にいたし禁裏附へ引渡之義左衛門尉を申達候此申口之間と申候所は御寢殿之御次に御寢之間の御帳臺のとき所は則 劍璽之間也右之御間其外へ御

簾かけ渡し御立派なること也かゝる御場所子孫迄もみることなきそ恐悦をかきり也けるとおもへは中々にのこり多く仙境をわかるゝこゝろ也ふり返り々所々拜見ながら退去也わた殿より瀧のみゆる御庭のけしきなど常よりは又別段なるも不思議なる事也

○十一月四日 くもり又晴あられふる 宅調に夫々のかた附ものいたす○昨日は所司代に御届すみより淺野中書に參候る奥方にも面會嫡子九歳娘十五六ツいづれも健なる躰を見受申候これは歸府候は老人にたり可申旨出立前之約束あれは也○攝州之大工組頭といふもの玄關に來り候る書を乞申候七十七歳にて今般之御用勤たるか御用果候る歸候也強る染筆を乞候る不歸候間江戸表を可贈遣旨申候る歸し申候われらか書をかく乞馬鹿もの有也しかし老人不便也

○五日 くもり 昨夕かたはしはしなからよほと雪也比えの山あかりし也○のしめ麻に巳刻假

皇居に参 内いたす傳奏衆仰を傳られて
主上は十牀和歌の御卷物并 御召料之由御緋被下之 准后宮よりは紅
白之卷さや被下之別段速に御出來之廉に御綿被下之御料理被下之鷹司
殿兩傳 奏の御禮として参る○十牀和歌は川路左衛門尉と申候小札を
しるし表向

叡覽之廉に御奥の廻り候上に御被下候由也重き御事之由 姫宮にても御
はなむけには和歌の御手かゝみ之由重き事之由御賄頭はなし也○今日仰
を傳られ候は三條大納言實萬卿東坊城前大納言聰長卿也被下候緋は羽二
重也緋は布衣以上計也組頭には縮緬被下緋は御緋と申其外には御字なし
しかれば御召料相違なし

○六日 くもり 明日出立に付暇乞として都筑駿河守方の参候御奥の通
り申候妻并娘孫に逢候御退散 御朱印受取として所司代に参る 御所に
御暇乞之 御機嫌伺之留不分明に付 禁裏附を以問合候處 御所御取次

之方に柳生主膳正御暇乞として参 内いたし候旨之留有之候に付左衛門
尉も罷出可申處今日は 御所之御日柄に御祝ひ之御料理に御差支明日
之出立相延し候も此節大地震にて御用多にも候間傳 奏衆之取計を以昨
日 御機嫌相伺候積に相成あまりに御別段之御取計に御勿躰なく恐入候
○宅狀來る○今日は暇乞として参候もの共地役又は御普請懸等之類は勿
論兩奉行兩御附等來候御面談いたし候間夕かたの混雜いふへからず候
○七日 くもり夕雨 七時半時京都寺町妙顯寺出立いたし候御三條けあ
けにて小休いたす元來は天津まで支配御代官其外共來る先格なれと斷た
るによりてこゝに來る羽田健左衛門の甥京之與力桂正作其外御普請取扱
之町人御勘定所之御用達共も來る夥し其所に御勘定組頭其外來る早々け
あけを出立候御大津にいたる同所之御代官石原清一郎來るこゝにも見送
之人々多しならの長吏などは別御斷たるに矢張來りて路傍に平服して居
たり○草津に御晝休いたし七時半時前石部へ止宿也歩行したるにくたひ

れたり長右衛門は足弱のお守をつれてこゝまではみちはりたるなるへし
○八日 くもり 拂曉石部宿出立いたし候而土山に晝休いたし關に止
宿也奈良へ參候節はこゝにて夫婦奈良京都と引分れたりけふは鈴鹿山に
て俄に大風雲起りて雨甚し關へ參候前より快晴也しかし風吹ていとさむ
し○昨夜御代官多羅尾久右衛門來る伊賀越御難のみちを問ふに今も荒か
たは分り居候由申之其時まで屋敷内に安置いたし置候將軍地藏を 東照
宮へ奉りたるに御信仰被遊夫を今の江戸愛宕山に御勸請有し也右に付江
戸あたこゝは出府いたし候と御届前に先參詣いたし候事に而同所を佛具
はみな多羅尾の定紋附也と申たり舊家別段なる事也

○十一月九日 くもり折々風雨

村しくれさそへる風の肌さむみあすは高根に雪をみるらむ

拂曉に關宿出立いたし候而石薬師にて晝休いたしくれ合に桑名に止宿也

○家來共にかさつをいまして

りきむことかけてもなすなばりつくもいはるもともにたれる名をかし
と戯に申聞候

○十日 晴 六半時過に乗船なきなれと追手也夫故九ツ少々過に宮へ着
いたす錢屋傳左衛門方は暫逗留せしことも有は同所を小休いたす尾州よ
り 御朱印拜見を御人例を通來る也昔其人に 御朱印は何とよみ候哉と
問たるに面色土のことくに成しはし眼をみはり居たるかや、有てこれは
神秘に而人に不語と申故に守護いたし歩行候ものに可秘事やはある印篆
よまむものにしらぬはあらし然るに某は印篆を不存候間承候由申たるに
實は私も存不申候と答て鼠のことくに逃歸たりはや其人よりは三代に及
ふよし也○例を通なるみしほりうりに來るいつも母上に奉りたることお
もひ出ていとかなし

なるみしほりなる身の親にわかれこし空敷しほるわか袂かな

○十一日 晴 七ツ時過なるみ出立候而岡崎に晝休いたし七ツ時頃に

赤坂に止宿例之井上老母由緒に彌一左衛門方也同人に縞ちりめむ一反み
かへり金壹分大黒銀三ツ常嘉之盃一ツ遣す孫三人に目通相願候間大黒一
ツツ、扇子三本ツ、遣し候

○十二日 晴 拂曉に赤坂宿出立いたし候而吉田宿にて晝休八ツ半時に
新井の着○ならへ參候節三月十二日に御養父母其外一同こゝに休みしこ
とおもひ出候

○十三日 曉七ツ時起候處雨ふりて電光有夜明雨止て新居出立今切乗船
したるに海中なかはにいたり山くもり虹吹てけしきあしゝいかにとおも
ふうちに大早手風おとし來り雨ふり出したりことくく雨戸を閉たれ
と吹放さむとする也戸外るれば必船かたふくへしとおもひて一同に雨
戸を押へ居たりますく風甚し乍去幸ひにして東岸近くなりたれば無故
上陸して一同つゝかなし舞坂にいたる追々御勘定組頭御普請役まで無恙
よしを祝して來る濱松にて晝休七ツ時見附宿の着いたす長崎奉行相宿に
荒尾石見

なりたれば來る其外長崎に參候御勘定等追々來る御代官林伊太郎來る夜
四ツ時迄大混雜かきりなし

○十四日 快晴午後雨 拂曉に見附宿出立いたし候而懸川に晝休八
ツ半時過金谷へ着いたし申候今夕元來嶋田へ可渡所也冬故に子細もあら
しと其儘にいたし置候元來は川をはわたり嶺は麓まで行て翌朝出かけに
可越様にするもの也○懸川宿に地震は第一とみえたり五万石之城下町不
潰家一軒もなし其上出火にてよほとやけたり九月廿九日地震も強新敷
出來たる本陣再ひ潰れかゝりたるを引起して多く大材を助として有金谷
邊も今に地震有もし強くゆり出たらは庭に立退くれ候様宿役人共願出た
り

○十五日 晴風大にさむし 六半時前に金谷宿出立いたし候而大井川を
わたり九十二文川也藤枝に晝休八ツ時まり子に止宿也○今般之かこの者棒頭
はならへ參候時おさとをかつきたるかた目のおやち也よきもの也

○十六日 晴 拂曉にまり子出立いたし候アへ川を越例ニもちをうるみろくの建場にいたる岸孫太夫参り居候ニ縁談其外ニ義申聞る江尻ニ晝休いたし七ツ半前に蒲原に止宿也

○十七日 晴風 曉に蒲原出立いたし候ニ吉原宿ニ晝休三嶋に止宿○江川太郎左衛門参るニら山々三里也菓子など贈り申候故太郎左衛門事をおもひ候ニあはれ也至ニよくわかる十三歳の童子可驚太郎など役にたぬかと歎息也

○十八日 晴風 箱根八里關所ニ外皆歩行也六時に三嶋出立候ニ小田原ニ着は八半時也存外ニ早く本陣ニ大にあはて申候此位ニ事ニは露もくたひれ不申候平日重きものを持候ニ朝又は夜分等二里余にあたるみちを歩行する故なるへし居合刀の目かた壹ニ目錢三ニ文ツ、腰にまく也

○十九日 晴風 六半時小田原出立候ニ大磯ニ晝休八ツ半時藤澤ニ着○大磯宿にて俊藏妻の里さニや伊兵衛よりほうほう十本くれたり目錄遣

す此もの近頃身上宜米の百五十俵も取候ニ商ニ向も賑ニ候由也

○廿日 くもり 六半時藤澤宿出立候ニ藤澤ニ晝休いたし候ニ八ツ時川崎ニ着内着も出来候得共今般は 御黒印を奉行吟味役ニ御渡に付右ニ返上も有之旁岩太郎をまち合せ候

○十一月廿一日 七ツ時頃立田岩太郎入來夫々打合いたし候ニ夫々六ツ時出立いたし候ニ品川宿ニ晝休いたす待受等ニもの壹人も無之候ニこれは嚴敷斷置候故也晝九ツ時歸宅昨夜よりくもり也しか今日は快晴ニ別ニ都合よろしく候

都日記

安政五年正月廿一日 雪 堀田備中守殿別段京都へ 上使御勤に付自
分御目付岩瀬肥後守陪從として出立也御右筆組頭原彌十郎御右筆立田祿
助自分召連候支配向は御勘定組頭高橋平作御勘定日下部勘之丞其外御普
請役共也○雪にて人之難義甚し風邪故肩輿之中に蟄し候る歩行なし風は
つかになれりかこのうちけしからず暖におもひ候も大笑也
○廿二日 晴 よほとさむし七ツ時大磯宿出立いたし候る小田原に晝
休日くれに辛くして箱根へ着也これは常に歩行して覺有故に其心得也し
か風邪に始終かこ故に刻限相違せり御關所手前二十町はかりはかこを
かけさせたり風邪昨日は一段よろしされ共ねはり候はな出候義耳の鳴
こと江戸と同じ今度の風かりそめなから念の入たること此節わかる○畑